ストライクウィッチーズの世界に転生して人型ロボットを造って乗る男の話。

メガテニスト（偽）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルまんまです。

タグは後から展開に合わせて増やしていく予定。

作者は戦争の知識とかはあまり詳しくありません。それでもよろしければ。

後、批判とかご指摘とか感想が有ると嬉しい…嬉しい…。

目次

本編じゃない何か。
本編の筆が乗らないので代わりに書いた話。 1
突発的に悪ふざけで書いた、本編には全く関係しない話。 23
悪ふざけの産物の補足というか付け足しみたいな話。 34
エーススナイパーで学ぶ魔導甲冑 大修正版。 45
本編
第1話 64
第2話 78
第3話 96
第4話 107
第5話 116
第6話 126
第7話 137
第8話 151
第9話（あとがきに色々追加。） 174
第10話 200
第11話 211
第12話 222
第13話 ちょっと改定。 231
14話 246

本編じゃない何か。
本編の筆が乗らないので代わりに書いた話。

１９４５年、ベルギカ共和国、サン・トロン基地。

俺は今ここにいる。なぜここにいるかというと、少し前、別の基地にいた俺は連合国軍からの命令書を受け取った。

それに書いてあることには、

『新型魔導甲冑のテストパイロットとして試験に参加されたし。場所はベルギカ共和国、サン・トロン基地。』

とあった。

これを受け取った当初は困惑していた。なぜなら、サン・トロン基地は航空ウィッチのいる基地、つまり航空基地なのだ。そんなところで新型魔導甲冑のテスト？そう疑問に思うのは不思議ではないだろう。

しかし、命令は命令なので取りあえず移動してここに来た。

到着してすぐに基地の司令室へと向かう。司令室のドアをノックして許可をもらうと、ドアを開けて中に入る。

そこには基地を任されている女性ウィッチの方がいた。
「失礼します。北郷一郎大尉、ただいま到着いたしました。」
「よく来てくださいました。私は今このサン・トロン基地を任されています、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。お会いできて光栄ですわ。」
聞いた事のある名前だった。かの有名な５０１統合戦闘航空団、通称ストライクウィッチーズの隊長を務めていた人物だ。
「こちらこそ、かの有名な５０１統合戦闘航空団の隊長を務めておられたミーナ中佐にお会いできて光栄です。
クルトからよくいろんな話を聞かされましたよ。」
「まあ！クルトはそっちでも元気ですか？よく手紙は届くのですが…。」
「ええ。元気でやってますよ。彼ら整備兵には助けられてます。後、みんなよく演奏を聞かせてもらってます。最近はミーナ中佐に会えなくて寂しいなどとぼやいてました。」
「まあ、まあ！クルトったら！」
恥ずかしそうに顔を赤らめるミーナ中佐。
クルトとはダイナモ作戦時のパ・ド・カレーの撤退戦で知り合った。最後まで残っていた兵士の一人で、民間人がすべて退避するまで一緒に戦い、その後、一緒にブリタニ

アに脱出。無事に脱出したのはいいのだが、
船がブリタニアに着いた直後に、エルベ川近郊にできたネウロイの巣からユトランド半島にネウロイが押し寄せているのを食い止めるために俺たちの部隊が送られることになった際に一緒に行くことになった。
クルト本人は始め、ミーナ中佐を探そうと思ったのだが、ユトランド半島に行く俺たちの話を聞いて、
「そんな話を聞いて僕が戦わずに彼女にあったとしても彼女に合わす顔がない。
あなたがいなければ、おそらく僕はあそこで死んでもう二度とミーナに会えなかった。その恩を返すためにも連れて行ってくれ。」
と言ってついてきた。
「私もあなたのことをクルトからの手紙で聞いていますわ。本当にすごい人だと。
戦う姿はまさにジークフリートを思い起こさせるなんて書いてありました。」
「持ち上げすぎですよ。私もクルトからあなたの戦いぶりをワルキューレのようだなんて聞かされました。
実際に見たことありましたが、噂にたがわぬものでしたよ。」
「まあ！いったいいつのことかしら…。」
「何回かありますが一番最近は1年ほど前のことです。エルベ川近郊にできたネウロイ

の巣にネウロックと呼ばれるネウロイがグラーフツェッペリンを乗っ取って逃げ込んだのを追って、ストライクウィッチーズの皆さんがそのネウロイの巣に突入した時に便乗して、混乱していたネウロイの巣の襲撃圏内に航空ストライカーと魔導甲冑と陸戦ストライカーだけで突入してブラウシュテルマーを狙って破壊して回って即座に撤退したんです。」

「まあ、あの時の！」

ようは電撃的な火事場泥棒的いやがらせである。生産能力を削ってネウロイの巣の戦力を削り取ったのであった。

さすがに大編隊を組んでるわけでもないので上空のネウロイの巣を破壊するなんて真似は到底無理であったが。

反撃が本格化する前に壊せるだけ壊した後はわき目も降らずにすたこらさっさと逃げ出して追撃をかわしたのだった。

そしてその後しばらく、ブラウシュテルマーが修復、ないし投下されて戦力と生産能力の修復が行われないように散発的に嫌がらせを繰り返していた。

具体的には勢力圏内の内部の浅いところに機動力のあるウィッチ部隊だけで突入して引き付けてる間に対瘴気ガスマスクをつけた砲兵による砲撃でブラウシュテルマーがあるところを攻撃して即座に撤退を繰り返すとか。

おかげで警戒が厳しくなったが心なしかネウロイの数が減っている。
エルベ川のネウロイの巣が破壊されればハンブルクが解放されて港が使えるようになる。
バルト海への侵入も視野に入り、北方前線への補給が改善される。
海岸線に沿ってネーデルラントからの陸路での移動や輸送も比較的安全になるのでぜひともあそこは解放してもらいたいのだが…。
いかんせんそんな戦力は俺達の部隊にはない。ないが、報告を受け取った上層部は、『ネーデルラント方面、ブリタニアから出発した艦隊、そしてユトランド方面の3方向からの同時攻撃によりネウロイの巣の破壊する反攻作戦を準備するからそのまま嫌がらせしておいて（意訳）』
とのこと。
上層部の言うことなのでどこまで本気かは知らないが、ちゃんと実行してもらいたいところだ。
大幅に話がずれた。話を戻そう。
「ところで、私は新型魔導甲冑のテストパイロットとして呼ばれたということですが…。」
「ええ、こちらへどうぞ。格納庫で詳しい説明がありますわ。」

ミーナ中佐に案内されてサン・トロン基地の格納庫へと足を進める。
そこにはブリタニア将校とカールスラント将校がいた。見知った顔だ。
猛烈に嫌な予感がした。が、そんな気持ちを押し殺して挨拶をする。
「北郷一郎大尉、ただいま到着いたしました！」
「遠いところご苦労。私はブリタニア空軍のフランク・ホイットルだ。久しぶりだな。」
「アドルフィーネ・ガランド少将だ。よろしく頼む。久しぶりだな、北郷大尉。」
すごい！空軍の将校が二人もいる！魔導甲冑って普通は地上の兵器だから陸軍管轄なはずなのに！
「お久しぶりです…。あの…どうして新型マギウスアーマーのテストに空軍のお二人が…？」
「そこから先は私が説明します。」
一緒にいた人物が発言した。
「カールスラント技術中尉、ウルスラ・ハルトマンです。よろしくお願いします。お久しぶりですね。北郷大尉。」
「ああ、どうも、ご無沙汰してます。」
「まずはこちらをご覧ください。新型マギウスアーマー、その名もブルーセイバーです。
こちらの説明としては、まず、この機体はブリタニアとカールスラントの共同制作と

なります。
ブリタニア軍の極秘研究とその産物である兵器、ウォーロックの…」
「待ってくれ！」
「なんでしょう？」
「軽く極秘とか言っているがそれは聞いてはまずいことなのではないだろうか!?」
「ええ。ですからこのことは内密にするようにお願いします。」
軽い！軽いよ！もうちょっと重々しくいってほしい！
「話を戻します。ウォーロックはその後、事故を起こし、研究を指示していたとレヴァー・マロニー空軍大将は更迭。
しかし、研究は継続されていました。が、研究内容そのものは関係なくて、そのウォーロックの機構に関する技術を転用したものがこちらのブルーセイバーになります。」
「なんとなく想像はつきますがその機構とは…？」
「航空機への変形機構です。」
知ってた。
「ウォーロックは無人人型飛行兵器だったのですが、変形することで航空機形態になり巡行することができました。同じ人型兵器であることからマギウスアーマーへその機

構を採用して航空機形態へと変形することで機動力の上昇を図ったのです。」
「なるほど、しかし、それならなぜカールスラントがかかわってきているのでしょう?」
「それはブルーセイバーに搭載されているエンジンにあります。」
　おっと?なんかもう嫌な予感がしてきたぞ?
「ブルーセイバーには当初レシプロエンジンを搭載しようとしていたのですが、レシプロエンジンでは機構的にも問題があり、出力的にも性能不足であることが判明。そこでジェットエンジンを積み込むことになったのですが…。」
「当初はブリタニアのジェットストライカーのミーティアとグロスターミーティアのジェットエンジンの技術を合わせたエンジンでいくつもりだったんだが、いかんせん航空機のほうは信頼性が低くてね、エンジン軸受け強度が足りずに機動が＋－２Ｇに限定。そして何より問題は出力が足りなかった。」
「根本的な問題が解決していないじゃないですか…。」
「安定性と燃料消費効率では上なんだがね。これでは満足な性能にならないという結論に至った。
　そこで今度はハルフォードのほうを試してみようということになったのだが、
　ここで上層部の横やりが入ってね。ウォーロックという対外的に見れば汚点から流用した技術を使った機体だ。

トレヴァー・マロニーの暴走とはいえ、この汚点を汚点ではないとしたかったブリタニア上層部による判断で、

急遽カールスラントの技術を入れることになった。こうすることでブリタニア独自のものではないとなるからね。この機体にやましいことはないとしたかったのだろう。」

おれにはよくわからないせかいだなー。

「そういうわけでエンジンにカールスラントの技術を盛り込むこととなったわけだが、どうせ作るのならより高性能なほうがいいということでエンジンの共同開発となった。そしていろいろと実験的な機能を積み込んでできたものがこちらに搭載されたエンジンとなる。」

「作られた経緯はわかりました。それで、なぜ私がテストパイロットに選ばれたかもいろいろ察しました。」

「それなら話は早い。君は航空ストライカーも扱えて光武にも乗れてジェットストライカーも経験があるし、輸送機ではあるが航空機の作成や操縦も経験したことがある。それ故に君をテストパイロットに選んだ。

早速ではあるが搭乗してくれたまえ。」

可変機かあ…。ロボット好きとして憧れないわけではなかったが実際に乗る身にな

るとかなり不安だなあ…。
新しい技術が盛り込まれすぎてて信頼性がないんだよなあ。これ。
と思ってても命令なので仕方ない。まずはコクピットに乗り込む。
ブリタニアやリベリオン製のマギウスアーマーに多いグラスコクピットだ。航空機に変形することを意識してか涙滴型である。
グラスコクピットのほうがはっきり言って視界が広く取れるのだが、
俺はあえてのあれである。迷彩とかつけやすいし、カメラとかの機械がつけられるし。かっこいいし。
グラスコクピットも捨てがたいいいものではあるんだけどね？
「搭乗しましたね。ではまずは魔導エンジンの起動をお願いします。」
いわれて起動する。さすがの魔法力の増幅だ。ジェットエンジンのマギウスアーマー搭載用魔導エンジンは伊達ではない。
「なるほど…。では次に変形機構のテストをお願いします。やり方は…。」
説明通りに操作して変形を行っていく。１０秒ほどで変形は完了した。
「なかなか早く変形できるんだな。」
「変形中は隙になりますから、できるだけ早く変形できるように設計してあるんです。」
その後もテストは続いていき…。

「では、いよいよ飛行テストに入ります。まずは離陸を。その後は追って指示を出します。」
「了解。」
航空機形態でエンジンのスロットルを上げていく。
徐々にスピードが上がり、一定の速度になったら機首を上げて空中へと飛び立つ。
その後も高度と速度を上げていき、水平飛行に移行した。
「離陸は成功したようですね。では今度は私の言うとおりに飛行を。」
いわれるがままに飛行していく。空戦機動をしたり、高高度での性能とか、加速とか、最大速度とか調べた。
１０分ほど飛行すると、
「お疲れ様です。これで飛行テストは終了です。この後もテストはありますが一度戻ってきてください。」
「了解。」
基地へと戻り高度と速度を落として滑走路へと降りていく。主輪が地面について速度をさらに落としていき、着陸成功。
「お疲れさまでした。この後、休憩をはさんで今度は武装のテストを行います。」
機体から降りると、整備兵たちが機体の点検をしていく。その後、燃料の補給やら武

装の取り付けやらをした後、
　時間になったので再び機体に乗りこむ。
「武装の説明をします。２０ｍｍのリボルバーカノンのマウザーＭＧ　２１３。ＢＫ５機関砲。それと近接武器としてナイフです。リボルバーカノンは背中のウェポンラックにある弾薬庫と接続されており、可動が制限されますので注意してください。また、ＢＫ５は総弾数が今装填されている１４発だけと少ないです。
　まずは地上での戦闘テスト、続いて空戦での戦闘テストになります。指定された目標を破壊してください。」
「了解。」

「おー、やってるやってる。」
「それにしてもウォーロックの技術の転用などとは…。」
「ネウロイ関連の技術部分じゃないんだしいいじゃん。」
「馬鹿者。そういうことではない。第一…。」
「おっ！飛んだ！…飛べるんだねえあれ。」
「話を聞かんかまったく…。ストライカーユニットに比べて機動がだいぶ制限されそうではあるがな…。」

「そりゃあまあ仕方ないんじゃない？それにしても重武装ばっかだねえ。トゥルーデといい勝負してるんじゃない？」
「武装だけよくても負ける気はないがな。」
「そうだね。」

空中での目標を破壊していく。
「これで…終わり！」
最後の目標を破壊した。
「お疲れ様です。それでは帰投してください。」
「了解。終わってみればそこまで目新しいこともなかったな。」
「戦闘機形態は戦闘機形態で、マギウスアーマー形態時はマギウスアーマー形態時でそれぞれ特性と戦場が分かれてますからね。実感したければ移動速度と移動距離を活かした戦闘時になるでしょう。」
その時、無線の向こうで警報が聞こえた。
「警告！ベルリン方面よりネウロイが侵入！当該空域に高速で接近中！至急迎撃に当たれ！」
「なんでこういう時に限ってくるんだろうねあいつら？空気読みすぎじゃない？」

「私に言われましても…。それよりも、武装の消耗もあります。当該空域から離脱してください。」
「了解。実戦テストはお預けだな。」
ネウロイが接近するまでに時間がある。幸いこいつの速力なら振り切れるだろう。
基地に向かって方向転換すると速度を上げていく。
途中で基地から発振した3人の航空ウィッチ、ミーナ中佐と二人のカールスラントのウィッチとすれ違った。
あれは…ウルスラ・ハルトマン中尉の姉であるエーリカ・ハルトマン中尉とゲルトルート・バルクホルン大尉だろう。新聞で見たことがある。
彼女たちはネウロイが出た方向に向かっていった。
何事もなく基地に戻れた。襲撃とあって基地内はあわただしい。
「お疲れ様です。いいデータが取れました。」
「そりゃどうも。それより戦況はどうなって?」
その時無線が入った。
「こちらゲルトルート大尉。戦況はよくない。奴はレシプロストライカーじゃついていけない高度から急降下しての攻撃と速力を活かしての高度の上昇を繰り返している。一撃離脱戦法だ。急降下による速度上昇こそないもののそもそもの速度が違いすぎて

追いつけない。ジェットストライカーはないか？あいつを倒すにはジェットストライカーの力が必要だ。」
「こちらウルスラ・ハルトマン中尉。すいません。ジェットストライカーは…。」
「あるな。」
「え？」
「今テストしたばっかりじゃないですか。」
「いやでも、それはまだ試験機…。」
「燃料と弾薬を補給したらすぐに行きます。実戦テストはまだでしょう？ついでにやっていきましょう。」
「相変わらずそういうところは強引ですね…。」
「いいじゃないか。ハルトマン中尉。まだ実戦で使えると決まったわけじゃない。それの証明にはちょうどいい。」
「アドルフ少将まで…。」
「そうと決まれば善は急げだ。発進準備急げ！」
　燃料補給、弾薬補充が急速に進められて再び発進準備に入る。
「北郷大尉、発進します！」
　航空機形態で離陸する。そのまま速度を上げてネウロイの場所まで急行する。

「くそっ！敵の攻撃の際に打ち込んだのはいいもののあいつ、装甲も固い！」
「おまけに速度早いから射撃機会も短いねー。」
「小型ネウロイまで出てきた。まずいわね…。」
大型ネウロイについてきた小型ネウロイを攻撃する。２体撃墜。しかし、あと２０体はいる。
残弾のこともある。大型ネウロイを撃墜するのは厳しいだろう。
「お待たせしました！北郷大尉、戦闘に参加します！」

そういうとまずは小型ネウロイの群れの後ろ上を取ってリヴォルヴァーカノンを打ち込む。ほぼ外れたが２発命中。
２体を撃墜。お次は５ｃｍ砲を打ち込んだ。弾が群れの外側に行って１体撃墜。
そこで群れを追い越しそうになったので上昇。反転して再び水平に。小型ネウロイの群れは分かれてこちらに狙いを定めたようでこちらを追い始めた。しかし、こちらの速力に追いつけないようで引き離していく。
機体を右に左に揺らして攻撃を回避するかシールドで防ぐと再び反転して向かってくるネウロイたちと急速接近。
すれ違いざまにリヴォルヴァーカノンを打ち込む。連射力の高いリヴォルヴァーカ

ノンはすれ違いざまでも高い火力を発揮する。
「しっかしこいつ航空機の特性だから射角が狭い！当たり前だが前にしか撃てない！…そうだ！」
俺は今度は上昇していく。そして、ネウロイがついてきているのを確認すると、空中で上方向に魔力障壁を発生させて一気に失速。
そして変形して下からきているネウロイ達に狙いをつけリヴォルヴァーカノンと５ｃｍ砲を放った。
いきなりぶちかまされてよける暇もなかったネウロイ達のついてきていた５体全部を撃破。
そして失速が終わり、落下が始まるのに合わせて再び変形。落下のスピードを乗せて機首を上げてグライダー状態になると推力を取り戻したエンジンによる飛行魔法と合わせて速度を取り戻すと飛行を安定させる。
「うわー!?あれ失速した!?…うーわー、空中で変形しちゃったよ…。」
「え!?」
無線の向こうのウルスラ中尉が驚いている。
「あの機体、空中変形なんて想定してません！飛行するために軽量化を図ったので耐久性を落としてるんです！

空中で変形なんてしたら魔法力による耐久性向上があっても空気抵抗とそれに伴う失速による慣性によって機体が壊れます！それに、失速して墜落します！ジェットエンジンだって無事で済むかどうか……！」
「んー？でも失速してから変形してるみたいだったけど？」
「それでもエンジンのほうが駄目なんです！一度失速してしまえば再び推力を取り戻すのに速度が必要です！安定だって難しいのに……。」
「あー、それで落下してグライダー状態になってたのか。でも無茶苦茶だねぇ。
うわっ、今度は航空機状態のまま縦になって失速しつつ変形して撃ってるよ。
失速で追いつかれて攻撃されたら全部シールドで受け止めるって感じ。
あ、今度はうつぶせになるように変形して速度を維持したままジェットの推力で浮力を稼ぎつつ後ろを撃って即変形してる。試行錯誤しながら戦ってる感満載だね。」
「・・・・・・・・・・・・・!!」
「声にならないって感じだね、ウルスラ。」
「ええい！あのパイロットはバカか！バカなのか！見ていられん！
おい！北郷大尉、とか言ったか！雑魚どもの相手は私たちがするからお前はあのデカ物の相手をしろ！」
「了解！」

返事をするとレーダーを発動。さて、どこにいる…。上か！一気に相手のいる高度まで上昇する。

遠いが見えた！相手もこちらに気付いたのか急速に高度を落としてきた。一気に降りてきてそのまま攻撃するつもりだろう。しかし、確かにこいつは航空ストライカーは履いて戦うより視界が狭いがその代わりとなるレーダーという目がある！そんな奇襲攻撃は通用しない。敵の攻撃をかわしたりシールドで防ぐと敵の後ろ上を取り、

後ろ上から降下しながらリヴォルヴァーカノンを打ち込む。弾は敵の表面を削り取るが一度目の射撃では倒しきれなかった。

敵は今度は速度を落とさずに急浮上する。しかし、こいつを振り切れるかな！

敵の後ろをついていく。ぐんぐん高度が上がっていくが、ジェットであるこいつにはむしろ好都合だ。

二回目は５ｃｍ砲も打ち込みつつリヴォルヴァーカノンをぶち込んだ。

５ｃｍ砲は大きく外れてどこかへ飛び去ってしまった。当たり前だが弾速が遅く当てづらい。

しかし…、２回目でも仕留めきれなかった。では3回目…と思った矢先、

「あ、弾切れた。」

「は？」

「ちょっ！」
「え!?」
リヴォルヴァーカノンの弾薬が無くなってしまった。５ｃｍ砲はほぼ当たらないとさっき実感したところだしこれは困った。…そうだ！
俺は機体の高度を上げ始めた。レーダーで常に敵の位置は把握できる。俺は敵の真上を取った。
「何するつもりだろうね、あれ？」
「わからんがろくでもないことだろう。」
そして変形を途中で止めて、人型に戻る途中で、エンジンが後ろを向いた状態で試作機能のアフターバーナーを炊き、出力を上昇。推力を上げて速度を上げていく。そしてそのまま敵に向かって落ち始めた。
「ジェットストライカーとかジェット飛行機っていうよりロケットだね、あれ…。」
航空機状態じゃ５ｃｍ砲を当てられないし、人型に完全に戻ると失速して追いつけない。この状態だと十分な揚力を稼げないから高度を取り、上からロケットのようにして敵に近づいていき、
完全に接触する直前でうつ伏せ状態でマギウスアーマー状態に戻り敵にしがみつく！

魔法力操作で敵につかまり、魔導履帯で敵の上で立ち上がった。そして…

「こんだけ近ければ外しようがないよなぁ！」

敵の上を移動しながら５ｃｍ砲を乱射していく。敵も振り落とそうとしているが魔導履帯でくっついてるから離れない。５発目くらいでコアに当たったらしく敵は消滅。足場が無くなった俺は航空機形態に戻って離脱。

「どんなもんだい！」

「ほんとめちゃくちゃするなあ…。」

「聞くところによると美緒の師匠さんのお兄さんだそうよ…。」

「なぜだか説得力があるな…。」

「こちら北郷大尉。ネウロイは撃破した。これより帰投する。」

「お疲れ様です…。ところで大尉。ジェットに共通することなんですが、燃費が悪いんです。

それも例にもれず、１時間くらいで燃料が切れます。アフターバーナーを炊くとさらに早く減ります。

戦闘域に行くまでに使った燃料と戦闘中に使った燃料を計算していくと…。燃料が足りません。」

「・・・・・・・。」

「・・・・・・。」
「…どうしようか?」
「…気合で帰ってきてください。」
やれやれ、どうやらここからも大変なようだ。

突発的に悪ふざけで書いた、本編には全く関係しない話。

１９４２年、北アフリカ、ハルファヤ峠。人類を守る最前線！
今ここは敵襲を受けていた！

「―警報！総員配置につけえ！　敵襲！」
次々に襲い掛かるネウロイ！地雷原を突破し、戦車を破壊し、砲台を破壊する！
巻き起こる爆発！吹き飛ばされる肉体！次々と死んでいく兵士たち！
それでもここを守り切らねばならない！それにやられてばかりの男たちではない！
アハトアハトが火を噴き、対空砲が火を噴く！
しかし、敵は圧倒的に多い！このままでは全滅する！
ここはハルファヤ峠の司令部。指揮官のバッハ少佐とその補佐が話し合っている。
そのそばでは無線でウィッチたちに救援要請を送っている。
「…状況は…控えめに言ってよくはありません。」
「ははは…ブリテン的表現だなシンプソン君！」
「…うちの若者たちも頑張っているのですが…。」

「王立士官学校でこんな時どう習ったかね？」
『これ以上の損害を局限する為…明日のために撤退！』
「…我々に「明日」があれば私もそうするがね。」「…同感です。」
そうだ。ここで撤退すれば…ハルファヤ峠を、北アフリカをネウロイに取られれば人類に明日はない。
その時、司令部に無線が届いた！
「バッハ少佐！無線です！ウィッチから…」
すぐに受話器を受け取る。
「ハルファヤ峠バッハ少佐　あきらめちゃダメです！」
「ブロークンアロー受信しました！現在全戦域でひっちゃかめっちゃかなんですけど…何とかしますしてみせます！だから…あと一時間！あと一時間持ち堪えてください！」
「お安い御用だ、フロイライン！」
受話器を置く。
「……シンプソン君要約してくれこの心躍る状況を！」
「我々が全滅するまであと３０分…。我等が女神到着まで一時間…。」
「何か問題があるかね？」
「問題などありません!!最後の一兵にいたるまで戦い抜き…

彼女たちをお迎えする！これぞまさしく…『男の花道』と言えるでしょう！」
「同感だ。」
司令部を出て援軍に向かう指揮官たち。
「諸君！援軍が来たぞ！」
「バ…バッハ先生!?《3人だけ》…ですか？」
「《3人だけ》だ…今はな！」
その時！どこからともなく声が響いた！
「いいや、《4人》だ。」
「え？でも姿が見えない…。」
「こ、この声は！まさか!?」
「ここにいるさ！もうひとりな！」
その時！どこからともなく飛んできた大量のロケットが前線に張り付いていた地上型のネウロイ達を一掃した！
飛行杯（フライングゴブレット）と呼ばれるネウロイ達も次々に撃ち抜かれていく！

ネウロイとその場にいた人間が一斉に弾のとんできた方向を見た！
戦場を包む砂塵。　その中に何かのｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅが浮かぶ。
「あ、あの孤独なｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅは…。」
何かは動き出した！そして姿を現した！それは砂漠の迷彩を施したマギウスアーマーだった！
「間違いない！やつだ！」
「待たせたな！ちょいとかわいこちゃん達が離してくれなかったもんでよ！」
そういうと即座に敵に向かって移動する機体！足を取られるはずの砂をものともしない華麗な機動で敵の攻撃をかわしつつ手に持った大砲と機関砲で反撃を決めていく！
２機！３機！４機！次々に倒されていくネウロイ！機体は味方の目の前まで移動してきた！
「どうやらパーティには間に合ったようだな。もっとも、主賓はまだ来ていないみたいだが。」
「キリコ！来てくれたのか！」

「デートを早めに切り上げてな。」
「それはすまないことをした！お詫びに今度食事でもおごらせてもらうよ！とびっきりのごちそうをね！」
「そいつぁ楽しみだ。それだけでもここに来たかいがあったってもんだぜ。っと、お客さんがほっとかれてご立腹のようだぜ？どうやらサービスが足りないらしい。」
「ははは…それじゃあゲスト君！思う存分もてなしてやれ！」
「了解！」
　返事をするや否や敵へと突っ込んでいく…かと思いきや、途中で何かを打ち出した。
煙幕弾だ！
　煙幕弾は煙を吐き出して煙のカーテンを作り上げる。
　煙幕内部へと攻撃を仕掛けるネウロイ。しかし、手ごたえはなく、逆に煙幕の中から反撃を食らう。
　そして、煙が晴れた時、正面に機体はなかった。
「こっちだぜ、お客さん！」
　機体は煙幕の端、そちらから移動して敵の側面を取っていた。そして容赦ない攻撃を浴びせかける！

　またも数を減らすネウロイ！そして《一斉にそちらにつられる》！攻撃は脅威的な機体の方向へと向き始めた！

「一！二！三！ヒュッー！あっという間に三機もやりやがった！さすがだ！」

「おっと！何をしている紳士諸君！来賓への対応をゲストだけに任せる紳士がいるか！立てぇ！諸君！」

「何てこった！一人と俺達で十字砲火だ！すげえ男だぜ！」

　攻撃があちらに向いたことで自然と攻撃が止んだ防衛隊は唯一残ったアハトアハトと機銃でキリコと呼ばれた男の機体を援護していく。

「それじゃ、ここらでゲームをしよう！タッグ（鬼ごっこ）と行こうか！一番先に追いついて当てられんのは誰かな！」

　キリコと呼ばれた男は敵を防御陣地とは違う方向へと敵を引き連れながら機関砲と大砲で次々に仕留めていく…。

「ん！弾切れか、次の弾倉を…。おっと、どうやらメインゲストの登場のようだぜ！」

　見上げると空を一人の少女が飛んできていた。そして次々と敵を撃墜していく。

「何てこった！間違いない！「黄の１４（ゲルベフィアツェーン）」

『アフリカの星』！カールスラント空軍ハンナ・ユスティーナ・マルセイユ中尉!!」

　別の場所では…

「援護してくれ！こいつで吹き飛ばしてやる！」
「ヤメロ！死ぬ気か！」
一人の兵士が手榴弾を持って敵に特攻を仕掛けようとしていた。
そこに重々しい金属の音がしたかと思いきや大砲のような音がして、
ネウロイが倒された。振り向くとそこに立っていたのは機械で身を包んだ少女たちだった。
「ブリタニア王国陸軍第４戦車旅団Ｃ中隊マイルズ少佐…以下１２両！到着です！
北ご…キリコは先に来ました？」
「ええ、丁度今鬼ごっこの最中です。」
「せっかちなんだからもう！急に現れてこっちを手伝っていったかと思うとさっさと行っちゃうのよ？」
「ははは…あいつらしい。」
予定よりも早い到着だった。そのわけはキリコと呼ばれた男によるもののようだった。
とはいえまだ戦闘中だ。気を抜いていられない。
「全車横隊を組めぇ！」
号令とともに横へと隊列を組む陸戦ウィッチたち。

「行進！」
その掛け声とともに前進しながら射撃。ネウロイを押し返していく。
「誰か！弾を持ってきてくれ！アハトアハトの砲弾だ！」
「応！」
「ロマーニャ公国陸軍…野戦炊飯兵たち!?」
「女の子の前なんです！ちょっとくらいいいところみせないと！」

マルセイユが攻撃をくらった。下からの攻撃だ。シールドで防いだが一旦離脱。攻撃してきたのは…。
「うわあ…」
少女たちがネウロイを押し返していった先には大型の陸戦型ネウロイがいた。
先ほどマルセイユを攻撃したのもこいつだ。
直ちに全員で攻撃を加えていく。だが、
「黄の１４全弾消耗！」
「マイルズ少佐！徹甲弾残量僅少！」「構うな！叩き込め！」
これまでの戦いで弾薬が尽きかけていた。そして…。
「コアだ！」

大型のコアが露出する。しかし、
「!?弾切れ!?」
とうとう弾切れを起こしていた。
「…誰か！コアを狙ってぇ！」

その時、二つの方向から弾が飛んできてネウロイをぶち抜いた。
そして、遅れて特徴的な発砲音が響き渡る。
唐突に無線から声が響いてきた。
「あらら、これじゃどっちがやったのかわかんねえな。」
「ははは、譲ってくれてもいいんだぞ？」
「そうだな…女の子の笑顔で手を打つとするか。」
「そりゃとびっきりの報酬だ。」
「違いない。」
ネウロイのコアが破壊され、崩れ落ちる。
「すっごい大砲が…私を助けてくれたのね♥」
「ネウロイ残存部隊！退却していきます！」

戦闘が終わり、マルセイユは帰還、戦車中隊のウィッチたちも兵士たちに囲まれてお茶に誘われている中、

一機がその様子を見守った後、静かに帰ろうとしていた。

そこに一人の男…バッハ少佐が声をかけた。

「どこに行くというんだ、北ご…キリコ。」

「ランチさ、デートの連続で食べそこなっちまってすっかり腹ペコだ。」

「なるほど、そりゃ大変だ。おごるよ。さっきの約束だ。ロマーニャの飯はうまいぞ。」

「そりゃいい！相棒を預けてきたら早速行こう！ロマーニャの飯が俺を待ってる！」

「ははは、相変わらずせっかちだな。そんなに慌てやしなくも逃げやしないさ。」

去っていく機体を見送りながらつぶやく。

「また助けられちまったな…。キリコ・キュービィー。またの名を北郷一郎。

扶桑に強制送還させられそうになってここに来たといっていたが…。」

「おーい！どうしたんですかそんなところで…。おや、きたご…キリコの野郎もう帰っちまったんですか。

せっかく飯を作ってやろうと思ったのに。」

「ちょうどいい。今さっきロマーニャの飯をおごる約束をしてたんだ。予約はできるかな？」

「もちろんです！腕によりをかけて作りますよ！」
「あいつもきっと喜ぶ。」
キリコ・キュービィー。またの名を北郷一郎！神出鬼没の兵士！北アフリカの砂漠をまたにかけ、今日も戦う！

悪ふざけの産物の補足というか付け足しみたいな話。

私の名は加東圭子。扶桑皇国の従軍記者として、ウィッチたちを取材して、世界を回っていた。

そして、その取材の中で「アフリカの星」ハンナ・ユスティーナ・マルセイユの噂を聞きつけてそれを世界に伝えるべく、アフリカへとやってきた。

トブルクの港から、街の中を通り過ぎ、街の近くにある要塞の中にあるロマーニャの補給司令部でロマーニャの将軍の一方的な自慢話を聞いた後。

補給司令部でマルセイユ中尉の基地の位置を教えて貰い要塞の外へと出てウィッチ隊の基地へと大変な思いをしながら歩く。その途中、運よくブリタニア陸軍の上等兵に車に乗せてもらい、基地へと行くその途中、

マルセイユについて話している兵士のほうを向いて話を聞いていると遠くのほうに人影が見えた。

いや、手足こそついていたがそれは人間ではないことは明白だった。

魔導甲冑。マギウスアーマーとも言う扶桑発の兵器。ある扶桑人が独力で作り出した陸戦ストライカーの形態の一つ。恐らくはそれだろう。

とっさに写真を撮ろうとカメラを構えたところで横殴りの風が吹き付け、一瞬目をそらした隙にそれは幻影のように消えてしまった。
「どうしたんですか?」
「ああ、いえ、今遠くにマギウスアーマーが見えた気がして…。」
「キリコだ!…あっ、すいません。恐らくそれはキリコのマギウスアーマーです。」
「キリコ?」
そんな名前のウィッチがいたのか。
「はい。キリコ・キュービィーという名を名乗ってまして、アフリカ戦線はもう何回も助けられてます。いつも急に現れて、戦いが終わって気がつくと消えている。まるで初めからいなかったように。そこからついたあだ名が…。」

『砂漠の幻影』

マルセイユの取材が終わった後、謎の戦士、キリコ・キュービィーに興味を持った私は取材期間を延長してそのウィッチについて調べることにした。
要塞や街で兵士たちにキリコについて話を聞く。
「キリコ?ああ、あいつか。いつもピンチの時に現れて敵の注目をかっさらってくんだ。

おかげでこっちへの攻撃が止んでその間に体勢を立て直せる。」
「キリコか。あいつはすっげえんだ！いつも単騎で１０以上は倒していく！ネウロイどももキリコが現れた瞬間動きを変えるんだぜ！」
「キリコは煙幕をよく使う。接近するためだったり、敵の軍勢の横を取るためだったり。その機動性を十分に使って煙幕を有効活用するんだ。」
「キリコの特徴としてはロケット弾もよく使うな。奇襲で使って敵の数を大きく減らすんだ。」
「この前、ネウロイの軍勢に襲われてるときに目の前で地雷原を突破したネウロイが次々にやられてくのを見たんだ。ネウロイがやられるたびにアハトアハトの特徴的な発砲音が遠くからするんだけど、味方は誰も撃ってない。
それで音のする方向を探してたら崖の上にキリコがいてアハトアハトで狙撃してたんだよ。」
「キリコはまず真っ先に飛行杯（フライングゴブレット）を倒してくんだ。あいつが一番歩兵にとって脅威だからな。」
「ネウロイの数が少なくなった時はさ、こう、見事な動きで敵に接近して切りつけていくんだ。
大型ネウロイも一発でぶった切っちまうんだぜ。」

「ブリタニアの陸戦ウィッチたちとも共闘することもあるな。その時はいつもと違って重戦車のような動きなんだ。ウィッチたちの盾になって攻撃を受けながら敵を押し返してくんだ。」

更に兵士たちから話を聞いているとおおよそ人間かどうかも怪しくなるような話も飛び出してきた。

しかし、一体所属はどこなのだろうか。ロケットにアハトアハトを使うということはカールスラントなのかしら?そう思った私は知り合ったカールスラントの将校に尋ねた。

「ああ。あいつは確かにカールスラントの兵士として登録されている。補給もカールスラントが行っているよ。」

ビンゴ!ということはどこで補給を行っているかもわかるはず。その所在もカールスラントが把握してるはずだ。

尋ねてみるとその将校は代わりに条件を出してきた。

「ならその扶桑製の魔導甲冑の模型を見せてくれないか?」

世界中で取材しているとこんな風に魔導甲冑の模型を求められることがある。模型は兵士たちの間ではお守りとして絶大な人気を誇っている。なんでも扶桑のが一番出来がいいらしく、特に一番人気が扶桑製の光武の模型だ。

魔導甲冑の模型はほかの国のものもあるがその中でも光武シリーズは人気が高い。売り切れも多いとか。

また、自分でペインティングして楽しむものも多いとか。それを見せ合うこともまた。噂に聞くと愛好会ができてるらしい。

取材を円滑に進めるために手土産として持っていくことも多かった。今も持ってきている。というかちらつかせていた。それを渡した。

「ああ、ありがとう。それじゃあ…」

将校に基地の場所を教えて貰う。ついでに取材の許可ももらった。

「それにしても…。この模型、キリコのに似ているな。細部は少し違うが。」

「…その話詳しく聞かせていただいても?」

どういうことかしら。今私が渡したのは光武二式（の模型）。昨年ロールアウトされたばっかりの最新鋭機だ。

それを何故カールスラントの兵士が?輸入して使うこともあるだろうが、カールスラントだって魔導甲冑は作っている。よっぽど気に入ったとか?いや、それにしたって補給の問題もある。特にエンジンなんかは整備するのにそのエンジンに詳しいものがいないとだめだろう。わざわざそんな苦労をしてまで軍が使わせるものだろうか?

疑問を持ちながらもキリコがいるという場所へとやってきた。その場所は前線のす

ぐそばにあるカールスラント第１５装甲師団の駐屯地だった。
師団長に挨拶して取材許可証を見せるとキリコの所在を訪ねる。
「キリコですか。今格納庫でマギウスアーマーの点検と修理を行っておるはずです。」
「キリコさんが自分で修理を行うんですか？」
「ええ。そのほか、壊れたストライカーユニットや機械なども修理してくれるんですよ。機材も金属部品であるならば材料から作ってくれます。さながら、奴は前線の工場ですな。」
何故だろう。凄く聞いた事のある気がする情報が出てきた。脳裏に扶桑海事変の時に出会った人物の姿が浮かぶ。
そんなわけないわよね。自分に言い聞かせながら、そろそろ師団長の元を辞して格納庫を見せてもらおうとした時、基地に警報が鳴り響く。
「ネウロイ襲来！場所は…！救援要請が来ております！」
近くの前線だった。そしてそれが言い終わるか終わらないかくらいですぐに基地を飛び出していった影があった。
マギウスアーマーだった。砂漠でも時速６０ｋｍは出ている。今のがキリコだろうか。
「やれやれ、また勝手に出撃しおって…。」

また?しょっちゅうこんなことを繰り返しているのだろうか。
「ええ。いろんな意味で止められんのですわ。実際、奴が戦場に到着した時から損耗率は下がる、現場の士気は上がる、他国に恩は売れるで。逆に止めようものなら現場の恨みを買ってしまう。困ったもんです。」
聞いてるだけでとんでもない。どれだけの戦いぶりをしたらそんな状況になるのだろうか。
「無茶苦茶ですよ。単騎で敵を引き付けて攻撃の圧力を減らすのが主軸の戦いですから。
奴らもあいつを無視できない。なにせほっとけばどんどん被害が出るのでね。」
なんだそれ。私は絶句した。光武は前面以外の視界がない。基本的に他の陸戦ストライカーか魔導甲冑と組み合わせてそれを補って戦うのが普通なのに。単騎だけでそんなことするなんて。
「奴はダンスでも踊るみたいに機動して戦うんです。そのために随伴歩兵を連れて行かない。」
当然、魔導甲冑はタンクデサントがいてはその機動力を発揮できない。だからその機動力を発揮するには単騎か魔導甲冑と組み合わせる必要がある。
だからって単騎で行くなんてことをすれば後ろや横を取られたときにカバーするも

のがいないからたやすくやられる。自殺行為にも等しい。
それをもう何回もやっている。とんでもない人物だ。
「まあ1時間もすれば帰ってくるでしょう。」
「え？一時間ですか？」
「ええ。弾薬をふんだんに使って殲滅してきますからな。そのたびに補給に戻るのです。
おかげで弾薬だけは豊富にそろえとるんですわ。」
それにしたって早い。どれだけ贅沢な戦いをしているのだろうか。
忙しく指示を始めた師団長の元を辞して格納庫で待機させてもらうことになった。
待つこと一時間ほどすると本当にマギウスアーマーが帰ってきた。
その姿は確かに扶桑の光武二式を改造したものだった。
そして整備兵たちが忙しく点検や弾薬の補充や燃料の補充を始めた。マギウスアーマーは操り人形のように魔法力で動かしているので関節にモーターといったものがない。それ故に関節が壊れやすいなどということがなく、それでも重量の負担が大きい足回りを簡単に、エンジンを重点的に調べていく。
そんな時おもむろにコクピットが開いた。いよいよキリコとのご対面だ。

そこにはとりあえずここにいることがおかしい人がいた。
私は驚きのあまり口を開いて声も出さずに唖然とするしかなかった。

光武の開発者でレーダー、誘導対空弾の開発の担当もして、
今現在世界中で使われている輸送機のハーキュリーズの開発者の一人。
そしてヒスパニア内戦、扶桑海事変、黒海を発端とするこれまでの戦いでずっと最前線で戦い続けてきた。
とりあえずその功績を上げたらきりがないレベルの人物。
そしてそれ以上に問題児として厄介がられてる男。
キリコ・キュービィーの正体は扶桑陸軍の北郷一郎その人だった。
扶桑陸軍から前線から引くように言われたのを拒否して雲隠れ。それ以来姿を消していたと聞いたがこんなところにいたなんて！
いや、確かにこの人なら部品の補給がなくてもなんとかできる。それどころか材料から新たなエンジンを作ることだって。
彼はこちらに気が付くと笑顔でひらひらとこちらに手を振っている。
こんな時でもシャッターチャンスを逃さない記者の性で思わずカメラを構えてその光景を切り取った。

彼は彼に近寄ってきた整備員の一人から水と嗜好品のチョコレートを受け取って食べ始めた。
そしてすべての作業が終わるとすぐにまた出発していった。
私はその間一言もしゃべることができなかった。
そして彼が出て行った後、
「うそでしょ～～～～～!!!!」
そんな絶叫を上げたのだった。

こうして私のキリコ・キュービィー探索の時は終わりを告げた。
この後、出撃をすべて終えて帰ってきたキリコ…もとい北郷一郎に話を聞いた。
「いやあ、久しぶりですね。扶桑海事変以来でしたか？お元気そうで何よりです。」
などとなんとも能天気なあいさつの後に、なぜこんなところにいるのか尋ねた。
彼曰く、「3年ぶりに扶桑に帰ったら無理やり結婚させられそうになって、司令部も国に縛り付けようとしてきたから逃げ出して扶桑陸軍のいないここに来てカールスラント軍に現地で参加した。」とのこと。
馬鹿だ。この男馬鹿だ。実行するかフツー。そして受け入れたカールスラント軍もだ。

誰だこの広く顔が売れているこいつを参加させた奴。
「ロンメル将軍です。俺はキリコ・キュービィーです。北郷一郎とは何の関係もありません！って言ったら、
『そうかそうか！キリコ・キュービィーか！よろしくキリコ！我々は君を歓迎するよ！』って。」
私は頭を抱えたくなった。こんなバカげた話があってもいいのだろうか。
「あっ、申し訳ないのですがこのこと、陸軍には内緒で。」
こんなこと話せるわけがない。
非常に頭の痛い問題を抱えたまま私は駐屯地を後にした。

しかし、一か月後、すぐに再会して陸軍の部隊にもばれることになるのだった。
余談だが、空から彼の戦いを見る機会があり、兵士や師団長の話は全て本当であることを確かめた。

エーススナイパーで学ぶ魔導甲冑　大修正版。

ストライカーのマッピングの変更、という言葉がある。これは魔導エンジンの回路をいじることによって魔法力の振り分けをいじることを指す。シールドの重点的な強化だったり運動性の強化だったり。航空ウィッチなら特に重要なことである。任務に応じてマッピングを変えることはざらであった。また、ウィッチ個人の嗜好にも応じてそれはなされる。だから整備士はそれの調整に追われることになる。

フィッティング、という言葉がある。それは整備、調整といった意味でも使われるが、服などの仮縫いの着付けや寸法合わせという意味でも使われている。

俺は魔導甲冑におけるマッピングの変更を〝フィッティング〟と呼んでいた。当たり前だが、魔女とて人間なのだから個人差というものがある。特に魔導甲冑はシンクロさせる都合上、個人に合わせたマッピングの変更というものが本当に大切になる。

兵器としては誰にでも使える汎用性が大切だが、まあこれはカスタムの範囲なので見逃してほしい。これをしないままでも動かせはするのだが、〝フィッティング〟こそが魔導甲冑をそこらの陸戦ストライカーユニットとは違う、それこそ〝魔導甲冑〟たらしめるものとする。

これからその一例を紹介しようと思う。

俺がカールスラントへと着任する前のこと。

輸送機に乗ってネウロイの範囲を避けて航行して、スオムスの北海側を通って遠回りをしながらカールスラントまで行く予定だったのだが、スオムスへと航行中、サンクトペテルブルグ近くで運悪くネウロイと接触。

光武改でシールドを張り続けている間にスオムスから航空ウィッチの部隊が飛んできて難は逃れたものの、防ぎきれなかった攻撃によって機体は損傷。急遽スオムスへと逆戻りすることになった。

診断の結果航行不可能。代わりの便が来るまで一週間ほどスオムスで足止めを食らうこととなった。

「あんた本当に運がないというかネウロイに好かれているというか。」

などとハーキュリーズのパイロットがぼやいている。

こっちだって好きで襲われているわけではない。

「まあなんにせよこれまでも命は助かったんだから悪運は強いほうじゃないか？北郷？」

と話を聞いていたアウロラ・E・ユーティライネン中尉が言った。
この人とはヒスパニア戦役時に知り合った。モロッコの恐怖などと呼ばれるやべー奴なのである。
偶然俺が近くに来たので顔を見に来たとのこと。
「まあ災難だったな。ちょうどここらへんにはネウロイが攻めてきてるんだ。ま、ゆっくりしていけよ。何だったら義勇兵として戦ってもいいぞ。」
まあやることもないし試したいものもあるのでそうさせてもらおう。
ついでだからここに来る前、バクーで受け取ったものを光武改に装備してその肩慣らしをすることにする。
バクーで受け取ったもの。それは開発途中だったが俺がオラーシャで戦っている間に完成した、光武改の眼…カメラアイである。とはいっても、モニターに映像を映すとかそういったものではない。どちらかというと光武改を動かす術式、シンクロ・同調機能に組み込んであたかも自分の目のように見れるようになるというものである。
これ自体はそこまで視界を改善するものではないのだが、これをつけることでより機体へのシンクロ率（と言えばよいのだろうか）が増し、カメラ機能に使う魔法力の消費の増大よりもシンクロ率が上がったことによる魔法力の消費の効率化による消費量の減少が上回りさらなる強化が望める。

また、術式による同調によって見るという動作の関係上、カメラアイにも魔法力が通るので視力の強化もできる。

今までもそうであったのだが、スコープとかなくても割と遠くを見れるようになるのだ。

オラーシャでは受け取ってすぐにロストフの戦いに巻き込まれたので組み込む暇がなかった。

それ故に時間も空いた今、こうして組み込んでそのテストをしている。

まずは前面の大きくあいたスリット部分に、レールで移動できるようにしてモノアイ式を2つ組み込む。

もう一つ、伏せた時に前が見えるようにキューポラ近くに。

そしてもう一つを伏射時の狙撃用に上部分の右斜め前の部分に。これには反射防止加工をした。

これまでもキューポラから覗いて撃つことはあったがやはり撃ちにくかった。

なので今回はつけてみたということだ。

なぜ後ろにつけないのかって？つけられないからです…。後ろは大体がウェポンラックな分、開けることがある可動部で、稼働しない腰もエンジンがあって無理。頭の後ろもウェポンラックで下がほぼ見えない。

ただこれはもう数とかでカバーするしかない。どうせ戦争なんて一人ではしないのでこれでいいのだ。

ついでに、音に関しても魔導マイクともいうべきものを追加して、音を拾えるようにした。

組み込み終わった後はさっそく慣らし運転である。

レールの移動、同調による視界の感覚、匍匐のやりやすさ。狙撃の感覚など、カメラを組み込んだことによる感覚の違いを確かめていく。

ちなみに狙撃に使ったのはスオムスの隣の国のバルトランドが開発したボフォース４０ｍｍ機関砲を改造したものである。オラーシャから離れるときに借りてた砲は返したので何も砲がないところだったのだ。

アウロラ中尉はこれを空軍から無理やり借りてきていた。豪快すぎやしませんかね？

ボフォース４０ｍｍを人力装填部分をボルトアクションに改造して、連射力を犠牲に狙撃に向いた構造にする。給弾は元のボフォースのまま。

自動装填機構は外して、空薬莢は自動的に真後ろに出てきていたのを、レバーを後ろに引いて薬莢を引き抜いた際に下に落ちるようにした。そうでもしないと空薬莢が当

たる。

それとボフォース用に狙撃用のサイトも作っておいた。上から給弾なのでボーイズ対戦車ライフルとかラハティL―39と同じように左に照星がついている。これもブリタニアのスティッフキーサイトを流用したものだ。

ボフォースはよく使う。なにせ自動装填装置と合わさって連射力の高い中口径のライフルとしてとても使い勝手が良かったからだ。ちょうどM1ガーランドみたいな感覚で使うことができた。

なぜそれを連射力を落としてまで狙撃用に改造なんかしたのかって?

「これを使え!ただし弾はこれだけだ!うちは貧乏なんでな!なあに、弾が切れたらその腰のやつでぶった切ればいい!シールドが強いんだろ?それ。いっちょ突っ込んでいけ!」

というこれを渡してきたアウロラ中尉のありがたいお言葉があったからである。

冗談ではない。確かに弾が切れたら近接でぶった切るのはよくやるがあくまで市街とか森とか視界の悪く障害物の多い場所に限る。いや、まあ別にその条件でなくともよくぶった切りに行ってるが余計なリスクは避けるべきだと思う。特にこいつは大きいので標的にされやすい。

弾が切れたら近接しない限り弾除けの壁にしかならないとか勘弁してほしい。

せめて機銃とかないのかと聞くと、
「あるにはあるがこれ以上空軍からとるとどやされる！」
陸軍からとってください。その後、なんとか重機銃と２００発程度の弾丸はくれた。
これ以上は無理と言われたが。
しょうがない。ちょうど狙撃用の穴とか作ったところだしいっちょボフォースを狙撃用に改造して使うか。
それでも弾が切れた時や大勢に接近されたら近接攻撃か撤退せねばならないが。
なに？そのシールドは飾りかって？移動砲台として運用するだけだよ。結局こんな大口径ぶっ放したら音でこっちの位置がばれるだろうしネウロイもこっち攻撃してくるだろうしちゃんと意味はあるよ！
…あと、ちゃんと使い終わったら元通りにして返しますよ？ほんとだよ？

ラドガ湖北部、コッラー川。ここには大量のネウロイが攻めてきていた。
対するはウォルデマル・ハッグルンド少将率いるスオムス陸軍。その中にはモロッコの恐怖、アウロラ・Ｅ・ユーティライネン中尉もいた。

そして、アウロラ中尉の部下にはモシン・ナガンＭ１８９１／３０を背負ったある少女ウィッチがいた。

その少女は小柄だった。１２０ｃｍを超える長さを持つモシンナガンと比べると少し大きい程度だ。

この少女は、陸戦ストライカーユニットもつけずに生身で狙撃を繰り返してネウロイを仕留めている。

スナイパーの家系で、いつも狙撃の練習をしていた。その努力もあってかなりの腕前だった。

彼女は〝シムナ〟と呼ばれていた。

そんな彼女にアウロラ中尉は特定の小隊に属さない狙撃兵としての任務を与えた。

その彼女のいる場所からちょっと離れた場所になんだかでかいものがいる。

ギリースーツっぽい迷彩に、雪に穴を掘って埋まってちょっとだけ顔を出している。

確かあれはマギウスアーマーとかいう兵器だ。結構いいお値段がするとか。けれどうちのような貧乏国家になぜこんなものが？

そんなものを買うならもっと陸戦ストライカーとか弾薬とかを優先してほしい。

と思う少女だったがプイと目をそらすと目の前に現れた敵に集中し始めた。

オープンサイトで照準を合わせて引き金を引く。モシンナガンを手足のように扱う

彼女は次々にあててい た。次々になるモシンナガンの銃声に機銃の音。そして時折なる大きな砲の音。

マギウスアーマーが引き金を引いたのだ。結果は至近弾。つまり外れ。五発に一発は外していた。

少女はそれを見てとてもイライラしていた。弾だってただじゃないんだぞ。

口径が高い分お値段も高い。あんなことに使うくらいならもっと私たちの弾薬を増やして欲しい。

とはいえ、私には関係のないことだ。私は私のやるべきことをするだけだ。そう思ってまた狙撃に戻ろうとするも、

運悪く上から飛んできた攻撃が光武改に直撃した。シールドを貼るのが間に合わなかったらしい。

一応生死の確認くらいはしないとと思って少女は光武改に近づいた。

コクピットに穴が空いている。が、燃えてもいないし、パイロットも重傷なものの生きていた。

急いでコクピットから引きずり出して手当てをする。

突然目の前が爆発した。どうやら敵の攻撃が直撃したらしい。それも上からだ。目

の前の敵への狙撃に集中していて上まで気を張っていなかった。
痛みとともに目を覚ますと目の前には少女がいた。どうやら手当てをしてくれていたらしい。
「無事？」
「ああ、助かった。ありがとう。」
そう言って光武改へと乗ろうとするが脚が痛む、右脚が使い物にならない。これでは光武改は動かせない。シンクロの都合上怪我に左右される。
「くそっ！」
「あまり無理はしない方がいい。…ねえ、使えないなら私に貸してくれない？」
「君が…？ウィッチなのか？」
「…そう。」
どうせ今の俺には使えない。ならこの少女に使わせた方がいいだろう。そう判断するとコクピットの応急処置を済ませる。幸い、コクピットの先端に当たっていただけだった。他の機能は無事だ。
そして、少女が乗り込んでエンジンを起動させると早速射撃を開始する。
一発目、ヒット。二発目、中心からやや離れてヒット。
なんだか不思議そうな顔をしている少女。

「マギウスアーマーは誰にでも手足のように使えるって聞いたのにそんなことない。誇大こーこくだ。」
「そりゃきみ、そいつは俺に合わせた調整をしてるからな。サイズの違う他人の服を着ているようなものなんだ。フィッティングし直さないと使いづらい。」
「まだいたの?ここも危ないからさっさと避難して。」
「そうもいかない。足は使えなくともできることはある。今から君に合わせたフィッティングをする。即興だからどこまでやれるかわからんがだいぶマシになるはずだ!」
腰部にあるエンジングリルを開ける。絶賛稼働中なのでかなり熱いがそんなことはどうだっていい。重要じゃない。魔導エンジン部分のマッピング領域を探り出す。そして固有魔法、金属操作を発動。
コクピットにいる少女に声をかける。
「今からフィッティングをするからまずは魔法を使ってみろ!魔法を使いながら撃ち続けるんだ!」
「…わかった。」
エンジンに少女の魔法力が送られてくる。エンジンを触って魔法力の大まかな流れや質などを調べて金属操作でマッピングを即興でいじっていく。また、体格に合わせた調整も同時並行で行う。

その間にも少女は撃ち込んでいく。撃ち込むたびに光武改の調整をしていく。
そして6発くらい撃った後だろうか、ひとまずこの場でできる最高のフィッティングを行った。
少女に声をかける。
「おい、どうだ！」
「…ねえ、お兄さん。私よく小柄だねって言われるの。」
唐突にそんなことを言い始める。まあ確かに少女は小柄なほうだ。同年代と比べても。

「けれど私、今はとっても大きくなったみたい。」

その瞬間、４０ｍｍが火を噴いて１ｋｍほど先にいる中型ネウロイを仕留めた。
次々に火を噴く４０ｍｍ。まるで吸い寄せられるかのように次々に仕留めていく。
ただの一発も外さずに。
「なんか急に４０ｍｍの射撃の質が変わったな…。これは…シムナか？」

アウロラはなんとなくそんな風に思った。

そこから先はもうすごいとかひどいとかを通り越して惨いの域にまで達していた。えげつない連射を畳みかける少女。１分間に１６体ものネウロイを仕留めたこともあった。

当然全部あてていたとしても弾が足りなくなる。弾を求めて腕をすかすかさせるマギウスアーマー。

「持ってきたぞー」

そこにボフォースの弾を持ってくる兵士。なくなることを見越してちょっと無線で無心していたのである。

「お兄さん、射撃は下手だけど気づかいはうまいね。」

うるせいやい！

結果大勢できたネウロイ達は狙撃になすすべなく撤退していった。途中反撃もあったが全部シールドにはじかれていった。その前にたびたび狙撃ポイントも変えていた。

俺はボフォースの弾を持ってきていた兵士に運んでもらって遠くから見ていた。

少女の操るマギウスアーマーはかなりの長距離でも正確に撃ち抜いていた。

「これの弾道にも慣れてきた…。」
２ｋｍとか３ｋｍでも狙撃しかねない精密さだ。いくら何でもここまでくると固有魔法の領域だ。
そう、これが魔導甲冑の魔導甲冑たるゆえん。高められた同調率による魔導甲冑側への作用。固有魔法の増大。
魔導甲冑を通して増幅された魔法力で己の特性を拡張する。それ故に魔導甲冑なのだ。
ただマッピングを変えるのとはわけが違う。
そのままでも使えはするが個人に合わせた調整で個性を発揮するのがこれの真骨頂である。
まあ、それしちゃうと交代で使うことがかなり難しくなるのでエース専用のカスタム処置なんだけどね！
「確かに言うだけのことはあってとんでもない腕してるな、君。」
「…シムナ。シムナって呼んで。みんなそう呼んでる。」
「わかった。シムナ。」
「…ねえ、これ気にいったかも。まだ使ってもいい？」

「…しょうがないな。いいぞ。」

結局一週間、シムナが光武改を使い続けたのだった

フィッティングは通常何回かに分けて調整していく。もとになった術式の関係上、使い続けるうちに自然とフィッティングされる受動的フィッティングと今回みたいな人の手で調整する能動的フィッティングがあるので、受動的なものを含めたうえでフィッティングしていくからだ。

「だんだん使いやすくなってきた…。」

一週間後、ようやく明日、カールスラントへの便がやってくる。これでスオムスともお別れである。

シムナは聞いてきた。

「行っちゃうの…？」

「ああ。」

ここで困ったことがある。シムナ用にフィッティングした光武改である。

彼女、「お別れさせてといって」光武改と見つめ合っている。普段クールな印象なのに凄く目をウルウルさせている。

その光景になんだかとても嬉しくなってきた。ここまで気に入ってくれると作った

こっちも嬉しい。光武改をあげてもいいかなとも思ったが流石に現行機を渡すのは問題がある。

アウロラ中尉がこちらに近づいてきた。そして小声で、

「なあ、どうにかならないか？あれ。」

どうにか、ねえ…。うーん、どうにかしてあげたいのは山々だが…。

「そうだ！アウロラ中尉、確か三号突撃戦闘脚が壊れたとか言ってましたよね、それと壊れた戦車をちょっと貸してもらえませんか？無償で修理しますよ！今ここで！」

「ん？…ああ、なるほどそういうことか。よしっ、ちょっと上司に相談してくる！」

と言ってどこかに行ってしまった。そして、すぐに戻ってくると、

「許可ももらってきたぞ！物資が無くて修理できなかったからな！無償ならありがたいとのことだ！」

と言って三号突撃戦闘脚を持ってきた。

よし、あとはこれと壊れて使えなくなった戦車を…！

後日、スオムスにて、いつのまにか届いていた魔導甲冑で狙撃して回る少女が見受けられたという。

そして、魔導甲冑の支援を受けて、冬戦争が終わった後にスオムスから感謝の意を込

めて、支援された魔導甲冑とパイロットが派遣されたという。

おまけ。

第一次スオムスネウロイ戦争。その戦争で活躍して白い悪魔と言われた少女がいた。

そのあまりの活躍ぶりにネウロイは彼女に集中砲火するようになった。

そしてある時、彼女の光武が被弾した。そしてすぐに回収された。

「シムナ！無事か！」

「私は無事…。だけどこの子が…。グスン。

そこには大破した魔導甲冑が。最後まで彼女を守ったのである。

「あっちゃあ…。…これ、直せるか？」

「わかりませんが、手を尽くしてみます。幸い、エンジン部分は無事だったんで…。」

そうして直った光武改はちょっと歪んでいたという。

その後、復活した彼女たちにネウロイがやられまくったのは言うまでもない。

帝国華撃団整備班の戦い。

ある日、帝国華撃団に新型の魔導甲冑が届いた。しかもそれは一機とか二機ではな

く、魔導甲冑を使う団員全員の分だった。北郷一郎は整備班を集めてこう言った。
「さあ、諸君、楽しい楽しいフィッティングの時間だ。ネウロイの襲撃予測日は…3日後。…デスマーチだな。」
新型魔導甲冑の受領の時、それは整備班のデスマーチの合図でもあった。
フィッティングには時間がかかる。だけどエースが本領を発揮するにはやらなければならない。特に魔導甲冑はエンジンが大きいのでフィッティングも一苦労なのである。
スオムスでやったようなことは例外中の例外。データを取ってその都度調整が入るので、頻度が多く、その分苦労も多い。とはいえ、前の機体のデータもあるので、完全新規からフィッティングするよりかはましではある。
それでも基本的に時間をかけてするものなのに、今回は時間がないので間に合わせるためにもデスマーチということになった。
襲い掛かる眠気…。飛び交う怒号、嘆きの声…。それらを超えた先にフィッティングは完了した。
リベリオンの新型マギウスアーマーが持っているリボルバーから瞬時に12発とんだ。それも正確に。
「オー！だいぶなじんできたねー！整備班の皆さん、センキューー…、グ、グッナイ…。」

アリサ軍曹はその場で生気を失っている整備班を背に立ち去ろうとするが、
「敵襲ー！ネウロイです！付近の友軍から支援要請が来ています！」
「さっそく敵ね！新型の力、試させてもらうわ！」
「ネウロイ!?」
整備班に交じってフィッティングをしていた北郷一郎ががばっと立ち上がる。
「ふはははは！早速フィッティングした新型のちからをみせつけてやる～！」
なんだかテンションがおかしい。明らかにやばい状態であった。こんな状況でまともな指揮ができるはずもない。
その背後から横山少佐が近づき、裸締めで落とす。頭らへんに何か柔らかいものが当たっていた気もするがそんなことを気にできる状況ではなかった。
「えー、北郷隊長が過労で倒れたので、ミカエラ少尉、代わりに指揮をお願いね♥」
「了解しました！」
「他のものも整備班を医務室に運んだら出動！」
「了解！」
号令とともに医務室に運ばれていく整備班。その顔はやり遂げた男の顔をしていた。
「まったく、隊長なのに整備の仕事は譲らないなんて言って無理するんだからもう…。」
横山少佐に連れられて北郷一郎も医務室へと運ばれていくのであった。

本編
第１話

目を覚ますと、そこは見知らぬ天井であった。
状況の把握もできないまま霞みがかったようなはっきりとしない頭でぼうっとしていると、見知らぬ女性がそばに来て、
「まあ、ようやく目を覚ましたのね。具合はどう？」
などと聞いてくるのでとりあえずまだ頭がぼうっとしていると伝えたところ、女性は私の額に手を当てて
「無理もないわ、まだお熱が引いてないみたいだし。おととい急に倒れてから丸一日眠り続けていたのよ。」
と言った。はて、そんな大変なことになっていたのかと他人事のように思ったが熱のせいか何も考えられない。
「喉は乾いてない？何か食べたいものはある？」と訊ねられ、喉は乾いているが食欲はないと伝えると、
「そう…じゃあ今水を持ってきますから無理せずに横になってなさい。」

と言って部屋から出て行ってしまった。横になりぼうっとする頭で辺りを見回すとやけに古風な部屋にいることに気づいたがそれの意味することも考える頭を持たないまま、意識は闇の中へと落ちて行った。

ーーーーーーーー

のちにわかったことだが、どうやら私はいわゆる「転生」といったものをしたらしい。正確には意識が他人の体を乗っ取ってしまったというのだろうか。前世の死因ははっきりと思い出せぬ。そもそも前世というが、死んだのかどうかすらもわからない。が、とりあえず現代の知識と経験といったものを持って今この場にいることだけははっきりと言える。

前世（とりあえず仮称として「前世」と呼び習わしておく）では自動車などの機械工をしていた。この業界に入ったきっかけは幼い頃に見たロボットのアニメやゲームである。そこから自動車などの機械のことに興味を持ち自然とそれに関係することを学び職を機械工とした。また、工作に関しては趣味として様々なものを作ったり原理を調べたりしていた。

ちなみに大人となってからもアニメやゲームなどのサブカルに関しては触れていた。

特にこれといってなんということもない人生ではあった。
簡単に前世のことに語った後は、今現在、私の置かれてる状況について説明しようと思う。
現在は２０世紀初頭、１９２５年。実に私の前世の１００年近く前となる。私は９歳の少年、北郷（きたごう）一郎という名前でここにいる。生年月日は１９１６年１月３日生まれ。
この少年…、といっても今は私なのだが、生まれてすぐに両親を亡くし、親戚であるこの家に引き取られたというなかなかにハードな生い立ちをしている。（ちなみにどうやって知ったかというと少年の記憶のようなものが思い出すような形で浮かんできた。御都合主義万歳。）
このことは引き取った家の養父と養母が話している所を偶然聞いて発覚したらしく、その事を訊ね、それを養父と養母に認められてから少し遠慮がちになっていたが物心ついた頃からの両親といえば今の両親でしかなく、親の愛というものを感じていたので、しばらくすれば吹っ切れて今はなかなかわんぱくだったようだ。
とまあ、この体の元の持ち主の経歴を思うと、当初は他人の人生を乗っ取った感じが大いにしてかなりの罪悪感を感じていたが、さりとてなんとかする方法もわかるはずもないのでやがてあきらめてせめて精一杯生きようと心に決めた。
北郷一郎少年が引き取られたこの家だが、軍人だか武家の家系であるらしくなかなか

に大きい。自宅に道場などもあって父親や母親が稽古をつけている姿をよく見た。また、私には義理であるが妹が一人いる。名は…

「兄上ー。」「章香か。どうした?また遊んで欲しいのか?」「うん!」

名は北郷章香。年は私より一つ下である。物心ついた時からお互いにいるためかよく私の後についてきては遊んでとせがまれることも多い。実に可愛い妹である。

「じゃあコマ回しでもやるか。」「やったー!」「じゃあちょっと片付けるから少し待ってろ。」「うん!」

そう言って私は周りにあったものを片付け始める。

「ねえ、兄上、今度は何を作っていたの?」

「ん?今作っていたのはだな…。これだ。なんだかわかるか?」

「あ!鉄砲のおもちゃ!」「あたり。」

そう言って取り出したおもちゃの銃のスライドを引いて引き金を引くとバネの力によって軽い金属の弾が発射された。

「わ!当たった!ねえ、ふみかにも貸してー!」

「ああいいぞ。ほら。だけど人に向けて打っちゃダメだぞ。」

「うん!」「じゃあ、あの木を的にしてうってみな。」

章香に銃と弾を渡してやるとそれで遊び始めた。軍人の家系だからかはたまた本人

の気質か男の子の好む遊びを章香はよくする。
　ちなみになぜ子供である私がこのような物を作れるかというと、この世界には「魔法」というものが実際にあるらしい。使い魔と契約することで魔法が使えるようになるらしく、魔法を扱える者を「魔女」と呼ぶそうだ。
　この「魔女」は女性が圧倒的に多く、男性はほとんどいないらしいが珍しくも私は男性でありながら魔法を使える「魔女」というわけである。また、固有魔法という物があり、私は金属操作を固有魔法として持っている。かなり精密に操作でき、形も自由自在に操れる。
　それを生かし工作としてこうして物を作っているというわけである。材料は歩いているとたまに落ちている鉄の破片などを拾い集め続けたものなどを使っている。
　章香が遊びに夢中になっている隙に片付けを進める。片付け終わり、章香のところに戻ると少し難しい顔をしていた。訊ねてみると、
「あんまり狙ったところに飛ばないの。」
「ふーむ。てっぽうを構えてみな。」「うん。」
　言われて一度てっぽうを構える章香。
「なるほど、いいか章香。まずはこう構えるんだ。」「こう?」
「そう。それで…。」

章香に説明しながら遊んでいくうちに日は暮れていく。その後、皆で夕食をいただき風呂に入って就寝した。

これは幼い日の日常の中の一つである。尋常小学校（今で言う小学校）に通いながらこのような日々を過ごし、やがて家でも剣道などの武道の修練を習い始め、また、せっかく使えるのだからと同時に魔法の修練も習い始めた。なかなかに忙しかったが、また楽しくもある日々だった。

ーーーーーーーー

――呪術というものがある。とある学者の言うことではそれは類感呪術というものと感染呪術というものに二分出来るらしいとか。

なぜ唐突にこのようなことを話したかというと、まず、ある日道端でとある魔女が魔法力によって人形を自在に操り、人形芝居をしているところを見て興味を覚え、その魔女にどういう魔法を用いたのか尋ねたのである。

その魔女曰く、これは扶桑（この世界における日本のこと）に伝わる魔法の一種で呪術と呼ばれるものだという。丑の刻参りがわかりやすい例だろうか。人を模した人形を呪うと呪いの対象も呪われるというアレである。ようはよく似た物にはお互いに影

響し合うというものである。これが類感呪術。これによって自分の体の動きに合わせて人形を動かしているのだそうだ。

ただしこれだけでは自在に動かすのに足りないので人形に自分の髪の毛や使い魔の毛を混ぜることによって魔力を通しやすくしているのだそうだ。

人形を自在に操る様に俄然興味の湧いた私は、私にも使えるのかと尋ねたが、

「固有魔法じゃないから学べば誰にでも扱えるわ。だけど残念ながら魔女じゃない子には使えないのよ。」

と言われ、

「僕は魔女です。その証拠に、ほら。」

と魔法力を使って見せるとその魔女はとても驚き、

「珍しいこともあるものねえ。」

と言ったが、その後、親切にもその呪術を教えてくれた。早速練習してみたが最初だけあってあまりうまくいかない。それでも毎日暇を見てこっそりと人形を動かす練習をした甲斐があってそれなりに動かせるようになった。

そこで次はもう少し大きめの人形に挑戦してみた。どうやらサイズに合わせて必要な魔法力も増えていくようでそれまでの人形を操っていた時とは違いすぐにバテてしまった。それでも挑戦し続けるうちにだんだんと動かせる時間が増えてきた。

そこでいよいよこれを習った目的である、ブリキで作った人形…つまりロボットのおもちゃを動かしてみようとしてみた。

我ながら実にしょうもない理由で習ったものではあるが、やってみたかったのだからしょうがない。また、金属操作でも同じことはできるだろうという指摘もあるだろうがそれとはまた感覚が違うので一概に同じとは言えない。とりあえずやってみたかったそれだけである。

結果は、それほど芳しくないものであった。動かすことはできたもののただの金属には魔法力が通りにくく、動かしたづらかったのである。要するに効率が悪かった。通りやすくしようにも髪や血液などを混ぜられるはずもない。

魔法力が通りやすい金属。それで作るところから始めなければならない。そういえば、魔法の教練で魔法力をものに込めることをやったなと思い出し、早速魔法力を込めたブリキで作ってみて、それを操ってみた。

感染呪術というものにおいては物質を混ぜる方が通りはいいとは親切な魔女さんからは聞いていたが魔法力でも代用自体はできるようだ。先ほどよりも少ない魔法力で動かせるようになり、効率が良くなった。

しかし、布と自分の髪の毛などを混ぜて作った人形よりも動かしづらかったので出来ることならもっと滑らかに動かせる方法を探したい。

なぜそこまでするのかと問われると純真な男の子の性としか言いようがない。手足のように人型のロボットを動かしたいのである。

出来上がったブリキのおもちゃで遊んでいると母に呼ばれたのでいろいろな発明品を置いてある物置（いつもここで発明したりしている）を片付けて夕食の支度の手伝いをしにいった。

ブリキのおもちゃでも動かせるようになり、このままいけば人型の大型ロボットすらも動かせるようになるかもしれない。

しかし個人の魔法力には限界があり、私はそれが人よりも多い方ではあったが、もっと大きいもの、もっともっと大きいものにしていけばいずれ限界は来る。それを解決することができるものがあるかもしれなかった。魔導エンジンというものである。

エンジンと、魔法力増幅装置を組み合わせたもので、これにより、より大きな魔法力が発揮できるというものである。今の魔女はストライカーユニットと呼ばれる現代の箒を使うことがほとんどである。それ故に魔法の教練をしてくれる先生から聞いたことがあった。

生前、エンジン関係には親しんできたこともあり、興味津々ではあったのだがしかし、まだ幼い子供故にストライカーユニット自体を使ったことはなかった。

手が届くかもしれないのに届かない。そんな状況は私の頭の中に常にどこかストラ

イカーユニットのことがあるという状況を作り出した。思いは募っていき、ある日、先生にストライカーユニットを見せて欲しいと嘆願した。

「師匠！是非！是非！僕にストライカーユニットを見せて欲しいのです！お願いします！何でもしますから！」

その願いに師匠は、

「え、ええ、いいわよ。」

と実にあっさりと返事をした。興奮した私の様子に若干引き気味であった気もする。

「本当ですか！ありがとうございます！」

実に嬉しそうだった私の様子に苦笑しながらも先生はストライカーユニットを持ってきてくれた。

私は実物を目の前にして興奮冷めやらぬ様子で目の前のストライカーユニットを舐めるように見回した。その様子に、

「何がこの子をそんなに駆り立てるのかしら…。」

と若干あきれた様子の先生であった。そして私に、

「履いてみるかしら？」

と尋ねた。

「いいのですか?!」

「ええ。それは歩行脚だから飛行脚と違って初めてでもそこまで危なくないし。それに、もうそろそろ教える頃合いとも思っていたから。」
「やったあ！ありがとうございます！」
「ふふふ、そんなに喜んでくれるなら私もこの子もうれしいわ。」
　そんなこんなで早速ストライカーユニットを履いてみることになったのである。この時のストライカーユニットは後の宮藤理論によって作られたものではないため、原動機をランドセルやリュックサックのように背負うタイプであった。
　先生に教えられて各部の点検ののちにエンジンに火を入れる。そして魔法力をエンジンに送るとさらに大きな魔法力がこちらに返ってくる。
　この時こう思った！おお！これだ！これなら！この方法ならもしかすると巨大ロボットだろうが動かせるかもしれない！私は大いに感動していた。
　そんな私の胸中の野望は分からずとも大いに感動している様子を見た先生は、苦笑しながらも、私の手を取り、
「ゆっくりと歩きなさい。まずはそれで歩くことに慣れることから始めるわよ。」
　とストライカーユニットを使った教練を始めた。
　はじめての教練が終わったのち、私は先生に尋ねた。
「先生！魔導増幅器とはどのようにして作っていて、どのような原理で働くのでしょう

か！」

ストライカーユニットを使っている最中、こっそりとエンジンの仕組みをちゃっかりと調べていた私なのである。（ちなみに固有魔法の金属操作によって調べた。この魔法は金属製品の中身を触れただけで調べられたのである。）

エンジン自体は普通ではあった。だから魔法力増幅装置の方を尋ねたのである。

「まっ！もしかしてそれが目的だったのかしら？本当に呆れた子ね！」

「まってください！確かにそれも目的の一つではありましたが…！」

怒らせてしまったかと思い慌てて弁解を始めるが、

「ふふふっ、本当に機械の好きな子供ね。」

…どうやら少しからかわれたらしい。

「私も使い方は知っているけれど仕組みはよく分からないの。ごめんなさいね。」

「そうなのですか…。」

しかし、知れただけでも一歩前進である。時間はあるのだ、これから調べていけばいい。

「けれど、知り合いにストライカーユニットの整備や開発をしている人がいるわ。その人に会いにいきましょう。」

「いいのですか！」

「ええ。魔法の授業もとても勤勉にこなしてるし。それに、あの子も君みたいな機械が大好きな子が来てくれたらきっと喜ぶわ。」
　何という僥幸！これが落として上げるということか！一気に気分が上昇に気流に乗った私であった。我ながら何とも現金なものである。
　次回の授業の日に一緒に行くという約束をしてウキウキ気分で家に帰る。
「ただいま帰りました！」
「あらお帰りなさい。魔法の授業は終わったのね。まずは手を洗ってらっしゃい。」
「はい！」
　ウキウキ気分は隠していないし、隠せてもいないようで、
「…何かいいことあったのかしら。」
　と目をパチパチとしながら呟かれてしまった。それは妹にも分かったようで、
「お帰りなさい、兄上。何かいいことあったの？」
「んー？ふふふ、内緒だ。」
「あーっ、イジワルー。」
「まあまあ、ほらっ、章香。お人形さんだぞ。」
　魔法力による操りの練習に使った人形を取り出すと、魔法で人形を操ってみせる。
「わあっ、人形が動いた！ねえっ！どうやったの？章香にも教えて！」

「いいぞこれはだな…。」

説明していなかったが章香もこの前魔女となった。人形の操り方を章香を教えてやる。操るところを見守っていると、少し苦戦しており、動きがたどたどしいがそれでも動いた。それがうれしいようで

「わあっ！できた！ねえねえ！章香にもできたよ！」

「ああ、こんなに早くできるなんてすごいぞ、章香！」

「えへへ…。」

と笑っていた。ここまで喜んでくれると私もうれしいものだ。

第２話

待ちに待ったこの日が来た。今日は先生と約束した日だ。
いつも授業を受けている建物に行くと先生が待っていた。
「待っていたわ。それじゃ、いきましょうか。」
「はい！」
先生に言われてついていく。
ちなみに、建物を空けておいて大丈夫なのか、他に生徒とかいないのか、という質問もあるであろうと思うが、この先生は母の知り合いで、少し前に上がり（大抵の魔女は２０程になると魔法力が弱まり、魔力障壁を張れなくなったくらいに退役する）を迎え軍を退役したばかりであった。
今の私の意識がこの体に宿った後に魔女として覚醒した私を、両親は周りが女子ばかりの魔女の学校に通わせるのも精神的に悪影響を及ぼすであろうと思い、さりとて魔法力を使えるなら正しい扱い方を覚えていた方が良かろうとも思い、さてどうしようかと悩んでいたところ、退役したと聞いて、それならばこの子に教えてはくれまいかと頼んだのである。

そういった経緯で習っているので、他に生徒はいない。じゃあ普段はどうしているのかと聞かれると、バーをやっているようである。軍にいた時の知り合いが来るのでなかなか繁盛しているそうだ。父も母と一緒にたまに飲みに来るとか。

私は先生が店を開けない日にこうして教わっているのである。

妹は魔女の養成学校にキチンと通っている。

話が逸れた。先生について行った先には長島飛行脚という会社があった。

「ついたわ。ここよ。私は陸戦ウィッチだったけど、ここの中島という人が軍にいた頃からの知り合いだったの。」

「そうなのですか。」

入った先で先生は受付の方に話しかけた。

「ごめんください、池田和美と申します。中島真里さんはいらっしゃるでしょうか。」

「はい、中島さんですね、少々お待ちください。」

受付の人が奥の部屋に入ってしばらくすると別の女性とともに現れた。

「和美！久しぶりね！元気してた？」

「久しぶり。ええ。中島の方は？」

「私はいつも元気さ！ところでそっちの子供は？」

「紹介するわね、この子は北郷一郎君。北郷さんから頼まれて今魔法を教えてる子なの。」
「北郷一郎です！よろしくお願いします！」
「えっ、てことはこの子は男の魔女なのかい!?珍しいこともあるもんだねえ。」
「そうなのよ。魔女の訓練学校に行かせるのも精神的に辛いだろうってことで私が頼まれたってこと。」
「ふーん。そうなのかい。で、どうしてその子を連れてここに？」
「そうなのよ。実はね、この子とても工作や機械いじりが好きみたいでね、この前ストライカーユニットを見せたところ、興味津々になっちゃって。魔導エンジンの仕組みや原理を聞いてきたのよ。それであんたなら教えられるかもしれないってことでここに来たわけ。あなた、こういう子好きでしょ？」
「そういうことか。なあ、坊ちゃん、ストライカーユニットの仕組み、知りたいかい？」
「はい！とても！その代わり僕にできることならなんでもお手伝いします！だから、お願いします！」
　勢いよく返事して頭を下げると、中島さんは笑って、
「ははっ、こりゃ元気な子だ。それに熱意もある。よし、わかった。教えてあげるからこっちに来な。」

「ありがとうございます！」
「よかったわね、それじゃ私は後でね…。」
　帰ろうとした先生の肩を中島さんが掴んで引き止めた。
「まあまあ、せっかく来たんだからさ、ちょっとテストに付き合ってくれよ、なあ？」
「くっ、やっぱりこうなったか…。」
「昔は空戦ストライカーユニットも使ってたこともあるしさあ、シールドは張れなくなったけどまだ飛べるだろ？な？ちょっと手伝ってくれよ。今テストパイロットが足りてないんだよ。」
「はあ、仕方ないわね、まあ、こっちから頼み事してるんだしこれくらいはいいか。」
「おう、それじゃ、こっちだ。ついてきてくれ。」
　中島さんについて行くとそこには真新しいストライカーユニットがあった。
「今製作してる最新鋭機ってやつでね、こいつをテストしてもらいたいのさ。おーい！新しいテストパイロット連れてきたからこれと一緒に飛行場に連れて行ってくれ！」
　近くを通りかかった人が中島さんに呼ばれて、トラックにストライカーユニットを乗せ、先生を助手席に乗せて飛行場に向かって行った。
「んじゃ！後は任せたぜー！…さて、じゃあ私達も行くか！」
「はい！」

　再び建物の中に入り、中島さんについて行った部屋に入ると、そこには様々な部品があり、ストライカーユニットが組み立てられていた。
「ここでストライカーユニットを組み立ててるんだ。別のところで作られたエンジンなどの部品をここに持ってきてる。それで…、あった。これが魔導エンジンだ。こいつをバラしながら解説していこうか。」
「えっ、いいのですか？大切なものでは？」
「いいんだよ、こいつは送られてきたはいいものの失敗作だったからね。どうせバラしちまうのさ。」
　その後、中島さんに実物を使った魔導エンジンの解説を聞いた。私はそれを一言一句聴き漏らさまいと集中していた。
　曰く、魔導エンジンにはあらかじめ魔導理論による術式が込められてるそうだ。例えば、これにより飛行術式を魔導エンジンに込めることで飛行魔法を習得していないものでも飛行魔法により空を飛べるようになるのだとか。
　また、魔法力増幅器についても詳しい理論を聞いた。
「とまあ、これが魔導エンジンの仕組みってわけだ。わかったかい？」
「はい！」

「いい返事だ。…そろそろテスト飛行も終わった頃かな。迎えにいこうか…。ん?」
中島さんは何かに気づいた様子で視線をそちらに向けた。釣られて視線の向く方向を見ると、男の人が二人なにやら揉めている様子。中島さんはそちらに向かい、
「なにがあったんだい?」
と尋ねた。すると、
「発注ミスで部品が足りないんですよ。連結させる部分なんでかなり重要な部品でこのままじゃ完成できません。」
「なんだって?参ったね、あれは今日中に完成させておきたかったんだが…。」
どうやらあのストライカーユニットが問題のもののようだ。少し近づいて見てみると、ネジを入れるために空けてある穴があるが、ネジが締められていない部分がある。足りない部品というのはこれのネジのことだろうか。触って金属操作で解析してネジの大きさと長さを調べてみた。
「あ、こらっ!ダメだよ触っちゃ!」
すぐに引き離されてしまったが、ネジの大きさはわかったので、そこら辺の作業台の上に無造作に置かれている、破損して使えない部品を手に取ると、今度は、
「あの、これ少し使ってもいいですか?」
と使っていいか許可を尋ねた。

「一体何をする気だい？」
「これで部品を作ります。」
「できるのかい？」
「はい。」
　そう返事すると男の人は呆れた様子で言った。
「どうやってやるってんだ全く…。」
　しかし、中島さんは、
「よし、いいよ、やってみな。」
「いいんですか?!」
「どうせ今はお手上げだしね、なら賭けてみるのもいいだろ。」
　許可をもらったので、壊れた部品を先程の穴に合わせたネジに金属操作で加工した。
「どうですか？ネジの頭はどの形にすればわからなかったのでとりあえずプラスのネジにしました。」
　ネジを一本渡すと早速はめていく。
「バッチリです！」
　それを聞くと足りない分を全部加工して渡していく。なんとかストライカーユニットは完成したようだ。

「やるじゃないか！助かったよ。だけど、今度は勝手に触らないようにな！」
とお礼と同時に釘を刺されてしまった。まあ当たり前である。反省。

今度こそと飛行場の方向に向かうと、ちょうどトラックがこちらに走ってくるところであった。
「おう、お疲れ！どうだった？」
「いいデータが取れましたよ！これから改良部分の検討をしないと！」
「和美もテストご苦労さん。久々に空を飛んだ感想は？」
「そうね、ま、悪くない気分だったわ。」
「そりゃよかったよ。」
技師の人と別れて二人は話しながら移動していく。どうやら応接間のようで、椅子に座った二人は話に花を咲かせている。
邪魔するのは気が引けたので私もちょこんと椅子に座り、黙ってお茶をすすりながらじっとしていた。
最近は剣道の稽古や魔法の授業に工作とやりたいことが多すぎて忙しかったのでたまには何もせず、何も考えずにこうしてお茶をすすっているのもいいかもしれない。

その後も話は続き、時間は流れていき、そろそろお暇することとなった。
帰り際に思い切って私はこう切り出した。
「あの、すみません！」
「ん？何だい？」
「その、またここに来てもいいですか？邪魔にならないようにしますから！僕にできることならなんでもお手伝いもします！」
「ええっ!?」
私の唐突な申し出に先生はびっくりしていた。
中島さんは笑って、
「そう来ると思ってたよ。」
と言った。そして私の顔を覗き込み、
「一郎くん、一つ聞かせてほしい。…物作りは好きかい？」
「はい！とても！」
「そうか、…よしわかった！ここに来るときは私の名前を出しな！私が責任を持って面倒を見る！」
「本当ですか！ありがとうございます！」
正直流石に断られるかとも思っていた。だからとても嬉しい。

目の前で聞いていた先生は慌てて中島さんの手を引っ張っていった。
「いいの？子供を連れ込んだりして。」
「いいんだよ、ああいう熱意のある子がこの業界には必要なのさ。
……それに、正直に言うとあの子の魔女の能力はとても有望だ。伸ばしてやりたいのさ。」
「真里…。そう、じゃあ何も言わないわ。」
話が終わったのか二人は戻ってきた。そして、中島さんに見送られて先生と二人で工場を後にした。
帰る道すがら、ふと立ち止まり、こちらの顔を覗き込むようにして先生は聞いてきた。
「ねえ、物作りは、好き？」
「はい。」
先生の顔を見ながら返事をする。先生は真剣な顔…というわけではなかった。微笑みながらの質問であった。
しばらく無言で見つめあっていたが、
「そう、ならよかった。」
と言って先生は顔を前に向けてまた歩き出した。

ーーーーーーーーー

初めて長島飛行脚を訪れてから何年か経った。

あれから私は剣道の稽古も、魔法の授業も欠かさず学び続ける傍、長島飛行脚に通い続けていた。

私が来ることに初めはいい顔をしていなかった長島飛行脚の人達ではあるが、度々困った時に、金属操作で手助けをしたり、魔法力による身体強化を生かして一緒に重いものを運んだり、また、他のテストパイロットの方に飛び方を教えてもらって飛行テストを手伝ったりしているうちに打ち解けていき、今では、

「おう、一郎、来たか。」

「一郎君！こっ）頼む！」

「一郎、これ、食うかい？」

と親しげである。

また、時折エンジンの開発をしている工場に行って魔導エンジンのテストを手伝ったりしたこともある。お陰で魔導エンジンのことも詳しくなった。

そんな１２歳のことである。私は魔法力増幅器の材質なども調べて、長島飛行脚を手

伝って時折もらえたお駄賃で材料も揃えた。（ちなみに合金の比率なども金属操作で分かる。悪用すれば産業スパイである。そんなことしないが。）

そこでいよいよ自分だけの魔導エンジンを作成しようと決めたのである。

それは夏休みのことであった。

どうせ作るのならできるだけ大きなものにしよう。そう決めた私は前世の知識を活かして出来る範囲で高性能化を図り、飛行脚や歩行脚に使われているエンジンよりも大型のものを設計した。

固有魔法の金属操作を活かして設計図通りに精密な部品を作り、組み立てていく。

初めに完成したものは設計図が間違っていたのかあまりよろしくないものだったので原因を探って設計図の手直しをするとバラしてまた組み立てていった。

そうして失敗しては設計図を書き直して組み立て、失敗しては設計図を書き直して組み立てのトライアンドエラーを繰り返してようやく完成した。

「出来た…!!!やった…!!!」

苦労の末に作り上げたエンジンを前にして感動もひとしおであった。私は小躍りしたい気分を抑えて燃料を入れて魔法力を送った。

大型化の影響で、始動するのにかなりの魔法力が必要ではあったが無事に起動した。しかし、その分大量の魔法力が増幅されているが肌で感じる。大成功だ！

ちなみに、何に使うわけでもなく起動したためその大量の魔法力は溢れかえりそうになり、制御できなくなりそうになったので慌ててエンジンを止めたのは余談である。

完成したエンジンを前にして有頂天であった私ではあるがはたと気がついた。これを載せるものが完成していないのである。長島飛行脚のお手伝いをしている合間にもブリキから鉄に材質を変えながらも人形作りとそれを操る練習はしていたのだが、まずはエンジンがなければどうしようもないと、ある程度の大きさで止まっていたのである。

夏休みが半分終わった八月初頭のことだった。プラモを作っていたこともあり、まずは造形から決めることにした。人型であるのはもちろんのこと、どのようなデザインにしようか、…そんなことを考えていた時、

家に帰ってきていた父が居間でくつろいでいた。そして何かを見ていた。

父に尋ねると、

「これは大正浪漫の時代の読み物だ。」

と言った。

大正浪漫。その時、わたしの脳裏に浮かんできたものがあった。大正浪漫を背景にしたロボットや恋愛など、さまざまなテーマを盛り込んだゲーム。そう、タイトルは…そ

う、『サクラ大戦』であった。

わたしが生まれた頃には少し昔のゲームではあったが、とあるきっかけがあって一時、ハマっていたことがある。ロボ（パワードスーツが近いが）である光武も味のあるデザインで好きだった。今でも鮮明に思い出せる。

設定も霊子と蒸気機関で動くというもので魔法力で動かすこれにぴったりであろう。搭乗者の動きをトレースする仕組みでもある。

わたしにはこう言った外観のデザインの経験などはなかったし、この際だから丸パクリしてしまおう。個人的なものだし、後の世に残るはずもなし、きっと許してくれるだろう。（と思いたい。）

思い立ったが吉日。そうと決まれば早速記憶からデザインを掘り起こして設計をしなければ。今の技術では再現できない部分もあるのでそれと打ち合わせながら作る。

方向が定まったことによりわたしはとても興奮していた。

「…また何か企んでいるようだな。」

「いいじゃありませんか。あの子の作るものは大概見ていて飽きませんわ。」

後ろで両親のそんな会話が聞こえた。

後顧の憂いを断つべく、夏休みの宿題はさっさと終わらせてしまった私は早速光武を

作り始めた。デザインは決まっているので後は中を作る。
大型にした分重くなってしまったエンジンを支えるために、構造はモノコックではなく丈夫に作った骨材に鉄板を貼り付けていく方式にした。また、胴体はかなり簡易的にしてある。
手足は胴体とは別に作っていく。取り替えやすく、また、運ぶ時に分けて運べるようにするためだ。（どこに運ぶとか聞かれても困るが実用性っぽいのを追求するのもまた浪漫である。）
支える足は太めに、接地面積も大きくなるように。
手は肩から手首までは丈夫にするために雑…もとい、簡素な造り。手首から先だけが細々とした造りにした。
魔法力が動力なので関節はモーターなどが付いていない。だから可動域を人間と同じにしたほかは摩擦を軽減するように工夫しただけである。
元ネタの光武においてエンジンの配置は背中であった。だが、エンジンが重くて背中にするととてもバランスが悪かった（サクラ大戦における最初の人型蒸気、スタアと同じである）ので、重心が下に来るようにエンジンは股間のあたりに配置することにした。燃料タンクは断熱処理してその上に位置する。
コクピットは燃料タンクと背中合わせにしてエンジンの上に配置。そのためエンジ

ンをかけるとちょっと内部気温が上がる。
この数年で魔法力に関する新しい技術も覚えた。術式を刻む技術である。魔導エンジンの技術であるがこれを応用して骨材に操るための術式を刻んだのである。
これによってより精密な動作ができるようになった。
魔法力も通りやすく、機体の上から直接魔力障壁を張ることもできる。
強化の術式も刻んだのでエンジン起動時は耐久性の向上のほか、見た目よりも怪力を発揮できる。

機体は夏休みも終わりの八月三十一日、ようやく完成した。名前は元ネタである光武をそのままいただいた。
外観は全体的なシルエットは元ネタのものに近いがなにせ色々と自分好みに変えてあるため所々違う。
完成した時は達成感と疲労で感動をする間もなかったが、翌日改めて見ると心の底から喜びが湧いてきた。ドキドキしながら搭乗する。
起動する前の点検をおこなってからいよいよエンジンに火を入れる。
かかった！その力強い鼓動はコクピットにも伝わってくる。

そして挙動を確かめる。まずは手だ。ゆっくりと握りしめる。
動いた。続いて腕を動かす。まるで自分の手のようだ。
そしてつぎはゆっくりと足を動かして…歩けた！
自分の足で動くように動いている！右足、左足また右足と一歩ずつ進んでいく。そして物置から庭に出た。

ちょうど章香が帰ってきていたようだ。驚きのあまり口をあんぐりと開けている。
章香の方へと歩いていく。放心状態で動けないらしい。光武で一歩手前くらいの距離まで近づくとようやく口を動かした。
「な、なんじゃこりゃあああ!!!?」
大声で叫び驚きを表現している。その叫び声を聞きつけて家にいた母が飛び出してきた。そして光武を見るなり、
「あら、まあ…」
と呟いた。流石の母もこれには驚いたようだ。
コクピットのハッチを開けて顔を出すと、
「兄上!?ではこれは兄上の発明品ですか!?」
と章香が尋ねたので母と口を揃えて、

「兄上が発明好きなのは知っていましたがこんなものまで作るとは…。」
「一郎が発明好きなのは知ってたけどこんなものまで作るとはねえ。」
と呟かれてしまった。
そのあと、章香も乗った。
「まるで鎧でもきてるみたいに自在に動かせますね！」
というのが感想だった。

ちなみに、翌日、光武は夏休みの宿題として持って行ったら先生に怒られた。是非もないよね。
「君が発明好きなのは知っていたがこんなものを学校に持ってくる変な子だとは思わんかった。」
とのこと。

第３話

初めての機体を造ってからしばらくして、今度は長島飛行脚にも持って行った。

中島さん他の感想は、

「な、なかなか斬新な発想だな…」

「無駄がありすぎるがエンジン部分には目を見張るものがある。」

「歩行脚でいいんじゃねえか？もしくはエンジンを歩行脚に転用するか。」

「馬鹿、どうやってあんなもの背負うんだよ。」（まだ宮藤理論は発明されていない）

「ま、なんにせよ、うちは飛行脚の会社だぜ？無用の長物ってやつだ。」

とのこと。まあ仕方ないよね。クレーンが使えない場所などで重機の代用として使用するくらいしか今のところ価値は無い。

それでもいい。どうせ趣味で作成したものだし。性能を高めていく努力はするが。

初めての機体を造ってからそれなりの年月が経った。俺はもう２０歳ほどになる。

あれからも長島飛行脚で働いている。

代々軍人の家系なら軍人になるべきなのでは?と思いだろうが、妹の章香のほうが優秀であり、俺は小さい頃から発明ばっかり繰り返し、養子であるゆえに、軍人になるよりもそちらで働くほうが世の中の役には立つであろうということでそちらで働いている。

今でも剣道の稽古は続けているが、最近は妹に勝てないでいる。ちょっと悔しい。

光武もそれなりに改良している。エンジンもそうだが、操作に関してもだいぶ変わったことがある。まず、術式による操作に加えて、機体に対し、使い魔とシンクロさせる方式を採用したのだ。

わかりやすく言えばエヴァンゲリオンみたいなものである。私とシンクロしている使い魔を通して機体とシンクロすることでより感覚的に動かせるようにしたのだ。

これにより、今までよりもはるかに効率が良くなり、動きもかなり滑らかになり、直感的に動かせることで初めてでもそれなりに動かせるようになった。(今のところ使い道はないが)使い魔の負担も減ったようだ。

シールドや強化魔法も効率が上がったことで更に強く発揮できるようになった。(シールドは今の所使い道がないが)

また、バランス感覚も取りやすくなり、ローラータイヤによる走行もバランスをとれ

るようになった。これは時速６０ｋｍほどで走行できる。
　こんなところであろうか。

　１９３６年七月の今、俺はヒスパニアにいる。光武を見せた後、魔導エンジンの作成などができることが認められ、長島飛行脚でストライカーユニットの作製の手伝いをしていたのだが、技術交流のためにブリタニアに向かう途中なのだ。光武も持ってきている。重機兼工具として便利だ。
　その途中、ヒスパニアとガリアの国境近くの港町に寄港している。

　そして、そのヒスパニアにて、運命の日を迎える。
　折角寄港したのだからと街を観光していると唐突にサイレンが鳴り始めた。何事かと思って辺りを見回すと黒色のなにかが飛んでいた。あれは一体…。
　その時、黒色のものから何かが街に向かって発射された。それは町に着弾すると町を破壊してがれきを巻き上げた。
「あれは…！」
　恐らくあれは怪異と呼ばれるものだろう。大昔から人類の敵として存在したもの。魔女は昔からこれに対して戦ってきたのだ。

つまりこれは空襲のサイレン。避難警報なのだ。ここは危ない。俺も急いで避難しなくては！

俺は急いで近くの港にある光武のもとに向かった。普通に避難するよりもシールドの強度も強く、走るよりも早い光武の中にいたほうが安全だ。

それにストライカーユニットのこともある。

避難する人達の流れとは別方向に走り、ついた先で船から荷下ろしされた荷物の中に光武を見つけると急いで飛び乗った。

コクピットのハッチを閉めるとエンジンを始動させる。そしてストライカーユニットを見つけると光武の手で持ち、移動を開始した。

怪異が移動する方向とは別の方向に向かって光武を走行させる。

その途中、がれきの下敷きになり動けない女性とその傍らで泣いている子供、そしてがれきをどかそうとしている少女がいた。恐らく怪異の放った弾で崩れた建物の下敷きになったのだろう。

…人としてこんな場面を見過ごすことはできない。光武をそちらに走らせた。

「もうこんな近くまで！くそっ嬢ちゃん！君だけでも逃げるぞ！」

怪異と誤認されたようだ。

慌てて撃ったせいかすぐに弾切れしたようでその隙に声をかけて誤解を解いた。
「待て！俺は怪異じゃない！逃げなくてもいい！」
「しゃ、しゃべった!?」
「俺ががれきを持ち上げる！その隙に引っ張り出せ！」
多少強引に押し切る形でがれきを持ち上げると慌てて兵士は女性を引っ張り出した。
「怪我はないか？」
「助けていただいてありがとうございます！」
「助かったよありがとう！」
「礼はいい！ここは危ない！早く避難するぞ！」
「はい…痛…！」
咄嗟に足を抑える女性。見ると母親はがれきに挟まれたときに足をくじいていたようだ。
しょうがない！
俺はコクピットのハッチを開けると母親を抱えてまたコクピットに戻った。一人乗りを想定して作ったから狭いが十分入れる。
「安全な場所まで走らせる！背中の取っ手につかまってろ！」
「わかった！」

少女は子供を抱えると光武の背中にあるコクピットに乗り込む時などに使う取っ手につかまった。
それを確認するとストライカーユニットを掴み、町の外へと走り出した。

街からそれなりに離れた地点。街道近くの避難してきた人たちが集まっている場所に着くと3人を降ろした。
「あらためてありがとう。私はアンジェラ・サラス・ララサーバルだ。あなたは?」
「俺は北郷一郎だ。」
自己紹介を終えて街のほうを向くとようやくウィッチが出てきて戦っているところだった。しかし数が少ない。
それに街からも対空砲火は飛んできているが一時的に怪異を傷つけてもまたすぐに再生してしまうようだ。
「…ヒスパニアには機材が少なくて航空ウィッチの数が少ないんだ。」
「…それじゃ被害が広がるばかりじゃないか。」
怪異は今も暴れまわっている。被害は今も拡大しているのだ。俺は少し悩んだ末に、少女に声をかけた。
「なあアンジェラちゃん。」

「アンジーでいい。なんだ。」
「さっき使い魔とシンクロしているのを見た。君、ウィッチなんだろ？光武（こいつ）動かせるか？」
「その奇怪なものをか？なぜだ？私に何をさせるつもりだ？そもそも動かせるかも怪しいぞ。」
「エンジンさえ始動させられるんなら感覚的に動かせる。ここには大勢の避難してきた人がいる。
　いざとなったらそいつで守ってほしいんだ。何も武器でどうこうしろってわけじゃない。
　そいつは張れるシールドの強度がかなり強いからそれで避難民たちの壁になってほしいってことさ。」
「それはストライカーユニットだったのか…。ということはあんた、ウィッチなのか？」
「まあね。俺はこのストライカーユニットで出撃する。武器は…誰かに貸してもらうとする。」
「…わかった。こちらは任せろ。」
「それじゃ、頼んだ。」

原動機を背負わせてもらい、ユニットを脚に履くと、エンジンを始動させる。
原動機と光武との連結を外す（光武のエンジンユニットに接続することでエンジンの始動の補助ができる。）と街道を滑走路代わりにしてゆっくりとスピードを上げて離陸する。
町の方向に向かうとまだ戦闘は続いていた。敵は3体ほどであるが攻めあぐねているようだ。
街から機銃による対空砲火が飛んできている。そのうちの一つにスピードを落として近づいて兵士に話しかけた。
「すまないが武器を貸してくれないか！航空ストライカーで出たはいいものの武器がないんだ！」
兵士は一瞬躊躇したものの俺が航空ウィッチだとわかると、
「わかった！頼む！」
と武器を渡してくれた。今は一人でも対抗できる戦力が欲しいのだろう。
武器を受け取ると再びスピードを上げて上昇する。
そして今度は戦っているウィッチの一人に近づいて、
「俺は扶桑のウィッチだ！貴軍に協力する！」
といった。

「扶桑の？それに男？まあいいわ！貴官の参戦、ありがたく思います！
あなたはわたしについて！僚機が落ちたの！」
「了解した！」
ウィッチについて飛んでいく。基本的な飛び方やある程度の戦闘機動はテストパイロットをした時に習っていたし、銃の打ち方も習っていたが実戦は初めてだ。
不安な心を押さえつけ銃を構える。
……一緒に飛んでいたウィッチの援護に必死で戦闘の経緯は詳しく覚えていない。
だが、何とか撃退には成功したようだ。一緒に飛んでいたウィッチに声をかけられる。
「終わったわ。勝ったのよ。」
その言葉でハッとなる。そしてあたりを見回すと、至る所に怪異の残した傷跡の残る町が見えた。
勝利はしたもののその代償はあまりに多かった。
ヒスパニアの航空基地に着陸させてもらい、ストライカーユニットを預けると、町の方向へ車を出してもらった。

避難場所に向かうとアンジーと名乗った少女が光武に乗ったままでいた。
「無事だったか！」
「ああ。おかげさまでな。」
「町は…無事といえないけどな。」
あたりを見ると傷ついた街を見て途方に暮れている住民たちが見えた。
「命があっただけでも儲けものだ。」
「そうだな…。なあ、君はこれからどうするつもりだ？」
「怪異の発生の知らせを受けて各国から軍隊が送られてくるそうだ。
そのうちのガリアの駐屯部隊がこの近くに来てる。そこに志願するつもりだ。」
「そうか。…ならまた会えるかもしれないな。」
「というと…もしかして。」
「ああ。俺も志願することにした。とはいえ…さっきの戦闘で航空ストライカーは壊れてしまったんだが。」
「ということは…これで戦うのか!?」
「代わりの機材がなければ。」
アンジーは信じられないという顔をしている。さっきまで乗っていたのにまだ信じられないのか。

「いや、それは…そうだが…。」
よかったら提供してやろうか？
「いや、私は航空ウィッチになると決めているのだ。遠慮しておく！」
その様子が必死だったので思わず笑ってしまった。
それにつられてアンジーも笑う。
「じゃあな、元気でやりなよ。」
「ああそっちもな。」
アンジーと別れてヒスパニアの航空基地に向かう。そこで世話になることになっているのだ。
さて、ひとまずは…
「壊れたストライカーユニットの修理しないとな…。」

第４話

ヒスパニア戦役に志願兵として参加してしばらく経った。小規模な怪異の発生ではあったがそれでも何回かの戦闘を経験した。

俺は飛べはするものの特に眼を見張るところがあるとかそういうのは無かった。それでも二体ほど撃墜したし、落とされかけることはあっても落とされるようなこともなかった。

しかし、この前長機をかばって被弾した際にストライカーユニットがぶっ壊れてしまい、お得意の金属操作で直そうにも材料もないので直せないでいた。

そこで、カールスラントから提供された機材を借りようと思ったのであるが、あいにく予備機がないとの事。

そこで地上で陸戦ウィッチ達と一緒に戦うことになった。

使用するもの？もちろん、光武だよ♪

なお、一緒に戦う部隊と合流した際、やはり初めて見た人の感想は、

「あれで戦うのかよ…。」

だの、

「ほんとに戦えんのかよ…。」
だの、
「おれ、弾が大量に飛んできそうだから離れて戦うわ。」
だの散々であった。
一部の方は、
「こりゃ随分と頼もしい姿をしてることだ。」
「おれに弾が飛んでこないように頑張ってくれよ！」
と好評？ではあったが。
地上部隊とは主に防衛を主任務することになるそうだ。
とりあえず光武の武器を調達しなければならない。
この怪力だ。それなりに重いものでも扱える。ということで機銃の他に火砲を持たされることになった。
持たされたのは３．７ｃｍ ＰａＫ ３６ Ｌ４５（４５口径３７ｍｍ対戦車砲）。
それとカールスラントの二号戦車の主砲、２ｃｍ ＫｗＫ ３０ Ｌ／５５。使えるのならできるだけ火力を持たせておこうということだそうだ。
それらを光武で使いやすいように即興改造する。（事前に許可はもらった。）

また、接近されたときのためにも金属の棒状のものを携行し、
そのパワーを生かして塹壕を掘るための巨大スコップも持っていく。
また、光武に対しても改造を施しておいた。予備の弾倉を携行するためのラックの増設や、
背中部分にスコップなどが取り付けられるようにした。
コクピット部分に入らない食料や水などは燃料タンク部分（つまり背中）の改造をしてそこに入れるようにしてある。
また、頭頂部のハッチにキューポラを増設。コクピットから潜望鏡を使うことで、振り向かないまま後方や横を確認したり、（背中にエンジンを設置していないため元ネタの背部の盛り上がりはないので後方も見れる。）
より遠くを見渡せるようになった。また、これにより伏せても匍匐前進ができるようになった。（これまでは匍匐前進する必要なんてなかったからね）
匍匐して進むことで前方投影面積が小さくなる。これは大きい。（とはいってもずんぐりむっくりなので１ｍくらいの高さなのだが。）
それに塹壕に隠れた状態からキューポラ部分だけを出して確認しつつ腕を上げて銃撃なんてことも可能。
キューポラはかなり小さいし、人間がそのまま出るのと違ってあたっても即死しな

い。（その前にシールドで防げる。それでも当たったら破片がコクピットに来るのだが。）

今現在確認されているネウロイの進行ルートから進撃してくるであろう方向に塹壕を掘っていく。

こういう場面なら光武の出番である。パワーの違いというものを見せてやろう！

ぐんぐん掘っていく。陸戦ウィッチなどの歩兵が使う塹壕と光武が使う塹壕は分けて掘ってある。

「すげえスピードで掘ってくな。俺らの仕事が減って万々歳だ。」

「案外頼もしいじゃねえか。」

続いて塹壕に使う木材も運んでいく。光武の肩の上のあたりから、背中のものが入る部分にワイヤーを入れている。これで上から吊るすことで塹壕の壁の補強工事も楽に進んだ。

重い機関銃の設置もである

そのおかげでかなり早めに塹壕はひとまず完成した。

「いいなあれ、うちでも重機として注文してみたらどうかしら？」

「でもあんなに大きかったら高そうね。」

「それに誰が乗るのよ？私はいやよ。狙われやすそうだし。」
好き勝手言ってくれるなあ！もう！
塹壕が完成した後も更に強固にするために補強は続いていた。対空砲の設置なども手伝った。
そして、ひとまずの完成を見て2時間ほどたった後、燃料が半分を切っていたので燃料を補給している最中、
ネウロイが襲撃してきた。まずは飛行する奴らが、それから地上型が。
飛行する奴らの攻撃に対して地上の戦力は弱い。塹壕も上からの攻撃には弱いのだ。
それに機動力が違いすぎて有効な対処がしづらい。基本的に対空砲か航空ウィッチにおまかせするしかない。
爆撃機のネウロイが戦闘機のネウロイに護衛されながら飛んでくる。そして爆弾を落としていった。
次々と爆発が巻き起こり大地を巻き上げていく。
こっちにも一つ落ちてきたがさすが光武だ。なんともないぜ。
「あんな近くで爆発があったのにピンピンしてやがる…。」
「…俺あいつの後ろに行こうかな…。」
一回目の爆撃があった後、航空ウィッチが戦線に到着し戦闘機型のネウロイと戦闘を

繰り広げ始めた。
さて、こっちはこっちの仕事をしなければ。
爆撃中に進軍してきた地上型ネウロイへの攻撃を開始する。
まずはキューポラだけ出してネウロイの位置を確認すると対戦車砲を構えて、
コクピットの窓から照準器を覗き（カメラアイ?･元ネタと違ってそんなものはない（悲哀））狙いを定めて撃つ。
一発目は外れた。反撃が飛んできたので塹壕に身を隠す。
身を隠しつつ２発目を装填してキューポラで相手の照準がどこを向いているのか探る。
まだこっちを向いている。
今度はキューポラから狙いを定めながら２０ｍｍを放つ。こちらは狙っていたやつにどんどん当たった。
５発ほど当たるとネウロイは倒れて動かなくなった。
その間に詰めてきたネウロイがいた。味方のいる塹壕に接近していく。
射線上に味方はいない。距離にして３００ｍこの距離なら!
攻撃が飛んでくることを危惧してシールドを張りつつ身を乗り出した。
そして対戦車砲を構えて撃つ。今度は当たった。一撃でネウロイは動かなくなった。

よしっ！

喜んだのもつかの間、敵の攻撃が飛んできた。シールドで防いだが慌てて身を引っ込める。

そしてまたキューポラから索敵する。今度はほかの味方が激しい攻撃を受けて反撃できないみたいだ。

注意を引き付けるために、現在位置が判明している、コクピット前方の窓からでは見えない敵の方向にシールドを張りつつ、攻撃している敵の方向へ２０ｍｍで制圧射撃する。

５発ずつを弾倉が弾切れになるまで繰り返す。弾倉の交換を挟んでもう一度弾切れまで撃つ。

合計１０発ほどあたり、撃破したのは1体だけだが何体かにダメージを与え敵の注意はこちらに向いた。

攻撃がやんだ隙に味方が反撃を繰り出し、ダメージを追っていた敵は次々撃破された。

「助かったぜ！」

「感謝する！」

弾切れになった弾倉を交換して再び索敵すると空から何か飛んできていた。窓から

双眼鏡で確認すると、
航空ウィッチの攻撃から逃れた爆撃機タイプの敵が２体。こちらを攻撃しにきたらしい。
航空ウィッチは戦闘機タイプとの戦闘で釘づけにされていてこちらに戦力を割けない。
敵はこちらに少し速度を落としながら降下してくる。味方もそれに気が付いて小口径の対空砲を放つ。
俺もそれに合わせて敵の進路に合わせて２０ｍｍを放つ。さっき交換した弾倉が無くなるまで撃ったが、
あたったのは４発程度。それでも味方の弾も合わせてあたっていて２体とも撃破できた。
「ナカナカヤルジャナイ！」
「器用ねあれ！」
戦闘はその後、１時間ほど続いた。進行してきたネウロイは撤退。こちらの勝利に終わった。
戦闘終了後。光武を所定の場所に移動させて降りると、様々な人に話しかけられた。
「今日は助かったぜ！」

「見直したわ！」

そんな感謝の言葉を聞くと気恥ずかしかったが、同時に少し誇らしかった。

第５話

前回の戦闘から3か月ほどたった。各国からの支援はさらに送られてきて、それを基にしたウィッチや兵器の活躍によって怪異に支配されていた地域は次々に開放されていった。

ヒスパニア戦役は終わりを告げようとしていた。

俺が所属している部隊は怪異に支配された街の開放をするため進軍。同地域にいる怪異をせん滅することとなった。

相変わらず光武に乗って戦っているほか、連合軍の機材が余っていた場合に一時的に貸与されて航空ウィッチとしても戦った。とはいっても爆撃の数を増やすためのものが多かったが。

しかし、カールスラントの新戦術、急降下爆撃やジュゼッピーナ・チュインニ曹長の跳躍爆撃（スキップボミング）など、見るべきものは多かった。（できるとはいっていない）

だんだんと寒さが厳しくなってきた頃、怪異の活動が鈍ってきたのを好機としてスペ

インで最も冬の気温が低い都市、テルエルを奪還すべく襲撃することとなった。ここは怪異に支配された地域のうち、突出した状態であり、ここを奪還すれば内陸と沿岸部との連絡線が短縮できるのである。

また、２つの川の合流地点の近くにあり、水を苦手とする怪異に対する前線として使いやすかった。

しかし、補給の不備があり、事前の空襲や砲撃がなかったため最も厳しい戦いを強いられることとなった。

テルエルは標高３０２０ｍの高地にあり、険しい渓谷、歯のような形をした山頂、湾曲した尾根といった険しい地形に囲まれた自然の要塞だった。

テルエルの歯と呼ばれる、テルエルの西にある峰に対峙する陣を張った連合軍は、全方位から町を包囲。

そして街に突撃をかけた。

俺も街に突撃する部隊の一員として参加。光武は魔法による強化でかなり頑丈かつ運動性能が高いため、こういった地形ですら踏破できる。とはいっても弾薬の補給や、その大きな魔道エンジンを動かすために必要な燃料など、戦車並みの兵站が必要なので突出はできない。

だからって補給物資を乗せたトラックを光武で持ってトラックが走破できない地形を越えさせられるとは思わなかった。

この時、陸戦ウィッチの補給物資を乗せたトラックも運んでいる。５台ほどのトラックをその都度往復しながら運んで、その後一緒に街の外を包囲。合図で全員が街に突入する手はずなのでそれを待って突撃。

この時、光武は普段は水や食料を入れている場所に陸戦ウィッチや光武の火器の弾薬を。背中の部分に命綱を結び、ウィッチたちが捕まるポイントを増やしていた。

もうお分かりであろう。陸戦ウィッチをタンクデサントのように載せて運んだのである。

陸戦ウィッチも歩兵であるし、時速３０ｋｍくらいで移動できる。

身体能力も高いが、それでも能力向上には限度がある。（というよりそこまで高く割り振っても無駄なのである。いちいちエンジンの回路いじって魔法力の割り振りを変えないといけないし。）

光武は動かすための呪術系の魔法力に割り振るリソースを考えても、なお陸戦ウィッチたちの使うストライカーよりも身体能力強化がかなり強い。ジャンプで３ｍとかざらに跳ぶ。

なので走破できる地形が陸戦ウィッチより多い。それを利用して普通の進軍ルート

では通れないところから奇襲をかけるのだ。
なお、走破しているとき、
「なかなかスリリングな体験だったわ…。」
「酔いそうです…。」
との感想をいただいた。
戦いは1週間ほど続いた。今回は市街地戦でもあったのだが、キューポラから見る以外では横や後ろの確認は体ごと動かさねばならぬ光武はどうしても後ろから攻撃されたり横から攻撃されたりするのに弱い。（まあそれは大概の戦車や人間もそうなんだけど。）
そこで戦車随伴歩兵とかタンクデサントみたく陸戦ウィッチを連れて行ったことが輝くのである。
街に侵入した後、陸戦ウィッチとともに進軍。１０人ほど連れてきていたのだが、俺を前面にして陸戦ウィッチは後方や側方の警戒。敵を発見したらすぐさま敵の方向に俺が出て味方の壁としてシールドを張る。
また、俺と味方による一斉砲撃によって敵をすぐさま粉砕する、という戦術をとった。
敵の別方向からの同時攻撃や、奇襲で俺がシールドを張れないときは味方のシールドによって防ぎ、同様に反撃する。

また、俺が注意を引き付けてる隙に味方が回り込んで側撃したりもした。
魔法力の無駄遣いはしたくないので障害物を利用してシールドの節約をすることもある。
機動に関しても、陸戦ストライカーが時速３０ｋｍほどに対し光武は時速６０ｋｍほど出せるので、味方の無線による要請によってすぐさま移動するときは光武につかまって移動した。
また、建造物の耐久性が十分と判断したら建造物の上に上って移動したり奇襲を仕掛けたりもした。
弾薬が無くなれば撤退して補給を受ける。それを繰り返した。
戦果としては俺は１週間で怪異を小型中型合わせて１０体ほど。分隊としては３０体倒した。
被害は陸戦ストライカーが１機故障したくらいで全員生き残った。
驚くべき損耗率であった。大戦果である。
しかし、他の部隊ははかなり消耗したみたいで、再編することになりしばし攻勢に出ることはない。

今回のことで俺達の分隊は表彰と受勲することとなり、俺は分隊と組んだまま行動することになった。

今まであっちこっちの隊に回されてきたがようやく落ち着ける。

部隊の再編が終わった後はすぐさま攻勢に出ることになる。俺たちの部隊は次はマドリードから西へ攻め入る師団に入ることになるそうだ。

今回の戦いで怪異は多数の兵力を送っていたらしく、かなり戦力を減らしたらしい。今回の戦いは趨勢を決定付けるものの一つとなった。また怪異は寒さにより活動もかなり鈍くなっている。連合軍は年内に戦役を終わらせる見込みのようだ。

早く戦役が終わればいいと思う。そのために俺もできうることをしなければ。

～～とある分隊長の日記～～

１０月〇〇日。

連合軍はテルエルに進軍することとなった。その際、私は陸戦ウィッチの分隊の分隊長として編成されることとなった。１１人編成で一人は何と男だった。名前は北郷一郎。階級は軍曹。扶桑からブリタニアに行く途中にヒスパニア戦役に巻き込まれて志願したのだという。

男のウィッチというだけでも珍獣なのに彼はゴーレムみたいなストライカーユニッ

トを使っていてさらに珍獣度を増していた。
　我々の分隊は単独で別の特異なルートから包囲に参加、街に突入する。その際の進軍に北郷軍曹の使っているストライカー（名前は光武だそうだ。）によって予定されていた地点まで移動した。これではまるでトラックストライカーだな。と思った。
　１０月○×日。
　突入の合図があって街に進軍する。この際も光武の背中に捕まって移動。予備の弾薬もこの中に入っているのだというのだから本当にトラックみたいだ。
　街中に入ると光武から降りて進軍。こいつは前方以外の視界が悪くて外の音も聞こえづらいので陸戦ウィッチの手助けが必要だそうだ。
　なんてことはない、ただのヴァッフェントレーガー（武器運搬車）の護衛をしつつの進軍というだけか。
　そう思っていた。
　しかし怪異三体が唐突に目の前に現れた時その考えを改めることになった。
　遮蔽物がない状況での遭遇だった。敵はすでに射撃体勢に入っている。
　まずい。そう思ったとき光武は私たちの前に立ってシールドを張った。
　怪異が一斉に砲撃する。そのどれもがシールドの前にはじき返されていた。
　そして光武が３体のうち１体に３．７ｃｍ砲をぶち当てると怪異は一撃で撃破され

ていた。
光武が砲撃した時点でハッとなった私は全員に一斉に射撃するように命じた。
同一目標に火力を集中することで数を減らす。残った一体が反撃としてもう一度撃ってきたがその強固な壁の前に阻まれ私たちを傷つけることなく散っていった。
私は、いや、私たちは認識を改めざるを得なかった。あれはヴァッフェントレーガーなどではない。
あれは戦車だ。歩兵の動きのできる戦車。鋼鉄の壁。その頼もしさに安心感を覚えた。
１０月○△日。
昨日の戦いぶりを見て分隊員の一人が私も光武に乗りたいなどと言い出した。
私はその隊員を叱ろうとしたが、北郷軍曹は、
「じゃあ、乗ってみるか?」
といった。畜生、私も乗ってみたいのに。
しかし、言い出したその分隊員は魔道エンジンを起動できたはいいもののそれだけでそれなりの魔法力を使ってしまっていた。大きい分起動にもかなりの魔法力がいるらしい。
その分隊員は少なくはないが多いというわけでもない普通の魔法力量だった。

結果、１時間ほどすると魔法力が切れてしまった。
北郷軍曹はその様子を見ていろいろとメモをしているようだった。
「これから先エンジンの改良すると要求される魔法力が増えるしそこが課題か…。」
「光武自体の稼働時間はよくても搭乗者の乗っていられる時間が短いな…交代制で乗らせるべきか…。」
「それなら小隊もしくは分隊に１つの割り当てで運用すれば何とかなるか…。」
実験もかねて乗らせたのか…。とりあえず北郷軍曹の頭をはたいておいた。
１０月×△日。
街での戦闘が始まって一週間がたった。光武は相変わらず頼もしかった。
私たちの前に立っては敵の攻撃を防ぐ壁役として、無線要請を受けて移動する脚として、そして固い敵を増幅された強大な魔法力と砲で粉砕する攻撃役として。
この一週間私たちは光武を主体として動いていた。全員がウィッチとはいえたった１１人で動くのはあまりに無謀なことだ。それだというのに私たちは一人もかけずに、むしろ怪異を３０体も仕留めるという大戦果を挙げていた。
一度突発的に遭遇して近接戦闘になったことがある。前方のほうで索敵していた私は怪異の足による攻撃を一度目は防いだが吹き飛ばされ二度目が来そうになった時、光武が怪異に体当たりを仕掛けた。

ネウロイは吹き飛ばされて壁にぶつかった。それでも健在だったが味方の砲撃を食らって撃破された。

吹き飛ばされて怪異のいる方向を見た時、怪異と私の間に割って立つ光武の背中を見た。とても大きな背中だった。

それだけじゃない。怪異と戦う際にいつも私たちの前に立って私たちを守るその背中はとても大きかった。

私は心の中でその立ち姿を‘ギガントワンド’とこっそりと呼んでいた。巨人の壁。その頼もしさはみんなが感じていることだった。

後、こっそり光武のことを?アイゼンギガント’と呼んでいるのも内緒だ。

テルエルの戦いは終わり私たちは勝利した。しかし被害は大きく、しばらく攻勢には出られないようだ。

私たちの部隊は表彰と受勲されることとなった。とても誇らしい。

が、それ以上に分隊は解散せずに運用されることが決まったことがうれしい。

またしばらくこの?アイゼンギガント’と戦える。その安心感は計り知れないものだった。

第６話

テルエルの戦いが終わった後、怪異の抵抗は散発的になっていた。
爆撃によって数を減らされ、進軍してきた部隊によって粉砕される。そうしてどんどん支配地域は解放され、怪異はその生存圏を追いやられていた。
そして１２月。真冬のスペインにて最後の戦いが行われようとしていた。
マドリード。ヒスパニアの首都。ヒスパニアの中央に位置するこの都市に最後の怪異たちがいる。ここ以外では既に怪異の存在は確認されていなかった。
万全を期して入念な爆撃の後、地上部隊の進行が始まった。制空権は既に取られ、空と地上、二つから攻め込まれた怪異たちは実にあっけなく殲滅され、マドリードは解放された。そして終戦が宣言された。
戦役は、終わった。

戦役が終わったことで分隊は解散することとなった。最後に全員で宴会をして別れた。

その翌日、扶桑へ帰る便の船を探して帰ることになった。壊れてはいるが航空ストライカーユニット2機（壊れて修理できないことを伝えたら途中でもう一機送られてきた。それも壊れたがその後すぐに分隊に所属することになったのでその後は空に飛ぶことが無くなった。）

それと光武を乗せなければならないのでそれなりの船でなくては。そう思って港に行くと、扶桑の軍人がいた。

その軍人は俺に近づいて話しかけてきた。

「北郷一郎さんですね。私は扶桑海軍のものです。あなたを迎えに来ました。」

それはなんとも間のいいことである。終戦からしばらくの間、表彰や勲章の授与、それといろいろな手続きなど、諸々のことがあってすでにヒスパニア戦役が終わったことは扶桑にも届いていたのだろう。

詳しく話を聞くと迎えをよこしてくれたのは父と妹らしい。二人とも海軍の中でそれなりの地位にいるからな。

俺は迎えに来た軍人の申し出にありがたく乗って、乗機とともに手配された船で扶桑に帰った。

１２月の２６日。もう世間はとっくに年の瀬である扶桑。２週間ほどの船旅を経てようやく故郷に帰ってきた。

港には大勢の人がいる。…なんだか気のせいかカメラを構えた人が多いような…。
「あっ！きたぞ！」「写真撮っとけ！」
一斉にフラッシュがたかれてかなりまぶしい。一体何なのか。
「ヒスパニア戦役の英雄を記事にしたいのでしょうみんな。扶桑にも活躍の報せは届いてますよ。ほら。」
隣にいた海軍の軍人の人が海外の新聞を取り出して見せてくれた。
その見出しには、『扶桑の鋼鉄の巨人現る。』と出ている。
記事にはそのシールドは敵の攻撃を通さず、その火力は敵を粉砕し、その動きは神出鬼没。などとやや誇張気味に書かれ、テルエルの戦いのことやその他の戦いのことも詳しく載っている。中の搭乗員である俺のことも書かれていた。
テルエルの戦いのことやその他の戦いのことも詳しく載っている。中の搭乗員である俺のことも書かれていた。
なお、その経歴の中に空戦のことは書かれていなかった。なんでや。
とはいえ、これで合点がいった。しかし、カメラマンは多くても大歓待というわけでもなし。
遠い異国での出来事だ。そこまで国民の関心はないのだろう。
ひとまず、船を降りてまずは家族に無事を連絡しなくては。その後に諸々の荷物の手

配を。

その前に…この取材を乗り切らねばならないが。

船を降りると人が殺到してきた。全員にこたえていたのではきりがないので代表者が一人だけインタビューすることになった。それが終わるとみんなさっさと引いて行ってしまった。

人が引いて行った後に見覚えのある姿が近づいてきた。

「兄上！」

「章香！迎えに来てくれたのか。」

「はい。お久しぶりです。兄上。ご無事でよかった。」

「ああ、なんとかな。そちらは変わりなかったか？」

「はい。ただ驚きましたよ。技術交流に行く最中に怪異発生に巻き込まれた挙句、その戦役に義勇兵として参加するなどと申されたのですから。父上も母上も気が気じゃありませんでした。」

「それは…心配かけてすまなかった。」

「ええ。父上は帰ってきたら説教してやると息巻いていました。そして軍人の心得をとくとその身に刻んでやると。母上も手伝いますと。」

「それは怖い。覚悟しておかなければ。」
「そうですね。まあ、積もる話は帰ってからです。それと兄上、おかえりなさい。」
「…ただいま。」

帰ってきた俺はまずは実家で実戦形式でこってりと絞られた。その後無事を祝ってどこかに食べに行った。
なお、実家は海軍なのに主に活躍したのは地上での戦いだったので何事かとも言われた。
実戦を経験して帰ってきたことで妹の教え子たちに話をせがまれたことも。
しかし、空を飛ぶ才能は妹やその教え子たちに到底及ばないので参考になったかどうか。
陸軍の軍人にも接触された。平たく言えば勧誘だった。俺は海軍の軍人の家系なのに勇気あるなと思った。
後は、光武に関することで質問された。機体を没収とかじゃなければ、個人製作で別に機密にしてることでもないし、全部答えた。
調べたいので持って行ってもいいかとも質問されたが返していただけるのであればと答えて渡した。

後、この時に陸軍のとある研究を見せてもらうことも条件にした。
どうせ術式とエンジンの大きさとか部品の精巧性以外に特異なところはないのだ。
動かすのに必要な術式だけでも真似してしまえばあとはエンジンを大きくして出力の上がったものに合わせた魔法力増幅器をつければできちゃうのだ。つまり技術的にそこまで目新しいものがないのですぐに返ってくるだろうと高をくくっていた。エンジンを分解されて直らないまま返ってきてもまた作り直せる。
恩を売れるに越したことはない。

とはいえ真似された挙句、権利とかいろいろ主張されてしまうのも面倒なので特許自体はとってあった。
（といっても操る術式以外だが。人から教わったものに権利を主張するわけがない。）
それに光武は割と無駄が多いのだ。同じものを作るくらいなら同じエンジンを作ってそれで陸戦ストライカーを作ったほうがまだいいと判断されるだろう。ちょうど宮藤理論という新しい理論によって原動機を脚の部分に収納できるようになったのだ、でかいエンジンでも背負う必要なく足に収められるなら作れはするだろう。
まあその場合もサイズゆえの問題が発生するだろうが。
それに同じエンジンで履くタイプのストライカーを作っても手は使えないだろう。

使う必要もない。
　より強固なシールドとより強い武装を持って敵を粉砕するだけでいいのだ。戦うだけなら。
　だが光武は趣味の産物であるからこれでいいのだ。

　長嶋飛行脚にも顔を出した。知り合いに口々に声をかけられた。
「よく帰ってきたな。」「戦闘データ持って帰ってきたんだろ！早くくれ！」「欧州の空はどうだった？」
「一郎！おかえり！」「ストライカーをあんだけ壊しちまいやがって、もっと訓練が必要だな。覚悟してろよ？」
「さっそく大人気じゃないか。」
「中島さん！ご無沙汰してます。ただいま戻ってまいりました。」
「ああ、いい、いい。かたっ苦しい挨拶はいらないよ。それより無事に戻ってきてくれて何よりだ。
　よしっ！みんな！一郎の無事の帰還を祝うぞ！」
「「「よっしゃー！宴会だー！」」」
　やれやれ、のっけから騒がしいことだ。それでもこの感じ。帰ってきたって感じがす

る。

「ところで、海外のストライカーユニットも使ったんでしょう?·どんな感じでした?·」

「「それは私たちも是非聞きたいなあ〜?·」」

「…オテヤワラカニネ。」

しばらくして、長嶋飛行脚に光武の発注が海外から来た。どうやらあの活躍や兵士からの評判によって研究する価値ありとのことで調査用に一つ買ってみようとなったらしい。意外なことに扶桑陸軍からも発注が来た。

喧伝用に一つ買っておこうということらしい。

これに困ったのが俺と長嶋飛行脚である。なにせ個人製作の代物で、全部一からのハンドメイドなのである。

エンジンやフレームなどの設計図はあるので作ろうと思えばすぐにでも作れるが、値段をどうつければいいかわからない。工場生産した場合の想定でもつければいいのだろうか。

それに長嶋飛行脚はその名の通り航空ストライカーの会社だ。陸戦ストライカー（らしきもの）の発注なぞされたらいい迷惑である。

とりあえず、工場生産した場合を想定した値段で一つを扶桑陸軍に収めた。

フレームが自動車のフレームを作るのとほぼ変わらない値段で、エンジンが普通の魔道エンジンよりかなりお高く、手首から先のパーツがそれなりのお値段でその他諸々の細部の加工を経て、人件費も入れて

お値段の想定、陸戦ストライカーが３つ分であった。

前世におけるティーガーⅠ戦車が３０万ライヒスマルクでティーガーⅡ戦車が、３５万ライヒスマルク、パンターが１２万ライヒスマルクであったことを考えれば、妥当な値段ではないだろうか。

基本的にエンジンを乗せた張りぼての鋼鉄人形なのである。巨体のわりに胴体部分はそれなりに安かった。

というより大半がエンジンの値段であった。

ただし忘れてはいけないこととして光武は輸出時には何一つ武装されていないのである。

そもそも固定武装というものがないので、武装は基本的にあちらで用意してもらう必要がある。

それを込みで考えるとさらに値段が上がる。

国同士の交渉により海外への輸出は許可されていたので、仕様説明書、エンジンの設計図、光武の設計図、フレームの術式解説書、輸送費諸々の値段を込みで伝えたらさす

がにしり込みしていたが結局買っていった。
リバースエンジニアリングなどのことでほかの国に後れを取ることを考えたら、高くても買ったほうがいいと判断したのだろう。
頑張ってエンジンだけでも解析してそれを基に独自の大型魔道エンジンでも作ってお国柄の出た光武のようなものでも開発してほしい。

このような形で長嶋飛行脚と俺に臨時の収入があったわけだが、今現在俺がしようとしてることに対してはかなり好都合なことであった。
今現在俺がしようとしてることに対してはかなり好都合なことであった。
俺には奇妙な予感があった。前世とは差異があるものの歴史上の大事件によく似たことは起こっているのだ。
前世ではこの後日中戦争を経て太平洋戦争、つまり第二次世界大戦が起きる。
それに近い規模の戦いが起きる。そんな予感があった。
むろん、そんなことは誰にも言えないので、ひそかに準備するだけだった。
その準備…技術開発に使うのである。（何の技術かって？　むろん光武に使う技術ですが？）

ちなみに、この後陸軍の意向もあり、社長の判断もありで長嶋飛行脚に光武の開発のための研究室が置かれることになった。

大型魔導エンジンの開発・改良などが主な業務である。なぜうちでやるのだろうか。コレガワカラナイ。

地上用の魔導エンジンの開発なら陸戦ストライカーの会社にやらせればよいのでは。

とはいっても基本が大型魔導エンジンの開発であって名目上は光武の研究開発なのでかなり都合がいい。

俺のやろうとしていたことと目的が合致している。出された研究費用で早速あるものを作り始めるのであった。

あ、文句は言ったけどエンジンもかなり重要なので同時とはいえ研究してます。こんなに都合のいいことがあると思わなかった。

それと光武という単体の名称のものの研究じゃ格好がつかないから新しい分類の名称を考えることになった。歩行脚ともまた分類が違うだろうとのこと。

５分ほど考えたふりをして適当に光武の元ネタの霊子甲冑からとって、魔導甲冑（マギウスアーマー）と名付けた。

今度から魔導甲冑研究所という名称の研究所となる。

第7話

１９３７年の初夏。あのヒスパニアでの戦いが始まって1年で、戦いが終わって半年近くがたった。

新たに設立された魔導甲冑研究所で、俺は光武の新しい魔導エンジンや武装に関して研究を行っている。

半年では微々たるものだが、魔導エンジンの改良は少しづつ進み、新たな大型魔導エンジンの開発もめどが立ちそうだ。

とはいえ俺にとってはそちらはあくまでもおまけである。本命の研究は別にある。

海外へ輸出された光武なのだが、どうやらそれらを解析したデータをもとに新たな魔導甲冑を作る動きがあるらしい。

通常の魔導エンジンの技術と、戦車に搭載するエンジンの技術を流用、その二つを合わせた魔導エンジンを作ろうというのが主な流れだ。

また、火砲に関しても既存の火砲を流用して装備する事になるとも聞いた。

俺のヒスパニア戦役での戦術を大いに取り入れた装備である。

早速試作が作られたそうだ。とりあえず前例に倣えということでこれまた俺のヒスパニア戦役での部隊編成によく似た編成、すなわち陸戦ウィッチ１０人ほどにつき一機の編成での試験運用が始まるらしい。

その隊員の中には俺がいた分隊の隊員もいるらしい。

ヒスパニア戦役での戦訓と言えば、光武を陸軍に納入、ないし海外に輸出する際、既にヒスパニア戦役での出来事をとりいれた改造をしてあった。

平たく言えば光武のエンジンとストライカーユニットのエンジンとの連結を可能としていたのである。

この改造は光武の起動魔法力の大きさの問題を解決するためのものであった。

要するにまずストライカーユニットで増幅した魔法力で光武のエンジンを起動させてしまおうというものである。

一度起動さえしてしまえばそこまで大量の魔法力を送る必要もなく、陸戦ストライカーのエンジンはストップして光武のエンジンだけで動かすこともできるし、二つとも使って魔法力の出力をさらにアップさせることもできる。

逆に陸戦ストライカーだけを起動したまま待機状態にして燃料の節約もできる。

光武のパイロットを途中で交代する際は今度は光武のエンジンからのフィードバックで陸戦ストライカーを起動してコクピットから降りれる。

これは航空ストライカーにも使え、発着装置の代わりとしても使える。出来る限り重量を落としておきたい航空ストライカーと違って積載量にそこまで厳しい制限のない魔導甲冑はバッテリーを積んでいる。これによって航空ストライカーのエンジンの起動に必要なクランクを回せるのだ。

余談だが、光武のエンジンとつないだ際に、陸戦ストライカーのエンジンからの排気は光武のエンジンの排気口から出ていくようになり、コクピット内部の換気システムも導入されたので、一酸化炭素中毒や窒息は起きにくいようになっている。

１９３７年七月七日。ようやく目的のものの開発の目処がたった。もう一息で完成させられるかもしれない。

しかし、その完成を待つことなく戦乱の時は訪れた。

舞鶴にて敵襲があった。飛行型の怪異だ。数は３。章香とその教え子が出撃。

そしてその途中、別働隊が三体現れた。章香の活躍によりどちらも撃退されたもののその報告を受けて空母鳳翔・赤城を中心とする９６式艦上戦闘脚装備のウィッチ部隊が出撃。扶桑を俄かに戦争の空気が包み始めた。

動員令により俺もウィッチとして召集を受けた。光武の研究や開発のこともあるが、実戦経験のある俺を研究に回すよりは実戦で戦ってもらう方がいいと判断したのだろ

う。
ヒスパニア戦役での部隊の損耗率の低さをあてにしているのかもしれない。
とりあえず俺はウラル方面へと戦いに行くことになった。
余談だが、召集を受ける際、陸軍に入るか海軍としていくかで大いに揉めたが最終的に陸軍所属となった。
実家の父の目がちょっと怖かった。
研究をいくつか他の所員に任せて、工場に一つだけある光武の生産ラインのことも任せて出発する。

扶桑海を渡り、大陸を長い時間かけて移動してようやく前線より少し後方にある基地に到着した。
そこで、格納庫にもう一つ光武があるのを見つけた。あれは以前陸軍に売却した光武か？
その時、コクピットから少女が出てきた。
どうやら光武の試運転をしていたらしい。整備員が光武に寄ってきてエンジンの点検などを始めていた。
（ちなみに一時的な点検時は光武を座らせて固定する。エンジンの高さも下がるし立っ

ているより姿勢が安定するので点検しやすくなる。
移動時やパーツ交換などの本格的な点検の際には寝転ばせる。）
それを尻目に俺は基地の司令の元へと向かった。
基地の司令に着任の挨拶をすると俺の配属が伝えられた。
俺は装甲歩兵第３中隊の第二小隊に所属するらしい。ちなみに隊長は別の人だ。まあ当然だ。士官学校も行ってないし、俺にいきなり人を率いろといわれても困る。ついでに、俺だけ唐突に別の任務（本国から送られてくる光武用の武装の試験など）が課せられ、小隊と行動を別にする可能性があるので抜けられると困る隊長などのポジションは別の人がやるべきだということだ。
配属が伝えられた後、一人の少女が入ってきた。先ほどの少女だった。
「紹介しよう。君と同じ、光武のメインパイロットを務める横山一美君だ。」
「扶桑陸軍装甲歩兵第３中隊第一小隊の横山一美です。階級は大尉です。ヒスパニア戦役の英雄にして光武の開発者とこうしてお会いできて光栄です。」
「自分は北郷一郎軍曹です。英雄なんて大それたものではありませんが、よろしくお願いします。」
互いの自己紹介が終わると司令は、
「お互いのあいさつが済んだようだな。では各自、小隊へ合流したまえ。その後、一週間

後の１３００時に小隊同士での模擬戦を行う。場所は基地の演習場だ。」
「了解しました。」「了解しました。」
「では、いきたまえ。」
「では、失礼いたします。」「失礼いたします。」
司令室を出て、指定された場所で小隊と合流する。
小隊長の名前は西沢恵子。階級は少尉。そのほか８名の小隊員がいた。
小隊長以下、数名の隊員とあいさつを済ませると、さっそく連携の訓練をすることになった。
小隊と一緒に連携する場合この小隊における俺と光武の主な役割としては基本的に足役と壁役である。
小隊長の指示に応じて素早く動けるようにしなければならない。
小隊長は基本的にタンクデサント兼光武の車長のような役割をすることになる。
シールドが普通の陸戦ストライカーよりも強いとはいえそのシルエットの大きさから狙われやすい光武の上に乗って戦うことはかなり危険である。その車長の役割を自ら務めるとは大胆な人だ。
（狙われやすいやつの背中に隠れるのも危険じゃないのかって？この場合上にいる分目立つため狙われやすいという意味である。）

小隊長曰く、光武の上から見ることで位置の把握と指示がしやすくなるとか。

連携を取りつつ光武の特性に対しても話しておいた。

まず一つ。平地は苦手だということ。戦車のような壁の役割をするわりに平地は苦手とは、と思われるかもしれないが人型であることの弊害である。前も言った通り前方投影面積が大きく被発見率が高いのである。

匍匐状態であるならば前方投影面積も小さくなるしシールドの範囲を絞って強固に張れるが、機動性が大幅に下がる。

魔法力も有限なのだ。できるだけ使わないようにするに越したことはない。できるだけ平地は避けるべきなのだ。

また、沼地なども接地圧の関係上不得意である。

逆に得意な地形は障害物が多く、起伏の多い地形。森の中や山岳路などである。手足があり、身体能力も高い光武ならば踏破、もしくは待ち伏せできる地形が多く、また、砲を打つ場合において仰角、俯角ともに制限が少ないのである。（大口径砲等はまた話が別だが。）

要は奇襲がしやすいのである。

例として、戦車では稜線の裏側にいる敵を撃つ場合、俯角が足りないので乗り出さなければならず、その身をさらさなければならないし、乗り越えて撃つまでに逆に撃たれ

る可能性が高いが、（それ故避けるべきと書いてある戦車の教本がある。）
光武はキューポラと砲だけ出して狙いをつけて撃つだけで済む。
最も適しているのが市街地戦である。３次元的な機動によって射線が多く取れる。
建物に登るのならば陸戦ストライカーをつけた陸戦ウィッチだってそれ以外の歩兵でもできるのだが、上るスピードが違う。それに火力も。高所を素早く取れることは様々なことに有利なのだ。
第二に射程距離が違う。普通の陸戦ストライカーをつけた陸戦ウィッチの使う砲は当然ながら取り回しのために短い。それ故に砲口径が小さく、初速が小さいので砲を撃っても射程が伸びにくい。魔法力で初速を速くすれば今度はそれに使った分どこかが犠牲になる。それが破壊力の分なら本末転倒だろう。
陸戦ウィッチは小銃も使うがそれの射程も小銃そのままなので知れたものである。
また小口径故に風の影響を受けやすく照準補正のような固有魔法でも持たない限り長射程を攻撃するのは難しい。
光武は野戦砲などをほとんどそのまま使用しているので射程距離もそれに準ずる。また、砲弾自体もおおきいので風の影響を受けにくく、固有魔法による照準補正などがなくとも長射程にあてやすい。（まあ当てるのは才能と努力が必要だが。）
有効射程も大きいのでやろうと思えば砲撃支援などもできる。（とはいっても一門に

よる砲撃支援などたかが知れてるが）

まあその有効射程を生かそうと思うのなら味方との連携が必要になる。それゆえに今こうして訓練が必要ということだ。

そのほかもいろいろあるがとりあえず戦いにおいて重要となるのはこの二点だろう。

光武の特性を聞いた西沢隊長はそれを基に訓練内容を考えた。ひとしきり小隊長の指示通りに訓練を行っていく。

普段の訓練とともに一週間でできるだけの連携を訓練していく。

俺は光武に加えて陸戦ストライカーの習熟も行わなくてはならない。光武が使えない場合はこれが俺の生命線になるかもしれないのだ。

また、光武は小隊員全員が一度は搭乗した。ストライカー連結システムにより光武を使える陸戦ウィッチの数は増えたのだ。それに光武は感覚的に動かせるが陸戦ストライカーとはまた違った役割が求められる。訓練しない手はない。それに起動魔法力の大きさは解決したが使い続けている間要求される魔法力は相変わらず多い。

変われる人物と交代しながら使い続けることもあるだろう。その人物は多いに越したことはない。

一週間後の１３時。いよいよ模擬戦である。弾はペイント弾。今回持たされた砲はラ式三七粍対戦車砲。あれ？なんだかとてもなじみのあるものな気がするぞ？それと

は別に機関銃として恵式二〇粍機銃一型を渡された。
ぶっちゃけ３．７（ド）ｃｍ（ア）ＰａＫ（ノッ）３６とエリコンＦＦであった。
エリコンのほうはともかくとして３．７（カー）ｃｍ　ＰａＫ　３６のほうはヒスパニア戦役でとてもお世話になった砲である。
それと今回の光武には近接戦闘用に二振りの扶桑刀を持たせた。光武の大きさに合わせている特注品だ。
相手の光武は砲として九十式野砲、７５ｍｍのとても優秀な砲である。火力に何だか差がありませんかね？
機関銃は同じものを。相手も扶桑刀を装備していた。
お互いに所定の位置について開始の合図とともに模擬戦が始まった。
全員の撃破判定もしくは降伏で負けということになっている。
「まずは陸戦ストライカーによって索敵。相手より先に相手を見つけるわよ。開けた場所には出ないように。
相手のほうが砲は優秀。開けた場所での打ち合いになったらまず負けるわ。
なので森の中を移動する。これは相手もわかってるでしょう。だから…」
森の中を匍匐しながら移動していると通信が入った。

「こちら甲。敵を発見した。光武から１１時の方向、距離は５００。約３名以外光武の護衛をしながら森の中を移動中。」
「やっぱりね。守りを固めてるわ。光武の巨体は森の中でも目立つから、陸戦ストライカーがあちらの光武の周囲を索敵することによってこちらの陸戦ストライカーの奇襲を警戒。攻撃を防いだところで光武の火力によって撃破する心算ね。
　こちらの光武による奇襲はできないと考えているでしょう。あれだけ周囲に目を光らせてるんだもの。」
「どうします？」
「そうね…。作戦は…。」

　森の中を移動していた第一小隊。突然草むらから突然敵が現れ発砲してきた。
　もちろん模擬戦の相手の第二小隊である。あらかじめ周囲の警戒をしていた小隊員はすぐさまシールドで防ぎ、反撃する。攻撃が失敗したとみるや即座に後退し始めた敵に、九〇式野砲によるペイント弾が襲い掛かり２名が撃破判定を受けた。
　すぐさま追撃に移る。あからさまな陽動であることに気が付いていたが、周囲に光武の隠れられる場所はなく、
　相手の陸戦ストライカーは全員後退しているのを確認しているため、陸戦ストライ

カーによる奇襲はないものと判断。地図によれば相手の逃げている方向には沼地があったはずだ。光武をそこでまくつもりなのだろう。

そう判断してちょっとした地面の違和感を見逃してしまった。

後ろから音がしたと思うと光武が現れて発砲してきた。周囲に光武が隠れられると思われる場所などなかっただけに、警戒はしていたものの反応が遅れた。反応できたのは横山大尉のみであった。

第二小隊の光武の機銃掃射によって２名が撃破判定を受けた。横山大尉は機銃掃射はシールドで防いだものの範囲漏れしたものが陸戦ストライカーのウィッチに当たったのだ。そこからの勝負は早かった。まず第一小隊の光武が小隊員を守るように第二小隊の光武の前に出た。そこに第二小隊が全員反転してきたのである。

第一小隊は挟み撃ちにされた。容赦なく放たれる弾丸にシールドを張らなくてはならない第一小隊の陸戦ストライカー。つまり陸戦ストライカーはくぎ付けにされたのである。

ここで陸戦ストライカー同士、光武同士の戦闘になった。

味方から飛んでくる弾は敵が防いでくれているので流れ弾だけ注意しながら一気に距離を詰めて接近戦に持ち込んだ。

機銃と砲を捨てて身軽になると二振りの扶桑刀を抜いて切りかかる一郎機。横山機

も素早く反応して扶桑刀を抜いて防ぐ。
体勢を立て直される前に仕留めるために猛攻を仕掛ける一郎機。その勢いに押されて勝負はついた。
苦し紛れの横なぎをシールドで防がれ、一郎の一刀は同じようにシールドで防いだものもう一刀を防げなかったのである。
光武が撃破判定を受けたことで全員が降伏。第一小隊の負けとなった。

「くぅ〜！まさかあんなに早く穴掘って潜ってるとは！噂に聞いていたけどほんとにこんな使い方もできるのか！」
「陸戦ストライカーの延長線にある兵器としてみていたことによる弊害ね。常識を覆されたわ。」
それはまあ普通、兵器をそんなことに使うなんて思わないだろう。だができるのだから仕方がない。そしてできるのなら積極的に活用すべきだろう。

「双方ともに素晴らしい戦いだった。この調子で前線でも頑張ってもらいたい。」
司令のお褒めの言葉の後に、これから両方の小隊は前線に行くことを伝えられた。
怪異の進行も本格的に始まり、戦いも激しくなってきたので期待しているだそうだ。

模擬戦の後、第一小隊との交流をした。

「本日はとても参考になりました。ありがとうございました。でも、次は負けませんよ？」

と横山大尉。

そして翌日、俺たちは基地から離れて前線へと向かったのだった。

第8話

俺たちが前線に送られてからしばらくの時が経った。
もう何度も戦闘を経験した。
ここ最近は敵の活動が活発になり、怪異との衝突も多くなってきた。
俺たちは最前線にいるため自然と戦闘回数も多くなった。
航空ウィッチの制空援護任務で助けられたことも何度も。妹とその教え子もウラル方面に来てると聞いたのでもしかしたらあれは妹達だったかもしれない。
俺たちの所属している中隊の光武による功績を認められて、光武は増産された。とはいっても三体だけだが。成果を認められれば段階的に数を増やす予定らしい。今回の増産分も小隊を組んで俺たちの中隊に
入る。光武の中隊での運用を試験するらしい。
塹壕に身を隠しながら爆撃が去るのを待つ。
発見が遅れたために航空支援要請が遅れてしまい、爆撃が止むまでこうやって身を隠すしかない。
「ああもう!うざったいわねえあの爆撃機ども!」

「愚痴ってもしょうがないわよ。それより航空支援はまだかしら？」
「生き残りたかったら無駄口叩いてないで敵を射ち殺しなさい。
次！二時の方角距離５００！続いて十一時の方角距離１００！」
「了解！」
「了解！」
爆撃が一瞬止んだ隙をついて塹壕から顔を出して指定された方向へと砲撃する。あらかじめ狙いはつけているのであとは微調整して放つ。
小隊の他の人員はもう一つの指定された敵を倒す。
砲の射程距離の違いを鑑みて遠距離の優先目標は光武が。
陸戦ウィッチは近距離の優先目標を撃破するようにしている。
敵を倒すと、身を乗り出したために敵に狙われる。慌てて塹壕の中に身を引っ込めるとまた爆弾が投下されてきた。
塹壕の近くで爆発したが被害はない。
敵の爆撃機を見送ると別の編隊を組んだ何かが飛んできている。あれは…。
「ようやく航空ウィッチのお出ましね。」
支援要請を受けた航空ウィッチたちだった。
彼女らはすぐさま航空型怪異と戦闘を開始する。

それにより、爆撃が止んだ。

「今よ！総員、突撃！」

小隊長の合図でまず俺が塹壕から飛び出す。続いて他の小隊員も。

同じ中隊の小隊も同様に行動している。そしてまっすぐ敵に突っ込んでいった。

光武による陣形を組み、前へ前へとシールドを張って射撃しながら移動する。小隊員はタンクデサントの他、俺の後に続いて移動している。

当然相手も攻撃してくるが光武のシールドに阻まれて傷つけることができない。

そして敵の攻撃は光武に集中するため後ろの部隊は比較的安全となる。俺たちの突撃を支援するためにある一定の距離まで俺たちが接近するまで砲兵達の砲撃支援があった。それにより一時的に攻撃が弱まる。

その隙に彼我の距離はどんどん縮まり、中隊は怪異に肉薄する。そこで陸戦ストライカーの攻撃が牙を剥いた。

これまで後ろにいた陸戦ウィッチ達が一斉に光武の前に出たのである。また、怪異が光武の突撃に気を取られていた隙に側面から近づいていた陸戦ウィッチの部隊もいた。小回りの効く陸戦ストライカーの動きに翻弄される怪異。

しかし陸戦ストライカーに気をとられると光武に撃破される。

ろくな抵抗もできないまま、この攻勢によって怪異は速やかに撃破された。俺たちの

戦術的な勝利である。
ふと、上を見ると上空でも勝負はついていた。航空ウィッチ達により航空ネウロイは撃退されていた。
速やかに帰投していく航空ウィッチ達。あの中に妹はいるのだろうか。とりあえず帰投していく姿を見送りながら手を振ってみた。
後から聞いた話だが、この戦いの後、帰投している最中に新型ネウロイと接触。妹は重傷ではないものの敵の攻撃で怪我を負ったそうだ。

１９３７年１１月２０日。
衰えを知らない怪異の攻勢と新型怪異の脅威を重くみた皇国上層部はここに〝大本営〟の設置を発令。第一次大戦以来となるこの発令によって扶桑は後に〝扶桑海事変〟と呼ばれる戦役に正式に突入した。
そしてかねてより新型怪異撃滅の可能性を探る撃一号作戦が発令されたらしいが基本的に空でのことなのでまず俺には関係ない。
詳しい内容は後で知った。
作戦は成功。新型怪異は撃破されたとのこと。このことを受けて国内外を問わず広く、諸外国からテスト用に購入または提供された種々の新兵器が前線に集まり始めるこ

ととなる。

１９３８年の一月。冬季の厳しい寒波襲来によってネウロイの活動が若干の鈍りを見せたことに併せて、新型武装の試験が進められる。その中には光武の新しい武装もあるようだ。

これまでの成果から俺にも何か新しい武装が与えられることとなり、何がいいかと問われた。俺は迷わず、

「カールスラントの８．８ｃｍ高射砲がいいです！」

と言ったらその場にいた全員から呆れられた。

ちなみにちゃんとアハトアハトはもらった。

新型の航空型の怪異は数は少ないながらも依然として猛威を振るっているらしい。確たる対抗策もないままだという。戦況もより厳しくなってきた。

１９３８年の初春。部隊の再編があった。ウィッチの消耗を重く見た軍上層部による、新戦力の補充と戦力の平均化を図るためのものだ。

俺たちの中隊も例外ではなかった。まず中隊の５つの小隊を３つに分けてそれぞれ別の中隊に編成。

この中隊とほかの兵科の中隊とで装甲歩兵大隊を編成する。

中隊において小隊の抜けた穴や新しい中隊に空いている枠を新しい光武を使う小隊が埋めるというもの。それに合わせて光武の追加注文が増えた。生産ラインも増えたらしい。

合計１５小隊で光武を運用していく。期待されてる主な役割としては〝火消し〟であった。中隊規模で動いて苦戦している、より攻撃の激しい場所へ遊撃に入る。かなり危険な任務である。

また、陸戦ストライカーを使う小隊員もかなり入れ替わりが激しくなるようだ。理由としては新人の教育である。

光武のいる部隊は光武に守られることが多いため比較的損耗率が低かった。

新人を入れることで消耗を抑え、練度の向上に伴う戦力の増強を期待されていた。

なんで火消し任務させるのに新人入れるんですかね？とも思ったが、より激しい戦場に入れることでより早く戦場に慣れての練度の向上を期待してのことと、冬季の寒波が和らいで再び怪異の活動が活発化すれば戦況がより厳しくなり、

地上においては光武による防衛が重要になる。比較的安全な場所での戦いに回す余裕はないとのこと。

再編では、第一小隊と第三小隊が第一中隊に、第四小隊と第五小隊は第二中隊に。残った俺たち第２小隊は第３中隊に回された。

訓練において、新しい小隊における光武とその連携の訓練はベテランの小隊による教導になるらしい。

つまり俺たちはこれから来る４つの小隊の訓練を教導することになる。魔導甲冑はかなり新しい兵器のジャンルではあるものの、これまでの戦いでそれなりに戦術が確立されている。

それなのに後方での訓練でないあたりよほど余裕がないらしい。教えられる人物が全員前線に出ていて戻す余裕がない。また、光武は完成次第前線に回すので教導に使えるものがない。

俺たちはこれから来る新人教育に不安を抱きながらひとまず再編で解散する前に共同で話し合って全員の戦訓を基に光武の操縦の教本と小隊での連携の教本を作っておくこととした。負担は少なく、また、わかりやすいほうがいいからね！

出来上がったものをまず初版としてこれから来る新人たちの教育に使う予定だ。

これは司令のほうにも提出していて、そちらは扶桑本国に送られた。

１９３８年４月。部隊の再編が終わり、新人たちの教育もある程度進んでいたころ、怪異の活動が再度活発化。手ごわい新型の航空怪異相手に戦力を平均化したばかりの航空ウィッチ各部隊は苦戦を強いられ、ベテラン、新兵を問わずにその戦力を削られ

ているらしい。

それにより制空権を取られ、地上部隊への爆撃も激化。

しかも今までは見られなかった高速の爆撃機型ネウロイも出現。これに対抗する有効打もないままウィッチたちの疲弊や深刻な補給の不備も重なって各地の前線基地はより一層厳しい状況に追い込まれていた。

俺達も地上部隊の火消しとして転戦を重ねていたが、爆撃による前線基地への攻撃によって後退せざるを得ないことが多くなった。また、爆撃による光武の戦闘不能（幸い搭乗者は無事だった。）、廃棄された機体や、整備を受けられずに故障によって廃棄される機体も出た。予備機はあったので数を減らさずにはいるが補給の不備があるのでいつ満足に戦えない状況になるかわからない。

爆撃の増加により損耗率としても以前より上がった。それでも他の部隊よりははるかにましという状況だ。

そんな中、俺に扶桑本国からようやく研究していたものが完成したとの連絡が入った。数もある程度あるらしい。

すぐさま送ってもらうように手配した。司令との交渉により、特別に輸送機を飛ばしてもらい、小隊を残して、予備機の光武とともに即座に輸送機の来る航空基地へと向

かった。
　航空基地に着いた時、見知った顔を見つけた。
「ふみ…北郷少佐、こちらの基地にいらしてたのですか。」
「兄上？なぜこちらへ？それと、いつもの話し方でいいです。兄上にかしこまった話し方されるとむず痒い。」
「かしこまりました。今日届く荷物の受け取りに来たんだ。光武に乗せる新武装だ。」
「ああ、あの輸送機に乗ってきた。それだけのためにわざわざこちらまで？」
「ああ。一秒でも早く受け取りたいものだったんだ。」
「兄上がそれほどまでに受け取りを急ぐようなものとは、気になります。教えていただけませんか？」
「さっそくここで搭載して試験していく予定だから、失敗したときに落胆させないためにも期待させないでおくよ。」
「つまり、教えていただけないと。」
「そういうことだ。」
「兄上は意地悪です！」
「まあ、焦らないでも試験の時に教えてあげるからその時の楽しみに取っておいてくれ。では。」

「ああ！兄上、待ってください！一緒に行きますよ！第一、どの格納庫にあるか知らないでしょう！」

基地の司令に挨拶してから章香と一緒に格納庫へと向かう。司令は陸軍の方なので、司令にも実験を見てもらうことにした。

受け取り表にサインして、受け取った荷物の中身を早速持ってきた光武に乗せる。光武のエンジンを起動させて、外に出た。そして、とある魔法を発動させた。

「う～む、ん～、ん、んー？うーん…。」

うなりながら発動させている魔法の反応を確かめる。ゆっくりと光武を回転させる。まだ反応はない。

「あの、曹長？そろそろ何をなさってるのか教えていただけませんか？」

「うむ、私も何をしているのか気になる。教えてくれんかね。」

「む！……む、む、む…。」

「あの、もしもし？兄上？」

反応があった！しかしまだはっきりとしたものではない。一層神経を集中させる。反応はだんだん強くなってきた！

「少佐殿！確かあなたの部下に遠くを見通せる魔眼を所持されてる方がいましたよね

！」
「え、ええ。坂本一飛曹のことですか？」
「ちょっと呼んでいただけませんか！確かめたいことが！」
「えっと、私がどうかしましたか？」
「方位３２０！高度６０００！距離４００００！見えますか!?」
「兄上？やたら具体的な…まさか！坂本一飛曹！」
「えっ、は、はい！遠いですけど頑張ってみます！……見えました！敵多数！新型の爆撃機型もいます！」
「北郷曹長！もしやそれは電探かね！噂には聞いた事があったが完成していたとは！」
「すぐに出撃準備だ！兄上、それのこと後でちゃんと詳しく教えてください！これで迎撃しやすくなる！」
「そのためにはまず無事に帰って来てくださいよ！」
「ご心配無く！私には優秀な教え子達がいます！では！」
「私にも後で詳しく聞かせてもらおう！だが今は迎撃せねば！」
「その前に一つよろしいですか司令！実は…。」
　章香達は出撃していった。俺がとあることを伝え終わると司令もあわただしく指揮所に戻っていった。

さて、こちらもデータ取りと…万が一に備えておこう。
光武を移動させて格納庫にあるものを取りに行った。

報告を受けて飛び立った航空ウィッチたち。高速で移動する１群に対して迎撃に向かった。
怪異たちと基地から１キロほど離れた場所で会敵。直掩の戦闘機と上空で戦う者たちと、
爆撃機型の迎撃に向かうものに分かれて戦闘を開始する。
戦闘を開始してしばらく。敵は味方の数より多く、手いっぱいだった。味方は傷ついたものも多かった。
爆撃機はまっすぐに基地へと向かっており、このままでは基地に被害が出てしまう。それだけは避けたかった。
爆撃機の後方上を一人のウィッチがとった。第一二航空隊の若本徹子。北郷章香の教え子の一人だ。
「さっさと…堕ちろぉ!!」
２０ｍｍ機関砲を怪異に浴びせかける。しかし、傷ついたそばから修復されていく。
「くそっあい変わらず２０ｍｍじゃだめか!美緒!コアは!?見えるか!?」

「待って…きゃっ!?ダメ!敵の攻撃が激しくて見れない!」
何事もなかったかのように飛び続ける怪異。基地へとまっすぐに向かっていく。
「くそっ!させるかぁ!」
「まずいな…!このままでは基地がやられる!」
その時、章香少佐のインカムに通信が入った。
「誰だ?…兄上!?しかし、今離れたら爆撃が……わかりました!兄上を信じます!
総員!今すぐ爆撃機型から離れろ!高射砲がとんでくるぞぉ!」
「先生!でも、今離れたら追いつけなくなります!それに高射砲なんてまず当たらないですよ!」
「少なくとも今は手がない!いいから離れるんだ!」
「……くそっ!わかりました!」
納得できないまま爆撃機型から離れる。基本的に対空砲は当たらない。あるにはあるがそれは大量の対空砲を打って初めてそのうちのいくつかが当たる程度だ。
偶然当たってくれるのを祈るしかなかった。
爆撃機に追従しながらも距離を取った。もうすでに爆撃圏内だ。すでにかなり高度を落としている。
基地が蹂躙されるのを見てるしかないのか。そう思った瞬間、地上からまっすぐに光

の弾が飛んできて、
　そのうちの一つが吸い込まれるように爆撃機型のネウロイにあたり、爆撃機型の怪異は爆炎に包まれた。
　当たった!?しかもかなり正確にとんできていた！。
「当たった…！まじかよ！…いや、あいつまだ生きてやがる！」
　不幸なことにこの時、信管は少し遅れて作動した。すなわち、怪異の体を貫いた後に爆発したのである。
　しかし、砲弾の当たった主翼は折れ、大きく傷ついた怪異は修復しながらもかなり速度を落としていた。
　貫いた後の爆発による破片が上の部分を襲っていたため、
　機銃座にあたる部分も大きく傷つき撃てないようになっていた。その隙を見逃しはしない。
「見えました！胴体の真ん中！」
「よしっ！いくぞ！」
　高射砲により爆撃機型は抵抗する力を失っていた。上空を飛ぶウィッチたちにろくに攻撃もできないままコアを破壊され、撃破されたのであった。
　爆撃機をやられた戦闘機型は撤退を始め、やがて見えなくなった。

「こちら第十二航空隊。爆撃機型を撃墜。怪異は撤退した。」
「了解。直ちに帰投せよ。」
帰ったらたっぷりと話を聞かせてもらわねば。あれはこの戦線における光明となるかもしれないのだ。
北郷章香少佐はそう思いながら基地へと帰還を始めた。

上空でウィッチたちが戦っているころ、俺は光武とともに持ってきたもの、８．８ｃｍ　ＦｌａＫ１８、すなわちアハトアハトを取り出していた。そして光武用に改造した指揮標定装置（始めはなんでそんなものを欲しがるんだと思われていた。）ととある特殊な機能のある時限信管付対空榴弾（こっちも同様。それで対空なんてできるわけないだろうと笑われもした。）を持って基地にいる砲兵のもとへと急いだ。
高射砲部隊は既に準備を終わらせていた。高射砲部隊へと近づいていく。
「装甲歩兵第一中隊、第一小隊の北郷曹長です！ただいま到着しました！」
「あんたが司令の言っていたやつか！よろしく頼む！で、あんたは何をするつもりだ！」
「俺はこいつで射撃に必要な数値を調べて皆さんに伝えます！」
「なんだって？そいつは信用できるのか？」
「少なくとも目視と音よりは！」

「そうかい！そいつはいい！しっかり頼むぞ！」
持ってきていた対空砲を設置して照準するための位置に着く。そして魔法を発動させた。
「おい！いきなり昼寝を初めてどうした！」
「光武一機で撃つにはこれが一番やりやすい体勢なんです！仕事はきっちりこなしますよ！それよりもこいつの算定具の入力と信管の設定お願いします！」
光武が対空砲を撃つ時には寝ころばせている。仰角の調整が一番しやすかったのだ。
レーダーで爆撃型の現在位置と高度、そして速度を測定。それらの具体的な数値を高射砲部隊に伝えていく。
それらを算定具に入力。未来位置の予測が数字としてはじき出されていく。
それに合わせた角度に調節。時限信管をセットした砲弾を装填して、あとは予定された時間に打つだけだ。
しかし、爆撃機型の周囲に航空ウィッチがいる。基地を守るために奮闘してくれている。
このままでは撃てない。時間がない。即座に無線を入れた。
「章香！爆撃機型から少し距離を取ってくれ！このままじゃ高射砲が撃てない！」
「しかし、今離れたら爆撃を止められなくなります！そうなれば…！」

「大丈夫だ！必ず当てる！俺を信じてくれ！」
「…わかりました。兄上を信じます！」
無線が切れた後、レーダーで航空ウィッチが離れたのを確認したことを伝えた。
「あーあ、いいのか？曹長のくせにそんな真似して。失敗すれば間違いなく首が飛ぶぜ？物理的に。」
「安心してくれ。失敗してここに爆弾が落ちてきてもあんたらだけは必ず生きて帰してやる。」
「それは頼もしいことだ。」
発射の時間が迫る5，4，3，2，1…！
「砲撃開始！」
高射砲が一斉に砲撃を開始する。俺もそれに合わせて一射。
そして一射すると同時に全神経を集中させ始めた！レーダーで敵と砲弾の距離を測り続ける！
そして砲弾は敵に命中し爆発！しかし、敵の反応は消えていない。
だが、離れていた航空ウィッチたちが爆撃型に近づくと敵の反応が消えた。倒してくれたみたいだ。
「第十二航空隊より無線！爆撃機型を撃墜。怪異は撤退したとのこと！」

「つまり俺たちは助かったってことか。」
「よかった…。」
　周りの人たちも安堵している。撃退できてよかった。

　基地に章香たちが戻ってきた。章香はいの一番に駆け寄ってきた。
「お疲れ様です！兄上！戻ってきたのですから約束通り詳しく聞かせてもらいますよ！電探のこと！それとあの砲弾のことも！」
「なんだ気が付いていたのか。」
「当たり前です！あんな奇妙な弾道していたらわかりますよ。」
「私にも詳しく聞かせてもらおうか。」
　司令が話に入ってきた。
「あの、私たちもいいですか？」
　章香の教え子たちも聞きたいようだ。
　とりあえず会議室へ移動して説明することとなった。
　電探（レーダー）とは、簡単に説明すると電磁波を照射して目標にあたって反射した電磁波を受信することで敵の位置を探るものである。人間の目がみている可視光線よ

りもはるかに波長が長い電波を使用することから、雲や霧を通して、はるかに遠くの目標を探知することができる。
「ほう、つまりそれがあれば哨戒において見張り員の負担が少なくなると。」
「まあそうなりますね。数さえそろえば線で警戒と探知ができるから発見次第近くの航空基地に無線で要請、
　という形が理想ですかね。数さえそろえば。」
「つまり…足りないと。」
「前線をカバーするのに必要な光武も装置も全然足りませんね。」
「あの、なぜ光武ではないとだめなのですか？」
「いい質問ですね。レーダーの魔法を使った際に光武の頭部に奇妙なものが出ていたでしょう？」
「ああ、そういえば。」
「あれは魔導針といいまして、東北皇国大学の教授・八木さんと講師・宇田さんが発見した「特定の呪術陣を描くことで魔法に高い指向性を持たせられる」というものを実用化研究した結果完成した正式な名前を「八木・宇田式呪術陣」といいます。
　今現在、各国においてこれを広域魔法探査に活用する研究が行われているそうです。扶桑はしてませんけど。

まあ、それはそこまで関係ないのですが。」

「関係ないのかよ!」

「いい突っ込みありがとう。話を戻しまして、それとは別に魔法力を流すことで術式とともに魔法力を加工し、マイクロ波によく似た性質のもの…仮にこれを魔力波と呼称します。これを出せる魔導マグネトロンというものがリベリオンで開発されていたのです。

そして扶桑でも改良されていたのです。これまた東北皇国大学の岡部という方が「分割陽極型魔導マグネトロン」

というのを開発しました。

八木・宇田式呪術陣とともに発表されたのですが、いかんせん要求される魔法力が大きかったのです。それに既により効率のいい広域魔法探査の魔法があったので、こっちはあまり見向きされませんでした。固有魔法に関して研究を進めたほうがいいと判断されたのです。

それでもカールスラントの技術者がさらに改良していたのを発見して、その技術者を招いて広域魔法探査と仕組みは違いますがほぼ同じ効果を得られるように開発されたのがこの装置です。八木・宇田呪術陣と併用することで指向性を持たせています。

しかし、この装置、実用性のある出力を出そうと思うとかなりの魔法力を要求されま

す。

航空ストライカーは夢のまた夢。陸戦ストライカーであっても出力が足りないのです。

これが光武にしか載せられない理由です。また、光武に載せたとしても要求される魔法力の大きさから航空ストライカーと同じく、シールド強度などが犠牲になります。なので運用を変える必要があります。」

「なるほど…。では今すぐ増産はできないのかね?」

「その増産のための試験です。テストが良好だったらすぐにでも生産される予定です。

まあ、すぐに不要になるでしょうが。電気で動くレーダーもすぐ作られるでしょうから。」

「それでも今必要なんです。早い増産を願います。

それと、もう一つの砲弾のほうは?」

「あれは念動を受けやすくする術式を刻んだ特殊な砲弾で、発射した後に弾道を変えられるというものです。

制御の念動の魔法を魔導マグネトロンで加速し、八木・宇田呪術陣によって指向性を与えることで弾道を制御しやすくして、レーダーの情報を基に動かすことで高速の敵が回避軌道をとっても合わせられるようにするためのものです。」

「なるほど、つまりこちらも高射砲を使えてレーダーも使える光武のためのものだと。」
「そうなりますね。」
「こちらも増産できないのですか？」
「ムリダナ。」
「ん？」
「ごほん！こちら、弾頭に刻む術式の分、弾薬としてはかなりお高めになってまして…これくらいするので…。」
「…なるほど。早々に数が揃えられないのか。残念だ。これがあれば爆撃型に対抗できるというのに。」
「命中率を改善したとしても当たらない確率は高いですからね。これにお金をかけられないことはわかります。
　それと、どちらのデータもほかの国にも送る予定です。爆撃機に悩まされてるのはどこも同じですからね。
　見向きされるかは別ですが。」
「なるほど。ありがとう。よくわかった。」
「お役に立てたなら光栄です。」
　説明が終わった後、解散となった。俺は一旦小隊に戻ることとなった。

ちなみに、越権行為は今回の功績で不問となった。

第９話（あとがきに色々追加。）

１９３８年５月。
長嶋飛行脚の魔導甲冑研究所の研究成果である魔導レーダーと誘導砲弾の成果を受けて陸軍は光武と魔導レーダー、誘導砲弾の大幅な増産を決定。同時に、急遽再編成と前線の後退を決定した。
レーダーを装備した光武はいくつかが砲兵の管轄。その他の光武を今までと変わらない装甲歩兵部隊の管轄となる。
俺は装甲歩兵部隊のほうだった。とはいってもレーダーも装備している。
レーダーの使用は任意で切り替えられるので使ってないときはいつものように戦車のような役割を、
使ってるときは早期警戒レーダーと射撃レーダーと対空砲の役割になる。
同年７月、
戦線の再構築によって防空線を構築すると〝怪異の核〟の情報を基に陸軍は大規模な反攻作戦を実施。新型歩兵戦闘脚も投入したこの作戦は逼迫した戦局を打破すべく実施されたはずだったが…

怪異の攻勢の前に反攻作戦は失敗。航空ウィッチと、光武と陸戦ストライカーを装備した陸戦ウィッチたちの奮闘によって前線の崩壊は免れたものの防空線ごと前線の後退を余儀なくされた。

大幅に後退した前線と作戦以前よりさらに悪化した戦況を鑑みて大陸側に暮らす皇国民の大規模な避難が開始される。

皮肉にも前線の後退による防空線の範囲の縮小によって光武とその情報を受けて砲撃する高射砲による防空砲火の密度が増していたことにより、また、航空ウィッチの奮戦もあり空から侵攻してくる怪異は防空線で進行を食い止められていたことと、怪異の活動が小康状態だった幸運が重なり、避難は順調に進んでいった。

怪異の侵攻は浦塩と布哈図(ハバロフスク)周辺にまで後退した前線で食い止められ、戦線は膠着状態となった。

戦線への大規模な侵攻はあったものの前線が崩壊することなく持ちこたえていた。

しかし、8月。膠着していた戦線において異常が起きた。

兵士の間において〝山〟と称されている巨大怪異。これまでも小型怪異を引き連れて攻め込んできたが、今の前線を構築してからは空と陸の両方の必死の迎撃により撤退を繰り返してきた。

その山が今ひとたび動いたのだ。ただしその進行ルートは今までの怪異の行動から

大幅に外れていた。
浦塩の西。荒漠地域と呼ばれる大昔、怪異の侵攻によって滅ぼされた国があった地域、今では人が住めなくなってしまったその地域を侵攻してきたのである。
浦塩周辺の防空を担当していた光武がレーダーの範囲に入ってきた怪異の反応を確認。
続いて対馬にある基地の光武のレーダーによっても確認、
それを受けた航空機による偵察によってその侵攻が確認された。
目標は荒漠地域を通過して対馬方面へ向かっている。前世で言う朝鮮半島を抜けて扶桑海を越えるつもりだろう。
直ちに大本営会議が開かれた。
その会議においていろいろあったようだが、〝山〟が海を渡り始めると陸海共同で迎撃することになった。
航空ウィッチによる挺身作戦。鋼鉄の塊といっていい軍艦を怪異へのおとりとして使用して多数の小型ネウロイを引き付け、
手薄となった巨大怪異の核を少数精鋭のウィッチたちで叩くという大胆な作戦。
当然のことながら艦を提供する海軍から猛反発があったものの陛下の名代として会議に参加していた皇女殿下の鶴の一声で承認。作戦へと動き出した。

巨大怪異の洋上の侵攻速度はその巨躯ゆえか遅々としたものであるが、進行ルートから対馬、引いては扶桑本土に到達するのは時間の問題であった。即座に軍艦が集められ、また、光武以下地上の対空戦力を、大陸の前線を最低限構築できるだけ残して対馬へと集結。

作戦が失敗したときは対馬を本土防衛の壁とする。そういう作戦だ。

俺達の中隊も対馬へとまわされた。とはいってもこの作戦は航空ウィッチたちと艦船が要だ。

彼女たちがうまくやってくれれば俺たちに出番はない。作戦の成功と彼女たちの無事を祈る。

対馬の海岸から戦闘が行われている方角を見る。作戦決行日、戦闘が行われている場所では台風に襲われていた。

いつもなら対岸の島は見えるが台風で見えなくなっている。つまり戦闘の経緯はわからない。

「大丈夫でしょうか…。」

犬房がそんなことをつぶやいている。

「さあな。俺たちとしてはここで作戦の成功を祈るしかない。」
その時、
「報告！巨大ネウロイの撃破に成功したそうです！」
よかった。扶桑は勝ったのだ。これで戦いは終わる。この時は戦いが終わったことに安堵していた。

後になって、海軍の上層部の陰謀によってウィッチたちごと怪異の殲滅を図る作戦が進んでいたこと、
それを止めるために章香が重傷を負っていたことを知った。
だけどそのことに怒りを感じる前にもっと大きな絶望が迫っていた。

巨大怪異殲滅の一週間後。同型の巨大怪異が同じルートを通って扶桑本土に向かっていることが確認された。
「あーあ、これは生きて帰れないかも。とんだ貧乏くじひいちゃったなあ。」
大陸のほうからゆっくりと近づいてくる巨大怪異を見ながら犬房がつぶやいた。（地

上型怪異の上陸もありうるので護衛として陸戦ストライカーも小隊ごと来ることになっていた。）

無理もない。途方もない大きさに無数の小型怪異を引き連れているのだ。

集結させたとはいえ地上の戦力だけでどうにかなる相手とは思えなかった。

大陸で撃退した時も航空ウィッチの奮戦もあってのことだったのだ。

それに殲滅された巨大怪異との戦いでついた傷が全く癒えていない。

文字通りあれは決戦だった。巨大ネウロイに対抗できる戦力のすべてだったのだ。

海軍の第一戦隊はその艦の数を半数以上減らし、航空ウィッチはすべて合わせても前回の半数程度だった。

数を減らしていなかったのは、海軍の第二戦隊だけだった。

海軍の堀井海軍大将は今ひとたび訪れた好機に息巻いていた。

前回は魔女どもに手柄を取られたが今度こそは艦隊の砲撃によって怪異を殲滅してみせん。

海の存在感を殿下にも上覧いただける絶好の機会だ。何としても今度こそはわれらの手で決着をつける。

魔女どもはその数を減らし満足に動けない。こちらの作戦を何としても通す。

はたして、その作戦は承認された。第一戦隊、第二戦隊を集結させた艦砲による一斉砲撃。

航空ウィッチたちの部隊は陸軍は対馬で、海軍は母艦で待機することとなった。

９月１０日。ついに作戦は決行されることとなった。

海軍も自身の作戦が認められたとあって出し惜しみはなかった。

航空機の偵察の情報を基に艦隊を射撃位置へと移動させる。

全艦隊が狙いを定める。

「弾種！試式対空榴散弾！」

ネウロイ用の殺傷半径の広い対空榴散弾を装填する。そして、

「砲撃開始！」

きれいに同じ方向を向いてほぼ同じ角度の艦砲が次々と火を噴いた。

砲弾は敵めがけてまっすぐに飛んでいく。

対空榴散弾がはじけた。弾頭に入っていた小さな榴弾が空にばらまかれそして次々と爆発していく。

爆風が巻き起こり、煙に覆われた。弾着観測機は爆発が収まってから近づいていく。そして煙が晴れていく。

すさまじい威力の砲弾を食らった怪異ははたして、健在であった。

小型の怪異は爆発に巻き込まれて大きくその数を減らしていたもののまだかなりの数が残っている。

そして生き残った小型の怪異たちは一斉に艦隊に襲い掛からんと移動し始めた。

その姿はまるで蝗害時のバッタの群れのようだった。

「いかん！急いで戦闘機を全機発進させろ！航空ストライカーもだ！地上の航空戦力にも支援を要請しろ！

第二射、装填急げ！」

駆逐艦が前に出て対空戦闘を行おうとする。その時、巨大怪異が光った。

そして、前に進んでいた吹雪型の駆逐艦が一隻光に襲われ、光の当たった部分が消滅したかと思うと爆発。真っ二つになって炎上しながら海へと沈んでいった。

「…なんという…ことだ…。」

唖然とするような威力だった。防御の薄い駆逐艦とはいえ軍艦に変わりはない。それが一撃で沈んだ。

先だっての同型との戦闘の報告書で知っていたが目の当たりにするととんでもないものだった。
とはいえひるんでいられない。ここでわれらがやらねば本土が危ないのだ。
「第二射装填完了！」
「よし！第二射、放て！」

目の前で敵に次々と攻撃が当たっていく。しかし、傷つけることはできても倒すには至らない。
敵は傷を負ったそばからすぐに修復していく。
そして足を止めることなくゆっくりとこちらに近づいてくる。
取り巻きの小型怪異たちも対馬へと向かってきた。交戦距離には至っていないがそれも時間の問題だ。
既に飛行場から航空ウィッチたちと戦闘機が迎撃に向かった。
望遠鏡で巨大怪異のいる場所を見る。
海軍の砲撃で取り巻きは大きくその数を減らされた。そして残ったやつも大半が海軍に襲い掛かり、
対馬にもかなりの数が飛んできている。

今やつの周りにいるのは中型怪異が一体と数えられるくらいの小型怪異だけだ。
俺に、ある作戦が浮かんだ。だけど覚悟が決まらない。
「私たち、勝てるんでしょうか…。」
不安をこぼす犬房。犬房に問いかけた。
「なあ、犬房。」
「はい？なんですか？」
「ここで俺がこの絶望的な戦局をひっくり返して一発逆転勝ちをもたらしたら、お前、俺に惚れる？」
「こんなときによくそんな妄言が吐けますね。絶望で頭がおかしくなったんですか？」
とてつもなく冷たい目で見られた。
「俺は正気だ。見ろ。こんなに手が震えてるんだぞ。」「コクピットの中じゃ見えませんよ。」
「で、どうなんだ？」
犬房ははぁ、とため息をつくと、
「そりゃ大半の女の子は憧れるんじゃないですか？」
「お前はどうなんだよ。」
「はいはいそうですねー、惚れちゃうかもしれませんねー。…これでいいんですか。」

「…ああ。ありがとう。」
覚悟は決まった。
「じゃあちょっとここを離れるので代わりに予備機の光武でここ頼む。」
「はあっ!?ちょっと!どこに行くんですか!?」
「決まってる。
ちょっとあのデカ物倒して扶桑救いに行ってくる。」
「ちょっ!?なんですかそれ!?ああ、もう!後でどうなっても知りませんからね!」
光武を急いで航空基地へと急がせる。数分で航空基地に着くとそこにはリベリオン（前世で言うアメリカ合衆国）のダグラスＤＣ―３という輸送機があった。スカイトレインの愛称がついている。これは扶桑がリベリオンからノックダウン生産で作っていたものの一つだ。
積載量も見たことがある。好都合だ。これなら光武を運べる。荷物も積みこむ前だ。
俺は待機していたパイロットに話しかけた。
「誰だ!?持ち場を離れてこんなところで何をしている!」
「なあ、悪いがこいつをあのデカ物の上まで運んでくれないか?」
「何を言っている!何をするつもりだ!」
俺はこれからやろうとしていることを話した。

「…正気か？」
「このままじゃ恐らく負ける。そうなれば扶桑の本土にあのデカ物は来る。そうなれば…。
…頼むよ。今しかないんだ。今行かなきゃどうにもならないんだ。」
真剣な表情で相手を見つめる。パイロットはとても考え込んでいる。
「…わかった。運んでやる。ただし、絶対に倒せよ。わかったな。」
「ああ！わかった！感謝する！」
「待ちたまえ。」
唐突に誰かが話に割り込んできた。
「失礼だが話は聞かせてもらったよ。」
「！あなたは…。」
以前、魔導レーダーを受け取った基地の司令だった人だ。
「君がしてることは重罪だ。わかるかね？君は生きて帰ってきても重大な処罰を受けるだろう。死刑もありうる。…それでもいくというのか？」
「はい。」
「決意は固いようだね…。わかった。作戦を許可しよう。」
「…！ありがとうございます！」

燃料を補給して必要なものを急いで積み込んでいく。光武の足は切除して積み込んだ。必要ないうえにデッドウェイトにしかならなかったからだ。

光武から必要のないものを全部降ろして代わりのものを載せていく。

光武を入れる際にちょっと入らなかったので金属操作で無理やりスカイトレインに穴をあけて入れて戻した。

必要なものを入れると積載量ぎりぎりだった。しかし、飛べないことはない。

光武を乗せた輸送機が飛び立つ。目指すは巨大怪異の上空。

陸軍の航空ウィッチたちは小型怪異とすでに交戦していた。

その中には扶桑海の三羽烏と呼ばれた3人もいた。

「苦労して倒したってのにまた現れるなんて…ね！」

「おまけに航空ウィッチは前回の半数以下、しかも海軍の子らは別行動。こりゃいよいよまずいことになったね。」

そんなことをつぶやいている。

こちらに来た敵の数は少ないとはいえこちらもそう多いわけではない。

それでも次々に倒していく。

そんなとき、上空を輸送機が1機飛んで行った。それを見逃すウィッチたちではな

い。

「何あれ輸送機？なんで輸送機がこんなところに？」

「しかも基地から飛んできていたぞ。どういうことだ。」

そんな時、無線が飛んできた。

「聞こえるか？こちらは対馬基地司令。飛行隊に通達する。半数を残して基地より飛び立った輸送機を護衛せよ。繰り返す。基地より飛び立った輸送機を護衛せよ。」

「輸送機って今通過していったやつ？なにをするつもりなのよ！」

「わからない…けどやるしかない。聞こえた!?第１小隊と第２小隊はあの輸送機の直掩について！」

「了解！」「了解！」

数が減ることで更に厳しいものになるだろう。しかし、それでもやるしかない。

上空５０００ｍほど。スカイトレインを小型怪異が襲っていた。

積載量ぎりぎりで、更にスカイトレインは速度の出る機体じゃない。小型怪異を振り払えるはずもなかった。

光武で撃退しようにも積載量の関係で必要最小限の武装しかつめ込めていない。今使うわけにはいかないのだ。

光武のシールドで耐えるしかなかった。
激しい猛攻が続く。意識外から小型怪異に襲われた。まずい！シールドが間に合わない！
しかし、怪異は攻撃することなく、銃撃によって落とされた。
見ると航空ウィッチたちがスカイトレインを攻撃してきている小型怪異を攻撃してくれている。
スカイトレインを援護してくれるようだ。
「救援感謝する！あのデカ物のところまで護衛してくれ！あいつの上空に行きたいんだ！」
「了解。」
ありがたい！これで更に成功率が上がった！これだけ人が動いてくれたのだ、絶対に成功させてみせる！
敵の本拠近くまで来た。〝山〟の近くには中型怪異と小型怪異が飛んでいた。最低限の護衛だろう。
俺はウィッチたちに、
「危険を承知で頼む。あの取り巻きたちを引き付けてくれないか？引き付けてくれるだ

けでいいんだ。」
「それはいいけど、あいつの真上まで行って何をするつもり？」
「決まっているだろう。あいつを倒す。」
「どうやって？あなたもコアが見える魔眼持ちなの？」
「いや。そんな大それたものはない。」
「はあっ!?じゃあどうやって…。」
「決まってる。大火力でコアごと吹き飛ばすのさ。」
「まさか…！無茶だ！死にに行くようなものじゃないか！正気の沙汰じゃない！」
「無茶でもなんでも、ここまで来たんだ、やるしかないさ。妹だって死を覚悟で砲弾に身を晒したんだ！俺が怖気づいていられるか！」
「あんた、北郷の…。」
「…っ！勝手にしなさい。全機！取り巻きを引き付けるわよ！」
「…ありがとう。」
　航空ウィッチたちは高度を落として中型怪異へと攻撃。そのまま引き付けてくれた。あとは俺の番だ。敵の本拠の上まであと少し。俺はここまで運んでくれたパイロットに話しかけた。
「俺が降下したら速やかに離脱してくれ。」

「了解した。」
　会話が途切れる。
「こいつの貨物室は荷物を積み込むのに不便だな。」
「・・・・・・・・・。」
「生きて帰ってきたらもうちょっと便利な輸送機でも作ってみようか。その時はいの一番に乗せてやるよ。」
「…それは楽しみだ。」
「それじゃ、俺はもう行くよ。ここまでありがとう。」
　そう言って俺は輸送機から飛び降りた。
　陸軍の航空ウィッチたちが敵の護衛を引き付けているとき、敵の本拠に向かってあるものが落ちるのが見えた。
「あれは…。」
　光武だった。足はないが光武が敵に向かって真っすぐ落下していくのが見えた。
　光線をシールドではじき、砲撃で砲台を黙らせながらどんどん速度を増す光武。
　…そして敵との距離がゼロになり、大爆発を引き起こした。
　爆発により巨大ネウロイは木っ端みじんに吹き飛んだ。あの様子ならコアごと吹き飛んでいるだろう。

中型ネウロイたちも同時に姿を消した。つまり、私たちはこの戦いに勝利したのだ。
ある一人の、尊い犠牲によって。
穴吹智子は目の前で起こった光景を素直に喜ぶ気になれなかった。
「…報告。輸送機からの光武の特攻により巨大ネウロイの消滅を確認。光武の搭乗者の生死は不明。
おそらく死亡したものと…。」
「いや、生きてるからね？死んでたらもっと美談になったんだろうけど。」
目の前を一人の男が飛んでいた。
「ぎゃあああああ!!早速化けて出たあああああ!?」
「死んでないって言ってるだろう！」
「だって足がないじゃない！」
「よく見ろ、ストライカーユニットをつけてるだけだ！」
「あ、あら、ほんとだわ…。」
「おい、どうした！なにがあった!?状況を報告しろ！」
通信の先の人物から問いかけが来た。
「す、すいません。光武の搭乗者の生存を確認！生きています！」
それだけ伝えると通信を切った。

「どうやって！なんで生きてるの!?」
「生きてちゃ悪いのか？」
「いやそうじゃないけど…！」
「私も聞きたいわ。一体何をしたの？」
「何って…、ただ光武を敵に突っ込んで爆発させただけだが？」
「もうちょっと詳しく！」
「わかった。経緯を追って話していくと…。」
敵の本拠の真上。そこを光武で落下していく。俺は持ってきていた武装、３．７ｃｍ　ＰａＫ　３６に砲弾を込めて狙いをつける。重量と目的の関係でこれしか持ってこれなかった。砲弾も８つのみ。
それを敵の砲台、あの光線を放っている場所に叩き込む。
一発目。ドンピシャ。敵の砲台を一つ黙らせた。それと同時に敵のビームはこちらへと向いた。
光武のシールドではじく。とてつもない威力だ。
しかし、光武のシールドは防いでくれた。第一射を打ち終わったようだ。続く第二射が来る前に次々に砲弾を叩き込む。第３射、第４射とくるがそれらも全部はじいてくれ、砲弾を砲台にすべて叩き込んだ。

それにより沈黙する砲台。役目を終えた砲を投げ捨てる。
そしてコクピットを開けて俺は外へ飛びだした。
出ると俺はすぐさまコクピットを閉めて落下する光武にとりつく。俺の足には航空ストライカーがついていた。
そして航空ストライカーは光武と接続されていた。
航空ストライカーの飛行魔法と身体能力強化により光武の落下ルートを制御していく。
少しでも成功率を上げるため、ぎりぎりまで光武に張り付いて制御する。
ものすごい勢いで敵との距離が縮まっていく。その時、敵の砲台から光線が再び飛んできた。最初に沈黙させた砲台だった。
まずい！このままでは作戦が失敗するかもしれない。しかし、もはや後戻りはできない。
航空ストライカーの接続を通して光武からの魔法力でシールドを発生させる。
シールドで光線をはじいた。いまだに速度を上げながら敵との距離を測り慎重にタイミングを見計らう。
まだだ…。まだ…。もう少し…。
今！

そのタイミングで光武のエンジンにある操作をする。そして１００ｍほどに近づいた時、

俺は光武に小さい代わりにかなり強度を強くしたシールドを２秒ほど張り続けるように設定して、光武と航空ストライカーの接続を解除！そして機体強度を越えかねないスピードに加速して今にも光線を放とうとした砲台を、

刀で切りつけた！

「チェストおおおぉぉぉぉ!!!」

俺の実家は別に示現流ではないが咄嗟に出たのがこの言葉だった。

あまりのスピードで切りつけたせいで刀は折れ、また、腕の骨が折れた。

だが、そのおかげで敵の攻撃にさらされることなく光武は敵と接触。

シールドの強度と落下速度のスピードで敵を貫通してほどなく大爆発を引き起こしたのだった。

その後、敵の爆発による破片を避けるためギリギリまで高度を下げて急いで脱出した。

これが起きたことの全容である。

そう、俺がとった作戦とは光武を爆弾にした急降下爆撃だったのである。とはいって

もだいぶ変則的ではあるが。

ちなみに爆発は、光武のエンジンの意図的な暴走による爆発と光武のウェポンラックに満載にしてあった魔法弾の弾頭の誘爆によるものである。

「いやあ、急降下爆撃なんてヒスパニア戦役でやったきりだったからうまくやれるか不安だったけど意外とやれるもんだねえ。」

わっはっはと笑いながらそう言う北郷一郎の話を聞いてその場にいた全員が思ったという。

〝やっぱりこいつ頭おかしい〟と。

かくして、扶桑海事変は終息を迎えた。

戻った俺は直ちに拘束。軍法会議にかけられたが、なんか割り込んできた皇女殿下の、

「その方、敵前における辱職ノ罪とその他諸々の罪、許し難し！しかし、挺身によって敵を撃滅してきた功、誠に大儀である！

よって、本来なら死刑のところであるが、禁錮、1週間の刑に処す！」

というありがたいお言葉をいただいてほぼ不問に近いこととなった。

予想以上に短いな!?死刑から減軽しすぎじゃないですかね?と、思ったが藪蛇なことなので思うだけで口には出さなかった。

禁錮刑の期間が過ぎて解放されると真っ先に章香のお見舞いに行った。

幸い、命に別状はなかった。しばらく車いす生活になるそうだが。

「よっ、章香。お見舞いに来たぞ。」

「兄上、来てくださったんですね。」

少しばかり他愛のない話をする。いろんなことを取りとめもなく。

「ところで兄上、聞きましたよ。

ほぼ自爆に近い急降下爆撃をなさったそうですね?

ちょっとその話、詳しく聞かせてもらいましょうか?」

尋問により速やかにやったことの詳細を話すと怒られた。

「もう少し御身を大事になさってください!万が一のことがあったらどうするのですか!」

「いや、まあ、その…。」

言い訳もできずに怒られる俺である。妹が体張ってこの状態になったことは知っているが言うと逆上しそうだったので言わないでおいた。こういう時、男はつらい。君子は地雷に近づかない。

「まったくもう、死んだらどうするのですか…。」
…参った。妹に泣かれる羽目になるとは。いつも明朗快活で男勝りな今の性格になってから泣いている姿はあまり見なかったというのに。
「…すまなかった。」
それしかいう言葉が見つからなかった。

扶桑海事変の後、一時的な招集に応じていただけだった俺は除隊。長嶋飛行脚に戻ると、また光武の開発に戻ることになった。
聞くところによると、扶桑海事変での活躍により光武の注文は海外からも増えているようだ。
また、海外製の魔導甲冑も徐々に数を増やしているという。魔導レーダーと光武の高射砲部隊による防空の成果を見た結果らしい。少なくとも実用的な電子的なレーダーが開発されるまでは増え続けるだろう。
禁錮刑から解放された後、軍を除隊する前に犬房が訪ねてきた。
どうやら飛行適性が認められて飛行学校に入学できるらしい。
「よかったじゃないか。がんばれよ。」
「はい、それで…、あの、特攻する前に…その…。」

とたんに口ごもる犬房。もしかしなくてもあのことだろう。それと、特攻じゃない、急降下爆撃だ。

「あー、なんだ、あれは、その、俺を慕ってくれるかわいいあの子のためならもしかしたら勇気が出るかもしれないという意図であって別にお前でなくてもよかったという割と最低な感じのやつだから忘れてくれて構わないというかなんというか…。」

「知ってますよ。あー、よかった、これで私が惚れてるなんて勘違いしてたらかわいそうだからちょっと気になってたんですよ。これで一安心しました。」

「なんだとこんにゃろう。」

「あはははは、じゃ、お元気で。」

「ああ、そっちこそな。」

「まったく、デリカシーのない。ちょっとは見直してもいいかもって思ったのに…。」

とある航空基地。そこにある航空機が飛んできた。すこし奇妙な形をしていた。

まず主翼は地面からかなり離れた高いところに、そして胴体が太く、地上高が低かっ

た。後部にはスロープも兼ねた荷物の搬入路が。主輪を収める場所もあった。

航空機から一人の男が出てきてあるパイロットに話しかけた。

「やあ、新たな輸送機の試験をしてもらいに来たんだが、ちょっとあなた、頼めませんかね？」

第１０話

　１９３９年。扶桑。舞鶴の講導館の道場。そこでは未来のウィッチ候補生たちが修行に励んでいた。
「そこまで！みんな、今日もよく頑張ったね、今日はここまで。」
「「ありがとうございました！」」
「ぬわあああん、疲れたもおおおん。」
「疲れた…。」「今日すごいきつかったぞー。」
　今日も修行を終えて道場の片づけをしていく。
　その時、そこの師範代としてウィッチを育成している北郷章香中佐に手紙が届いた。
「郵便でーす！北郷章香さんあてです。」
「ああ、どうもありがとう。差出人は…。兄上からだ！」
「先生のお兄さんからですか？」
「それって光武の発明者で扶桑海事変でも活躍したっていう…。」
「ああ。今は技術者として招かれて海外を回ってるんだ。どれどれ…。」
　早速手紙を開いて内容を見る。

拝啓、扶桑のお父様、お母様、我が妹の章香。

今、私はセヴァストポリに来ています。魔導甲冑の制作者として、また、魔導甲冑周りの技術の開発者としてリベリオン、ブリタニア、カールスラント、オラーシャへ招かれ、扶桑から東回りに、まずリベリオンからブリタニア、カールスラント、オラーシャの順番で回って、それまで働きづめだったことからここ、セヴァストポリへオラーシャのお偉い人の厚意で羽休めに一週間ほど滞在する予定でした。

そうそう、移動はカールスラントのメーカーと中島飛行機（と途中で参入してきたリベリオンのロッキード社）の共同開発したハーキュリーズという名前の輸送機で、扶桑で新たに開発された魔導甲冑用の大型魔導エンジン（出力は何と1．3倍！）を搭載し、内装の見直しを図った光武改もそれに乗せて一緒に来ています。（例によって材料から一人で全部作ったハンドメイドです。）銃器の類はさすがに載せていませんが扶桑刀は許可が下りて一緒にあります。（といっても輸送機にずっと乗っていてしかもすっぽ抜けないようにしていますが。）

なぜ武器が一緒に乗っていることなんか書いたのかとお思いでしょう？

今、私は羽休めに来たセヴァストポリで…

――――怪異に襲われています。

街中を観光していると突如爆発が起きた。見るととてつもなく大きいものが黒海の上空に浮かんでいた。

「走れ走れ！止まるな！とにかく逃げるんだ！」

黒海に突如として現れた巨大怪異。それからは中型と小型の怪異が飛んできていた。

怪異は光線を発射して街を焼き、兵器を蹴散らしている。

黒海の艦隊は唐突な襲撃に対応が遅れている。

「あの巨大さに光線…それに怪異の生産能力…。扶桑海事変のやつと似ている…。

今度は小型・中型すら光線を打つようになるなんて…。」

「何が起きているんだ…。あれは…怪異か！」

一緒に来ていたオラーシャのお偉いさんが外に飛び出して怪異を見てそんなことを言った。

「逃げましょう！俺たちが乗ってきた輸送機のもとへ！」

「ああ、わかった！」

急いで俺たちが乗ってきた輸送機へと向かう。飛行場に着くと輸送機の中へと乗った。

そして、俺は持ってきていた光武改に乗り込んで、扶桑刀を光武改に装備する。

「どうするつもりだね！」

「決まってるでしょう！応戦します！あなたはこのまま避難してください！」

「待ちたまえ！…仕方ない！避難民を乗せて出発しよう！おおい！そこのきみ！これにできるだけ人を乗せて逃げるぞ！こっちに誘導してくれ！」

飛行場を出てセヴァストポリの街に戻る。入ってきた怪異は少数だったが、その攻撃力は強く、また、装甲も固く、兵士たちが通常兵器で応戦していたがあまりきいていなかった。

大きめの怪異から何かが落ちてきた。爆弾か!?そう思ったが地面についても爆発しない。

その代わり動き出した。そして周りのものを襲っていく。

つまりあれは怪異だ。大型の怪異が小型の怪異を運んできたのだ。

街中を移動していく地上型の小型の怪異。どんどんと兵士が襲われて被害が拡大し

ていく。
「やらせるかあああああぁぁぁぁぁ!!!」
扶桑刀を抜いて一気に近づき降りぬく。一刀のもとに両断された怪異は動かなくなった。
「無事か！」
「あ、ああ。あんたは？」
「俺は北郷一郎！時間がない！手短に伝える！地上型の相手をするから無線で知らせてくれ！」
「わかった！無線の周波数は…だ！」
「了解！こちら扶桑の…義勇兵だ！名前は北郷一郎！魔導甲冑に乗っている！支援が欲しいなら連絡を頼む！」
地上型の相手を次々に切っていく。市内の整備された道なら光武改の得意とするところだ。
上空の大型怪異は先ほどまでいた飛行場から出撃したウィッチたちが迎撃にあたっている。
しかし、なかなか苦戦しているようだ。
「くううっ！こいつ、傷つけてもどんどん再生する！どうすればいいのよ…！」

「きゃっ！あいつの攻撃、すごい威力！何回も耐えられないわ！」
　大型の怪異…なら十中八九コアがあるはず。
「おい！上空のウィッチたち！聞こえるか！」
「…？誰!?」
「聞こえるみたいだな！いいか！それだけ大きければコアがあるはずだ！様々な場所を撃ってコアを探すんだ！」
「コ、コア…そうか！でもどこに…。」
「なんでもいい！とにかくいろんなところを撃ってみろ！」
「ああ、もう！何よそれ！了解！」
　航空ウィッチたちは大型怪異の周りをぐるぐると飛んで撃ち始めた。
　俺も、地上型を倒しながら移動していく。
「こちら、第3砲兵小隊！高射砲部隊の配置された要塞へと続く〇〇通りにて小型怪異と戦闘中！だが数が多すぎる！このままじゃやられる！至急、応援頼む！」
「了解した！」
　しかしその場所は通常の道を通って行ったら光武改でも5分はかかる。そう、《通常の道を通って行ったら。》
　俺は光武改に収納されているワイヤーを取り出すと建物の上に射出。そして壁に両

足をつけると足裏に魔法力を発動！壁に足を引っ付けると、ワイヤーを巻き取りつつ足裏のローラーを回転させてそのまま壁面を一気に駆け上がる！

これが光武改に搭載された新機能、オラーシャで魔法力によって水平な壁を登ったり水の上を走ったりしていたウィッチの姿を見て開発したその名も魔導履帯（マジックローラー）！

これにより一気に機動性が上昇した。なお、例によって魔法力を使いまくる。

一気に建物の上に乗った俺はそのまま建物の上を移動。魔導エンジンの出力が強くなったことで更に強化された身体能力を持って建物の間をジャンプ。直線的に移動して最短経路を突っ走る。

「撃て、撃て！とにかく撃ちまくれ！」

「くそっ！ここを通すわけにはいかねえんだよ！」

「装填急げ！…だめだ！間に合わない！」

「いいやっ！間に合った！」

砲撃を繰り出そうとしていた、先頭にいた怪異を切り伏せて怪異の群れと砲兵の間に立つと怪異の群れに向かって突っ込む。

「ば、馬鹿な…無茶だ！おい！」

両手に持った二刀を次々にふるう。ここの道は一本道だ。敵も敵の攻撃も一方向からしか来ない。つまり、

「攻撃にだけ注意して目の前のやつらを全部切ればいいだけだ。簡単な話だ！」
「いや、その理屈はおかしいだろう！」
　敵の攻撃は後ろに流れ弾がいかないように全部シールドで防ぎながら、１０体ほどいた怪異を全部切り伏せた。
「信じられねえ…ほんとに全部倒しちまいやがった…。」
　その後、野戦砲部隊に話しかける。
「無事か？」
「ああ、無事…とはいいがたいが、おかげさまで。救援、感謝する。」
「いや、いい。それよりもこの上には高射砲があるのか？」
「あ、ああ。それがどうかしたか？」
「いやなに、あのデカ物を撃ち落とすために貸してもらえないかと思ってな。高射砲なら時限信管付きの砲弾があるだろう？」
「撃ち落とすって…できるのか？」
「できるさ。あいつは今かなり低空を飛んでいる。それに速度もあまり出ていない。
　あれなら当てられる。現にあそこの高射砲部隊だって当てているだろう。」
「ああ。しかし、なぜあれを当てられて落とせないんだ。」
「あの怪異はでかいからな。恐らくコアがある。コア持ちは総じて修復能力が高い。

魔法力のあるウィッチの攻撃か魔法弾なら修復を遅らせることができるが、通常兵器で倒すなら大火力を集中させて一気にたおすしかない。

光武改なら高射砲も装備できる。これで魔法力を込めてあいつを撃って撃破、ないし航空ウィッチのコアの発見を手助けする。」

「…わかった。おい！聞こえるか！高射砲部隊のやつら！扶桑から来たサムライがお前らの砲を有効活用してくれるってよ！」

「竿の使い方がうまいとはそりゃ頼もしい！使い終わったら返してくれよ！」

どうやら貸してくれるらしい。設置された高射砲に近づいて金属操作で台座と切り離してレーダーを発動。（こちらは購入した。）

敵の速度と高度と距離を測定すると、算定具に情報を入力。（こっちはやってもらった。）時限信管をセットした砲弾を装填すると無線でウィッチたちに連絡。

「こちらは光武改！高射砲のあった丘から砲撃する。射線に入らないようにしてくれ。」

航空ウィッチが射線近くから離れると砲撃。弾は怪異に当たる前に爆発。爆風と破片が怪異を襲う。

奇妙な、金切り声のような声を上げる怪異。高射砲の一撃は怪異を大きく傷つけたものの倒すには至っていない。

「撃墜できていないぞ！二発目を装填しろ！」

「いや、ちょっと待ってくれ。その前に…。
航空ウィッチの人たち！聞こえるか！今高射砲を当てた部分を見ろ！明るい色をした結晶体が露出しているだろう！そいつがコアだ！それを打ち壊せ！」
「了解！」

航空ウィッチの一人が怪異の下の部分に回り込む。
「あった！あれね！よーし…！今までのお返しよ！たっぷり食らいなさい！」
傷ついている部分、コアが露出している部分に近づくと機関砲を掃射。コアは破壊され怪異は無数の破片となって
撃破された。
「やったわ！」
「見ろ！怪異が消滅したぞ！勝ったんだ！」
隣にいた兵士が喜んでいる。しかし、俺は上空に浮かぶ不気味なものを見て、戦いはこれからであることを感じ取っていた。
あれがある限り怪異はまたやってくる。それは現実のものとなった。

この戦いののちに怪異は黒海周辺の伝説の怪異から名前を取ってネウロイと呼ばれるようになりました。
そして、この襲撃の後、オラーシャは戦力を、被害は受けたものの堅牢なセヴァストポリに集結させています。
俺も要請を受けてセヴァストポリにとどまっています。
ですが、ネウロイの攻撃は激しく、戦況は芳しくありません。もしかしたら帰れないかもしれないので父と母によろしく伝えておいてください。
追伸。なんで2回もどんぴしゃで怪異の事件に巻き込まれるんでしょうね？呪われているんでしょうかね？

――――わたしも、そう思います。――――

手紙を読み終えた北郷章香はそんな心境で後ろに倒れた。
「わああああああ!?せ、せんせーーい!?」
「先生が倒れたぞーーー!」
「早く医者連れてきてーーー!!!」

第11話

１９３９年。黒海に突如現れた怪異の巣。
そこから現れた軍勢は瞬く間に欧州を包み込んだ。
９月１日、怪異はダキアに上陸。黒海周辺の狼男の伝承から怪異を「ネウロイ」と命名。
同月、ダキア、モエシア陥落、オストマルクもトランシルバニアを残して陥落。
同月、ネウロイ、オラーシャに侵攻、スオムスにも飛行型ネウロイが飛来。
カールスラント、オストマルクとの国境線に非常防衛体制を敷く。

現地のオラーシャ軍に要請を受けてセヴァストポリにて従軍していた俺は、最初の侵攻で傷ついた要塞の応急的な修復を手伝いながら待機していた。
最初の襲撃ののち、ネウロイはダキアのほうへ戦力を集中させていた。
一週間ほど大規模な襲撃はなく、その間にオラーシャ軍は大規模な軍勢をセヴァストポリに向けるべく編成を行っていた。
しかし、これは嵐の前の静けさだった。

一週間でダキアが陥落するとその大量の物量の矛先はセヴァストポリに向いた。
堅牢な要塞も空からの攻撃には弱く、また、ネウロイの攻撃はたやすく人類の兵器を壊していった。
この要塞はそこまで対空に力を入れておらず、高射砲も少なかったことが被害に拍車をかけた。
オラーシャの黒海艦隊の必死の応戦もむなしく、艦隊は数を減らしていき、街は、要塞は傷ついて行った。
そして、3日ほどでまず南側部分は壊滅状態。放棄された。その後4日間北、東方面に立てこもり抵抗していたが、
これ以上の防衛は困難と判断。撤退することとなった。
この電撃的な猛攻に、救援は間に合わなかった。
「撃てぇ！撃てぇ！奴らを撃破するんだ！」
街中ではすでに小型ネウロイが上陸。町を我が物顔で闊歩していた。
野戦砲部隊などが必死に応戦しているが物量の前に押され気味であった。
次々と司令部に届く戦況の悪化を知らせる報告。それに必死に対応していた。
「司令！空から攻撃が来ます！」
「高射砲部隊に応戦させろ！」

「だめです！無線で連絡しましたがさきほどの攻撃で沈黙！艦隊もすべて沈没しました！」
「なんということだ…。航空ウィッチの部隊はどうした！」
「彼女たちも応戦してくれていますがここ連日の連戦で疲弊してるのと相手の数が多すぎて対処できていません！」
「くそっ！救援も恐らく間に合わん。もはやこれまでか…。」
「空から攻撃が来るぞ！気をつけろ！」
空を飛んできているネウロイの砲撃でトーチカが吹き飛ぶ。
ネウロイのビームは強固な防御をものともしない。大量に築かれたトーチカもネウロイの前では無力だった。
「くそっ！これでもくらえ！」
機銃で空へと攻撃するが、傷ついたそばから修復して全く効果がない。
やがてネウロイの赤い部分が輝き、
「あっ・・・・・・。」
第二射が放たれた。思わず目をつぶる兵士。

しかし、ネウロイの光線は兵士を焼くことなく、

「すまない、他の戦線も手いっぱいでな、ちょっと遅れた。」
セヴァストポリを守る巨大で小さな壁に阻まれていた。
背中に増加されたさやのような籠と、キューポラのあるハッチから、一緒に来ていた高射砲部隊員の生き残りが下りて配置に着いた。
このさやのようなかごは、光武の機動力を存分に発揮すると普通の人間には張り付き続けることが困難なことを受けて増設した。
俺は即座にレーダーを発動して必要な情報を取得し、それを伝える。
「距離、１０００！高度３５００！速度時速３００ｋｍ！　信管は３秒！１分で支度しろ！」
「了解！」
一人が算定具に情報を入力し一人が信管をセット。砲弾を装填する。
「発射まで５，４，３，２，１、発射！」
射出された砲弾はネウロイの未来位置へと飛んでいき、そこで爆発。爆風と破片でネウロイを蹂躙する。
「弾着！目標、撃破しました！」
「やった！〝ドレッドノート〟がやってくれたぞ！」

「俺たちも地上のやつらをぶっ潰すんだ！」
「俺たちも砲撃で奴らを倒すぞ！次、目標距離…」
正直言って高射砲で一体や二体倒したところで焼け石に水である。
数が多すぎるのだ。空を飛ぶ奴は小型もいる。比較的大型を攻撃することで空の援護をすることくらいしかできない。

何時間か戦い続けいるうちに無線が入った。
「こちら、セヴァストポリ司令部。ケルチ半島、ヤルタもすでに陥落したとの情報が入り、これ以上の防衛は困難と判断された。上層部は撤退命令を出している。我々はクリミア半島中央部、後方基地のシンフェロポリの味方と合流。ペレコープ地峡を通って脱出する。その際、民衆の避難を優先させる。民衆が避難した時点で我々も撤退する。」
どうやらクリミア半島は敵の手に落ちることになったらしい。
俺たちは指定された合流地点からほかの味方と合流すると、シンフェロポリへと移動。
シンフェロポリで味方や民衆と合流するとクリミア半島の北、半島と大陸を結ぶペレコープ地峡へと向かった。
既に半包囲状態にある今、早急に脱出しないといつまでも持たない。合流すると即座

に移動を開始した。
黒海で戦闘が開始した時点から民衆の避難は始まっていたのだが、ここまで早く落ちるとは思っておらず、
まだ避難が完了していなかった。昨日になってようやく避難する民衆の最後の便が出発。それを護衛しつつ俺たちも撤退することになる。
移動すること数日。ようやくペレコープ地峡に着いた俺たち。ここに来るまでにネウロイの襲撃が散発的にあった。そのたびに矢面に立って戦う。航空ウィッチの応戦と地上の頑張りにより何とか撃退してきた。
ペレコープ地峡ではまだ民衆が避難を完了していなかった。これでは撤退できない。つまり、ここで俺たちは民衆の避難が完了するまで戦わなくてはならない。司令部が指令を下す。
「我々はここで民衆の盾となる。総員、戦闘配置に着け！」
ペレコープ地峡はその立地から黒海と腐海から以外では唯一のクリミア半島への通過点となる。
そのためかなり重要な地点であり、堅牢な要塞が築かれていた。奥深く、また幅が５ｋｍから７ｋｍと狭いこの地峡は地上の迎撃に向いている地点といえる。
俺たちはペレコープ地峡の要塞にいた部隊と合流してここでネウロイを食い止める

のだ。

「奴らが来たぞ！総員！戦闘開始！」

ネウロイ達が来た。航空型のネウロイは俺がレーダーで先に発見して既に航空基地に連絡を取っていたことにより、航空ウィッチたちが迎撃に向かってきてくれていた。

俺たちは地上の相手に専念できる。さあ、ネウロイどもかかって来い！

～ある兵士の記録～

ペレコープ地峡にて、クリミア半島から撤退してきた部隊と合流した我々は民衆の避難が完了するまでここで交戦し続けることになった。民衆はペレコープ地峡にある二つのルートから逃げている。一つはメリトポリからザポリージャ、ドニエプロペトロスク、ハリコフへと逃げるルート。もう一つはヘルソン、ムィコラーイウへと逃げるルート。ムィコラーイウからさらにハリコフとキエフに逃げるルートに分かれる。

我々はこのうちムィコラーイウへと逃げるルートを担当する。

しかし、オデッサは陥落。ムィコラーイウもすでに攻撃を受けているという。もしかしたら途中でヘルソンからクリヴィー・リフへ直接行き、ハリコフへ逃げることになるかもしれない。

無事に逃げてくれるといいのだが。

ネウロイの地上型が進行してくる。設置された対空砲や野戦砲、戦車、そして陸戦ストライカーがネウロイを阻む壁となる。その中に魔導甲冑…マギウスアーマーが混じっていた。まだまだ扶桑以外では少数しか生産されておらず、数も少ないものであり、こんなところで見るのは珍しいものだった。

聞くところによるとあれは扶桑の最新型らしい。そんなものが何故あるのかと聞けば、たまたま来ていたセヴァストポリの戦いに巻き込まれたらしい。なんとも不幸な野郎だ。（なんと操縦者は男のウィッチだった。）

戦闘が始まった。奴らは瘴気とともに来る。そのため、普通の部隊は少し後ろから戦わねばならない。

つまり、ウィッチを、少女たちを矢面に立たせることになるのだ。

たまに自分の無力さが恨めしくなる。せめてできる限りの援護を行わねば。

戦いは始め順調だった。奴らは物量で押してくるが、この地峡は狭い。一度に来れる戦力も限られていた。

陸戦ウィッチたちは懸命に戦ってくれている。魔導甲冑もその巨体に見合った性能で砲撃を受け止め、お返しを叩き込んでいた。我々も精いっぱい大砲による援護を行っ

た。

被害は少ないとは言えなかったが、いける。我々はここを守れるのだと思っていた。

しかし、一週間後。状況は変わった。ムィコラーイウが落ちたのだ。つまり、このまでは私たちは地上のネウロイに挟み撃ちにされてしまう。早急に脱出しなければならなかった。

後ろの味方はすでに撤退を開始している。我々も早く脱出せねばならない。ノーバカホフカからメリトポリへ、そしてザポリージャまで後退する。

しかし、その最悪のタイミングで、奴は現れた。大型の地上型ネウロイ。

味方の撤退はまだ完了していない。我々が今ここで撤退すれば追撃され、被害は甚大なものになるだろう。

ここを死守せねばならなかった。

大型のネウロイはそのでかい体に違わぬ装甲と攻撃力だった。遠くからでも攻撃を届かせ、多くの野戦砲や高射砲がやられた。

陸戦ウィッチの攻撃も遠くからではその装甲を貫通できなかった。我々の高射砲や野戦砲も打ち込んだが、奴はその傷を即座に修復していく。

じりじりと詰められていく距離。その時、何かが大型ネウロイに向かって突っ込んで

いった。
光武改だ。扶桑の魔導甲冑が敵に向かって突っ込んでいった。
バカな。そんなことをすれば滅多打ちにされる。
しかし、彼は全面からくる攻撃をかわし、シールドで防ぎつつ反撃で取り巻きのネウロイを倒していった。
光武改にはタンクデサントとして陸戦ウィッチが複数名乗っていて、彼女たちも砲撃で進行を助けていく。
誰かが言った。
「我々もあいつを援護するぞ！」
その言葉で彼が進んでいく方向の雑魚どもを攻撃していく。彼らの進行を妨げる者たちを排除するのだ。
そして、彼は陸戦ウィッチたちが飛び降りたのを確認して、更に素早い機動を取った。
大型のネウロイに肉薄するとまずはその足を扶桑刀で切りつけた。
倒れこむ大型ネウロイ。彼は倒れた奴の頭に大砲を突き付けて放った。
至近距離で撃たれた砲にご自慢の装甲も意味をなさなかった。一撃で頭を吹き飛ばされた奴は消滅した。
大型を仕留めた光武改は一緒に来ていた陸戦ウィッチと横隊を組み、じりじりと下

がっていく。
その撤退を支援していく。彼らがある一定まで下がると、奴らはあきらめたのか追撃をやめて撤退した。
我々は助かったのだ。
その後、味方の撤退が無事完了。我々もそれに合わせて後退することになった。
戦いが終わり、交代している途中、あの魔導甲冑に興味を覚えた私はセヴァストポリから来た兵士に尋ねた。
あの魔導甲冑は兵士たちの間で親しみと敬意をこめて〝ドレッドノート〟と呼ばれているらしい。
なるほど、通常の陸戦ストライカーに比べてあの巨体だ。それから繰り出される砲撃と防御。
それらが与える安心感。人型というのもなんだか親しみを感じさせる。
まさにドレッドノートと呼ぶにふさわしいものだった。

第１２話

ペレコープ地峡での戦いを切り抜けて撤退した俺たちは東へと向かい、ロストフへと撤退することになった。

しかし、その途中、ドニエプロペトロフスクが落ちたことをメリトポリで聞いた俺たちは、東に方向を変えて撤退。途中でカールスラントの援軍だった部隊やほかのオラーシャの部隊との合流を続けながらさらに東へと撤退し続けるのだった。

目指す目標はロストフ。アゾフ海の北の沿岸に沿ってマリウポリを通過。ロストフへ、というルートを取った。

ネウロイは水を嫌う。飛行する奴は河川を飛び越えるが、地上のやつは河川を前にすると潜るか迂回、橋を使って渡河する。それ故に地上では河川を拠点、または前線とするのだが、その前線も後退せざるを得ない状況が続いているようだ。

それ故にドニエプル川が突破された以上、大きく長いボルガ川が最終的な防衛ラインになるだろう。それまでにドネツ川が防衛ラインになるかも知れない。

～ある兵士の記録～

またネウロイに襲われた。幸いにもウィッチとの連携で撃退することはできたが。

連戦負け続けている我々は東へ東へと撤退を続けている。軍の上層部はヴォルガ川を最終防衛ラインとした。

我々もそこを目指すことになっている。奇跡的にも装備の損耗はあるものの人員の損耗はかなり抑えられていた。

これも航空ウィッチや陸戦ウィッチの奮闘のおかげだろう。

特に〝ドレッドノート〟の働きは目覚ましかった。

彼を中心に陸戦ストライカーが盾となり、そのパワーで簡易的な塹壕による陣地をたやすく作り、その機動力で戦線の穴を埋め、その火力で敵を倒す。

我々はその裏で守られながらできる限りの支援を行う。砲撃支援であったり、民間人の避難であったり、弾薬の補給であったり。

〝ドレッドノート〟を信頼しているのは何も陸戦ウィッチや我々だけではない。航空ウィッチもだ。

ネウロイがうじゃうじゃいる中へ落ちたウィッチをその機動力を持って全力で救いに行くのだ。

彼に救われた航空ウィッチは多い。レーダーで空戦の様子を把握している彼はちょっとの護衛とともに撃墜されたウィッチをよく助けに行く。（もちろん自分たちが

襲われてないときに限りだが。）

即死でなければ、シールドで助かるウィッチも多い。その間身を隠しながら救助を待つ。が、何分敵の真っ只中だ。救助しに行くことはとてつもなく危険なことだった。

それに現在どこも押されて撤退している途中である。移動力のある航空ウィッチでも救助しに行くことが難しい状況だった。落ちたらまず助からない。

そんな中でも助けに行くのだった。

一度彼に聞いた事がある。なぜそんなに危険を冒してまで彼女たちを助けに行くのかと。

君だってかなり消耗してるはずだ。

彼はこう答えた。

「別に義理人情だけで助けに行ってるわけじゃない。航空ウィッチっていうのは貴重なんだ。

それに空に対抗できるのはほとんど彼女たちだけだ。なら飛べる彼女たちを助けに行くことは不思議なことじゃない。一人でも数は多いほうがいいからな。今のネウロイは航空型が主力のようだからなおさらに。

それに落ちて帰ってきて、立ち直った子は強くなる。なら助けに行かないって手はない。実戦経験のある子は貴重なんだ。」

私は知っている。確かに彼はそう思っているのだろう。救助されたウィッチが救助されたときのことを話しているのを聞いた事がある。墜落してネウロイに襲われそうになり、何とか間に合って救助されたとき、礼を言ったらこう返されたという。

「礼はいい。そのこれから助けられるはずの命の分誰かを助けてくれりゃそれで！」

光武改のコクピットの中、その時のこちらも見ずに必死にネウロイを迎撃しながら戦う様子は恐怖を押し殺しているようにも見えたという。（そんなことを顔を赤らめながら話していた。）

きっと彼はそれで理論武装してるに過ぎない。自分だって疲れているのを、敵の真っ只中に飛び込む怖さをそれで騙しているだけなのだ。そして、それ以上に助けられるかもしれないのに助けに行かなかったということに恐怖しているのだ。

そんな彼だからこそ一緒に敵地に飛び込むものや慕う者もいるのだろう。

事実、兵士や人々の人望も厚かった。彼がウィッチを助けに陣地を離れることに不満を漏らす輩は少なかった。

オラーシャ、アゾフ海沿岸、タガンロクのそばにあるミウス川の防衛線。

「こちらダリエフカ！地上型ネウロイが多数！壊滅の恐れあり！至急応援頼む！」

「了解。直ちに急行する！何とか持ちこたえてくれ！」

救援要請を受け取り、突破されそうな防衛地点へと急ぐ。
着いた時にはネウロイはさらに増えていた。タンクデサントの陸戦ウィッチたちは背中にある、陸戦ストライカーユニットと光武改を接続してタンクデサントの負担を軽減するポイントから陸戦ストライカーと光武改の接続を解除して降りると展開する。
そして、塹壕へと迫っていたネウロイを共に押し返していく。
「すげえ！まるで壁だ！いや、移動トーチカだ！」
ネウロイを撃破しながら押し返すと、数を減らしたネウロイ達はあきらめたようで撤退した。
「助かった！救援感謝する！」
上空のほうも戦闘は終わったようだ。敵の姿は見えない。撃墜されたウィッチが一人いたが、それについてはもう助け出されていた。タガンロクの航空基地に帰還していく航空ウィッチを見送った。
ネウロイの攻勢は激しかった。特に陸上型は数が多くて被害が大きかった。
襲撃の回数もあってみんな疲労がたまっていった。
「こ、こちらオトラドノエ！壊滅の危機！至急救援頼む！…うわあ！だめだ！突破される！た、助けてくれ！」
ある時、防衛線の別の場所が突破された。幸い、航空ウィッチの援護で被害が食い止

められているうちにすぐに急行して防衛線を立て直したが、もはやここは抑えきれないかもしれない。

「防衛線はもはやもたず、スターリノが落ちた…か。もはやここも持たない。撤退だ。全軍に撤退命令を出せ。タガンロクは放棄する。」

全軍に撤退命令が出た。ロストフとタガンロクをつなぐ鉄道と、タガンロクの港から民間人を優先的に撤退。俺たちはそれまで敵を食い止めつつ海岸沿いに陸路で撤退する。交易の中心であったここを放棄することは決意のいることだっただろう。決断に感謝するほかない。

１９３９年１０月半ば。

道中、タガンロクにある拠点で２週間ほど防衛に参加。しかし、消耗が大きく、また、スターリノが占拠されたため撤退。ネウロイ達の激しい追撃を覚悟しながら目的地であったロストフまで撤退する。

しかし幸運なことに、秋雨が始まったことにより、雨と泥濘によって水を苦手とするネウロイの進撃は遅々たるものとなり、ろくな追撃のないまま撤退できた。

１１月初め。

ロストフまでたどり着いた。ドン川の河口一帯は古来より商業や文化の面で非常に重要だった。

今でも、鉄道路線の中枢であり、鉄道と水運の連絡点であり、金属や石油が豊富なカフカースへの玄関でもある。

そして、アゾフ海、ひいては黒海と通じている。

それ故にここを取られるということはヨーロッパからの支援がかなり制限されるということである。

そのこともあって、俺たちがたどり着いた時には既に大勢のオラーシャとカールスラントの軍団が大量の兵器をもって武装していた。

その中には、俺達とは別ルート、航海でアゾフ海を渡ってきたセヴァストポリの部隊もいた。

俺たちは生き延びたのだ。そこに展開していた軍に迎え入れられ、俺たちは生きてここまで来られたことを喜び合った。

一緒に来ていた部隊は再編されることになった。その際、セヴァストポリからともに撤退した上官やウィッチ、兵士たちや民間人が次々お礼を言いに来た。

「あんたがいなけりゃきっとここまで来られなかった。本当にありがとう。」

「あんたは俺達の英雄だ！」

「あの時救助しに来てくれて本当にありがとう。今ここにいるのはあなたのおかげよ。」

自分のしたことが報われたようだった。助けられなかったものもある。間に合わな

かったことがある。
だけどそれでもやったことは無駄ではなかったのだと思えた。
その後、現在の戦況を聞いた。
モスクワは陥落。スオムスまで攻撃されているらしい。モスクワ陥落を受けてここからドエツ川ではなくドン川に部隊を展開するのだそうだ。ヴォルガ川を最終防衛線として、ドン川からヴォルガ川にかけて戦線を展開し、補給を受けながら戦うのだとか。
そして、なんと、セヴァストポリで抵抗を続ける部隊がいたらしい。
どうやら撤退しそこない、要塞の南側で戦っていたらしい。また、シンフェロポリでも同様に抵抗する部隊がいた。
それを受けてオラーシャはなんとか人員をかき集めてロストフからアゾフ海を通って大量の物資と人員を送り、クリミア半島の勢力を取り戻していた。
俺はこのまま残って戦うにしても一旦扶桑との連絡をとった方がいいと考えて、何処かで扶桑との連絡が取れないかを聞いたところ、
バクーに扶桑陸軍の部隊がいるのでそこで連絡を取ればいいと言われた。
そこで、ヴォルガ川の河口、カスピ海沿岸にあるアストラハンから船に乗ってバクーへと向かった。
そこで扶桑陸軍と連絡を取ったところ、なんか復帰の命令と准尉への昇進があった。

そしてそれとともにある命令書が届いていたのだった。

第13話　ちょっと改定。

バクーで命令書を受け取った俺。そこには「カールスラント戦線への異動を命じる」と書かれていた。

なぜ今このタイミングでカールスラントへの異動なのだろうか？

別に補給ができないというわけでもないというのに。

この近くには浦塩からシベリア鉄道で輸送ができる。

補給の問題はそこまでないと言える。

命令は命令なので従うしかないのであるが。

１９３９年の１１月の１７日、

バクーから一旦ロストフへ戻った。ここから鉄道でツァリーツィン（今のヴォルゴグラード）へ移動して、北回りで輸送機に乗ってカールスラントへと移動する。

ロストフに戻った際に今まで一緒にいた人たちに別れを告げに行った。みんな残念がってくれた。

そして鉄道に乗ってヴォルゴグラードに出発するその時だった。

「敵襲――！数え切れないほどのネウロイが来ています！」

ネウロイが大攻勢をかけてきた。
流石にこの状況でのんびり鉄道に乗って移動するわけにもいかない。
すぐに降りると貨物として載せてあった光武改に乗り込み、扶桑刀を装備すると列車から降りて戦闘に参加する…前に火器を装備するために補給所を探す。
補給所で今まで使っていた装備（ロストフにはオラーシャの魔導甲冑、ＫＶ―１がいたのでそのままにしておいた。）を受け取って、戦闘に参加する旨を伝える。
「こちら、扶桑の北郷准尉！戦闘に参加します！」
「了解した！貴官の参戦に感謝する！早速で悪いが左翼が激しい攻撃に晒されている！そちらの支援をおこなってくれ！」
「了解！」
指示に従って早速向かう。
着いた先では地を埋め尽くすほどのネウロイが所狭しと並んでこちらに向かっていた。
そしてそれを食い止めるためにオラーシャやカールスラントの陸戦ストライカーを履いた陸戦ウィッチ、そして魔導甲冑のＫＶ―１、ＳｔｕｇⅢが矢面に立って戦っていた。
「こちらは扶桑の北郷准尉だ！こちらの戦闘に参加する！」

「こちらオラーシャ戦車第４中隊、ジナイーダ・グリゴーリエヴィチ・コロバノフ大尉。了解した！西側の陸戦ストライカーの部隊と合流して戦ってくれ！」

「了解！」

早速西側の陸戦ストライカーのウィッチの部隊と合流して戦闘を始める。

８５ｍｍ砲の威力と射程はなかなかのものだが、地上型は大体が小型なので、陸戦ストライカーが狙えない遠くの比較的大型のやつを狙う。それともう一つ受け取ったドアノッカーで中距離の敵を攻撃。既にやや大きめのネウロイに対しては遠距離での威力不足が顕著になってきてはいるが小型ネウロイ相手ならまだまだ現役。

それも魔導甲冑が使用したのなら連射力、持てる弾薬数も相まってかなり使い勝手がいい。

（ちなみにこれはカールスラントの魔導甲冑、ｓｔｕｇⅢがサブウェポンとして使うものの予備があったのを借り受けた。

単発ではなく、弾倉を使って装填できるように改造されていて使いやすい。）

更に近距離の敵を攻撃、弾幕を張りたいときはベルト給弾式の２０ｍｍ機関砲を使用。これでも近くに寄った小型のネウロイには通じる。

いくら普通の陸戦ストライカーよりシールドが強いからと言って敵の攻撃を受け続けるのは得策ではない。

隠れられるのであれば隠れるべきである。特にこういう防衛戦ならそれができるからマギウスアーマーは長く効果的に戦える。

壁役として戦うのもいいがこっちは身を隠しつつ攻撃だけ当てる。これが賢いやり方というものである。

塹壕に身を隠しつつ攻撃の時だけ出て撃ってすぐに隠れられるのは人型の強みともいえよう。

また、塹壕に通路を作ることによってある程度は安全に弾薬を補給することもできた。

それ故に普段は携行弾薬の関係上からできなかった（あるいはする必要がなかった）３種類の火器で応戦なんてこともでき、長期戦でもある程度戦える。（燃料が切れれば戦えなくなるが。）

もっとも、空からの攻撃には弱くて通路をふさがれたら補給できなくなる。

空で争っている間に攻めてきたネウロイ達を次々始末していく。

遠距離から打ち込んで数を減らしていくが、文字通り地を覆いつくすような数の相手はどんどん距離を詰めてくる。

が、今回は他の魔導甲冑などもいるし、連射力のある武器もある。それに後方から攻

撃する味方だっている。
地上型ネウロイの攻撃には長期戦で耐えればいいだけのことだ。
３時間後、ついに攻めきれなかったネウロイは撤退していった。
空の敵も撤退したようで航空ウィッチたちが帰還していく。
そして、航空ウィッチたちから驚くべき情報がもたらされた。
ロストフに超大型の陸上型ネウロイが迫っている。
その情報を受け取った司令部は対策を検討することとなった。
その間、ロストフには毎日大量のネウロイが攻め込んできた。
そしてロストフに初めてネウロイが攻めてきてから四日後、ロストフは陥落した。

しかしその十日後、ロストフに侵略してきた超大型陸戦型ネウロイ、通称「ライプシュタンダーテ」を撃退。そして「ライプシュタンダーテ」の侵攻によって奪取されていたタガンロク付近まで一時的に戦線を押し返した。
これが、第二次ネウロイ大戦における初の人類の反攻となった。

ロストフにネウロイの大攻勢が始まって３日目の１１月２０日。司令部からの作戦が説明された。

その概要はこうである。
まず市街を放棄してドン川の南岸へと退却。ネウロイにあえてロストフへ入らせる。
ロストフには鉄道の線路などを含めて大量の鉄がある。「ライプシュタンダーテ」をロストフに釘付けにする。
そして南側から攻撃して小型ネウロイを南側へと引き付ける。
その隙をついてドネツ川を奪い、北、東方面からロストフを包囲してさらに敵の分散を誘い、３方から攻撃して「ライプシュタンダーテ」を撃破する。
ようは扶桑海事変で行われた挺身作戦と同じ、囮が引き付けて手薄になった本丸を叩く。
そういう作戦であった。
当然囮は多大なる犠牲を払うことになる。
しかし、度重なるネウロイの猛攻にこのままでは遠からずロストフは落ちてしまうだろう。
その前に一時的にロストフを奪われてでも敵を叩く。苦肉の策であった。
作戦決行時、俺は南側で囮の役をすることになる。全軍が南岸へと撤退を始めた。
俺もネウロイの進行を遅らせつつ後退していく。
―４０℃の寒さだ。ネウロイ達もかなり活動が鈍っている。俺たちが抵抗しながら

南岸へ渡ると、ドン川よりこちらに来ようとしなかった。
翌日、２１日。「ライプシュタンダーテ」がロストフの鉄道橋を占拠。そのまま動かなくなった。
奴は鉄道の線路などの鉄を食い荒らしながら大量のネウロイを生産してこちらに差し向けてきた。
「くそっ！どうして倒しても倒してもきりがなかったのかようやくわかったぜ！」
そんなことを言いながら機関銃を撃ち込む兵士。
一方、俺も味方の盾になりながらネウロイを倒して進行を防ぐ。
目と鼻の先で生産される小型ネウロイ達は次々とこちらに向かってくる。
「畜生！数が多すぎる！」
「瘴気が来ねえことを祈らねえとな…。」
「こちら第５４砲兵中隊！救援求む！誰か！」
「くそっ！来るんじゃねえ！来るなあああああ！」
「ぐあっ！畜生！誰か！機銃がやられた！援護頼む！」
「畜生！誰か！こいつに手当てを！」
無線から聞こえてくる阿鼻叫喚。どこもかなり苦戦している。
俺を含めた魔導甲冑と陸戦ウィッチの部隊はそれを援護していく。

「こちらコロバノフ大尉。ポイント、Ａ―５の支援をする。」
「こちらカールスラントのハンナ・シュトリッペル少尉！ポイント・Ｃ―２の援護に向かいます！」
「こちら北郷准尉！第５４砲兵中隊の援護に回る！」
「こちらカールスラント第一装甲師団のミカエラ・ヴィットマン曹長！ポイントＧ―７の支援をします！」
「マギウスアーマー！助かった！救援感謝します！」
「戦車第３小隊！救援に感謝する！」
ロストフ南岸での戦いは２日続き、１１月２３日。
オラーシャ帝国第３７軍によってボリシェクレピンスカヤが攻撃され、ネウロイ達はそちらへと兵を向けた。
翌日の２４日。南岸への圧力が目に見えて減っている。それでもまだ多い。
さらに翌日の２５日。さらに減っている。そしてついに全軍に総攻撃命令が下った。
凍結したドン川を越えて歩兵、戦車、陸戦ウィッチが突撃を開始していく。
当然のことながら数は減ったとはいえその場で生産しているのだ。まだまだその数は多い。

ネウロイの攻撃を受け次々に倒れていく兵士たち。そして撃破され数をさらに減らすネウロイ。
「い、いてえよ…。母さん…。」
「止まるな！進め！すす…」
「畜生！敵の抵抗が激しい！うわあああ！」
「うおおおお！これでもくらえネウロイ野郎！」
そして、攻撃を仕掛け始めた翌日、彼らが攻撃を仕掛けている間に。
「こちらコロバノフ大尉。打合せ通りに行くぞ。」
「シュトリッペル少尉、了解。」
「北郷准尉、了解。」
「ヴィットマン曹長、了解。」
魔導甲冑だけの小隊による突破作戦が行われた。

破壊された市街地を強引に突き進んで「ライプシュタンダーテ」のいる場所へと突撃を仕掛ける。
最初から南側の歩兵や戦車、陸戦ウィッチによって敵をくぎ付けにしつつ魔導甲冑によって「ライプシュタンダーテ」の撃破を目指す作戦だった。

そのために前日に全力で攻勢を仕掛けて護衛の数を減らしていた。
そのかいあって今や「ライプシュタンダーテ」の護衛は数えるほどしかいない。
正面を遮るものを撃破しつつ敵の本丸へと急ぐ。
途中、進路を止めに動こうとするネウロイ達もいたが、
「させるかあ！」
「マギウスアーマー！後は頼んだぞ！」
「邪魔はさせないわ！」
俺たちの後に続いて突撃した兵士たちの必死の攻撃によってこちらを追えない。
一気に肉薄してようやく「ライプシュタンダーテ」のもとにたどり着いた。
「こいつが敵の本丸か！まずは一発！」
一斉に徹甲弾を打ち込む。近距離での大口径砲による攻撃だ。敵は大きく傷ついた。
しかし、魔法力で再生速度が大幅に減ったとはいえその再生速度はまだまだはやく、
また、そのサイズから見れば傷は小さいほうだといえるだろう。
敵の反撃が来た。護衛はもちろん、「ライプシュタンダーテ」からも。どうやら弾幕で
押すタイプらしく、大量の小さくて短いビームと時折威力の高いビームがとんできた。
移動しながらシールドを張って遮蔽物に身を隠し、もう一度攻撃を繰り返す。
そして、今度は、徹甲弾を撃ち込んだ場所に榴弾を撃ちこんだ。

装甲を削られた場所に榴弾を撃ち込まれて大きくその身を削られたネウロイは悲鳴を上げる。
俺たちはフォーメーションを組んでぐるぐると奴の周りをまわりながらいろんな場所を砲撃によって削り取りコアを探す。
しかしこう大きいとコアの場所を探り当てるのもかなり難しい。
もう何発も撃ち込んでいるというのに！
その時だった。徹甲弾でうがった穴に榴弾を撃ち込んでできた傷の中に赤い多面体が見えた。
「コアだ！打ち込め！」
その言葉で砲弾を撃ち込もうとするが…。
「くそっ！こんな時に弾倉が弾切れ！」
「こっちもだ！」
急いで弾倉を変えようとするが、
「急いで！コアのあったところがみるみる修復されていきます！」
ええい！こうなったら！
「少尉！ちょっと失礼！」
「えっ!?キャッ！いきなり何を…私を踏み台にしたぁ!?」

俺はシュトリッペル少尉のＳｔｕｇⅢを踏み台にして大きく「ライプシュタンダーテ」に向かって跳躍する！

そして大砲を捨てて扶桑刀を抜き、奴に突き立てて捕まると足をつけて魔導履帯を発動。奴の装甲を魔力で削りながらコアへと向かっていく。

それを防ごうと飛行型のネウロイが俺に向かってきた。地上型の護衛も誤射を気にせずに打ち込んでくる。

「させるか！」

「突き進め！准尉！」

しかし、コロバノフ大尉とシュトリッペル少尉、ヴィットマン曹長の援護射撃で攻撃を仕掛けてきたネウロイ達は撃破されていく。

「うおおおおおお!!!」

雄たけびを上げながら突き進む。そして一気にコアのところまでたどり着くと、扶桑刀を突き立てた！

「これで終わりだ！」

一気に魔力を込めてコアへと扶桑刀を押し込んでいく。そして、ひび割れるような音がしたかと思うと、

ネウロイは一気に崩壊を始めた。所々で爆発が起きる。
じっとしていたら巻き込まれる！さっさと逃げなければ！
「こっちだ！受け止めてやる！」
「飛び降りて！」
大尉達が叫んだ。俺は迷わず飛び降りた。大尉達にぶつかる瞬間シールドが発動。
それにより運動エネルギーが相殺され、特にダメージもなく降りれた。
後ろではネウロイの崩壊によって周囲に被害が出ている。
「ここも危ない。さっさと逃げるぞ。」
「了解。」「了解。」「了解。」
４機全員で急いで逃げる。ある程度進むとネウロイは爆発した。大量の破片がまき散らされる。
「危ない！きゃっ!?」
「ヴィットマン曹長!?」
ひときわ大きい破片がとんできたのをミカエラ・ヴィットマン曹長がシールドで防いだ。しかし、落ちてきた破片によって町が壊された際に出た破片が横から機体にぶつかり機体が大破。行動不能になった。すぐにヴィットマン曹長をシールドを張ってかばう。

そして、破片が降り注ぎ終わると静寂が訪れた。
それを破ったのは無線だ。
「こちら司令部。『ライプシュタンダーテ』の撃破を確認。作戦は成功だ！」
とたんに歓声が湧き上がる。超大型ネウロイの撃破によって小型ネウロイ達は撤退。
我々が勝利したのだ。
その後、前述の通り一時的にだがタガンロク付近、ミウス川までネウロイ達は撤退。
どうやらあれがネウロイ達をここまで運んできていたらしい。

そして、この戦いの後、俺は先延ばしになっていたカールスラント戦線への異動を果たした。
オラーシャ軍は引き止めたかったようだが、一度出たものだし、受領してしまったので行かなければならない。
鉄道に乗ってツァリーツィンまで行くと北回りで輸送機に乗ってカールスラントへと出発した。
負傷したミカエラ・ヴィットマン曹長も大破したｓｔｕｇⅢと俺と一緒の便でカールスラントへと移送することになった。
ちなみに、その後ロストフでの戦いの情報とオラーシャ軍の引き止めの情報が入って

きた扶桑陸軍は命令を取り消そうとしたがその時にはもう既に俺はカールスラントへと旅立った後だった。

後、俺たちはこの戦いの功績でオラーシャ帝国英雄勲章が送られてきた。

１４話

１９４０年。カールスラント。ゼーロウ高地。ベルリンからわずか６０ｋｍほど東にあるここには実に１０万人ほどの兵隊が残されていた。

小ビフレスト作戦。カールスラントから民衆、政府、工業を避難させ南リベリオン大陸ノイエ・カールスラントへと疎開させるビフレスト作戦のうち、ベルリン近郊から民衆を避難させる作戦。

その作戦のためには避難が完了する間、ネウロイを食い止めておく必要があった。接近と撤退を繰り返して徐々に後退していく遅滞作戦を行い、何とか避難は完了したもののそれにより退路がふさがれた兵士たちはカールスラントに取り残されてしまう。

そのうちの一つがゼーロウ高地の部隊だった。

ゼーロウ高地から見渡すとそこには地を埋め尽くすほどの小型を引き連れた中型、大型ネウロイが何体も攻めてきていた。

近くでは味方の砲兵がひっきりなしに撃っている。

「デカ物もここまで多いと壮観だな。」

「司令！我々の部隊は包囲されています！」

「航空ウィッチの支援は？」
「現在、リバウからここまで扶桑の派遣航空部隊が飛んできてくれていますが、空の相手だけで手いっぱいな状況です。」
「…陸戦ウィッチの支援は？」「それまでの戦いで消耗して数が足りません。」
「…ベルリンは無事に撤退できた。しかし、空軍の地上支援も戦車の支援も期待できない。
何か一手なければ包囲殲滅も時間の問題…か。」

場面変わって防衛線、オーデル川北側の歩兵部隊。
そこでは激しい戦いが繰り広げられていた。
「撃てえ！撃ち込め！奴らに突破されたら我々はおしまいだ！何としても食い止めるぞ！」
歩兵部隊の奮闘によって防衛戦は守られていた。
しかし…
「シャイセ！大型ネウロイだ！」
大型ネウロイ。それは他のネウロイよりも装甲も火力も段違いで、ウィッチなしの戦力であっては撃破が非常に困難な存在である。

「ウィッチに支援を要請しろ！」
「了解しました！…支援要請！魔女部隊！支援要請！」
無線で支援要請をする。しばらくして返答があった。
「…支援要請は通りました。地上部隊はですがどうやっても一時間はかかるそうです。
空の部隊も３０分はかかると。」
「１時間に３０分か…。わかった。それまで持ち堪えるぞ！全部隊に伝えろ！」
「了解！」
「ネウロイどもめ。ここは通さないぞ…！」

「撃て！撃ちまくれ！…畜生！３０分も持たないぞ！」
「頼む！早く来てくれ…！」
市街で爆発が起きる。見るとネウロイがすぐそばまで侵入してきていた。
「くそ…。こいつで吹っ飛ばしてくる！支援を頼む！」
収束手榴弾を持った兵士が突っ込んだ。遮蔽物を盾にして少しづつ近づいていく。
そして…。
「くらえっ！…どうだ見たか！くそったれめ！」
収束手榴弾はネウロイにあたって爆発を起こしネウロイは撃破された。

しかし、兵士の近くで爆発が起きた。
「ぐあっ！」
幸い、けがをしたものの軽傷だった。しかし、顔を上げるとそこにはネウロイがいて兵士に大砲を向けていた。
「あ、あ…。」
恐怖のあまり腰を抜かす兵士。大砲が光を帯び始め、兵士は顔をそらす。数秒後には炭も残らず消し飛ぶであろうことが予想された。
しかし、それはどこからともなく飛んできた砲撃によって覆された。
ネウロイへの砲撃による爆風で吹き飛ばされる兵士。しかし、彼は生きている。
「ダイジョブだったねー？ちょっと手荒になっちゃったけど、ま、ダイジョブならそれでよし！」
「助けに来ましたー！」
「もう大丈夫でーす！」
彼を救ったのは魔導甲冑だった。リベリオン製の魔導甲冑、スタアⅢ。それが先ほどまでいたネウロイを吹き飛ばしたのだ。スタアⅢにはリベリオンの二人の陸戦ストライカーを履いたウィッチも乗っている。
突然の乱入者に矛先を向けるネウロイ。一斉にその照準がスタアⅢに向けられてい

た。
「へ、へロー。みなさん、こんにち…。」
　言い終わらないうちに大量の光線がスタアⅢに飛んできた。慌ててシールドを張るスタアⅢ。
「きゃ、きゃー！手厚い歓迎ねー！」
　雨のように飛んでくるそれらを全部防ぎながらも移動できないでいる。
　その時、スタアⅢが来た方向からからネウロイに対して大量の砲撃がとんできた。
　次々に撃破されるネウロイ達。残ったネウロイ達が砲撃が来た方向を向くと別の魔導甲冑、光武改が二刀の扶桑刀を抜いて二刀流でネウロイに迫っていき、迎撃をかわしながら次々に切り伏せていく。
「オー！助かりましたねー！隊長さーん！」
「スタア小隊！だからうかつに出るなって言ったでしょ！」
「ごめんなさーい、でも急がないとやられちゃうところだったよ！」
「それはそうだけど！」
　言い合いをしていると砲撃がとんできた。まだそこらにはネウロイがいる。
「ああ、もう！とりあえず話はあとだ！目の前のやつら全部倒すぞ！」
「了解でーす！」

市街に侵入した１０体ほどのネウロイはあっという間に殲滅されてしまった。
倒し終わったころに２機の魔導甲冑が来た方向から更に４機の魔導甲冑と８機の陸戦ストライカーが来た。
「たいちょーう！おいていかないでくださいよー！」
もう一つの光武改。こちらは少し大きい。複座型のようだ。
「一郎！あっちの平原に大型が２体！恐らくこいつらはあいつらに率いられてる！」
カールスラントの魔導甲冑、アイゼンクライト。ＳｔｕｇⅢの後継機にして最新鋭機。
「私たちだけでもやれなくはないですが勝手するとやかましいから仕方なく指示を仰ぎに来て差し上げましたわ！」
ブリタニアの魔導甲冑、セイバー。
「はいはい、そうですね。…それでどうする？二人とも。っと、またお代わりだ。」
ガリアの魔導甲冑、エトワール。
みると、ネウロイ達がさらに２０体ほど進軍してきている。
突然現れた６機の魔導甲冑を中心とした部隊はそいつらに攻撃を加えていく。
しかし、そのどれもが国籍がバラバラの装備だった。
目の前に来ていたネウロイ達を砲撃と近接攻撃で次々に撃破していく魔導甲冑たち。

２０体は来ていたはずなのにあっという間にいなくなってしまった。
「よしっと。それで、どうするんですか？」
「そうね…、その２体の位置と距離はどれくらい？進行方向は？」
今度は無線を通じて別の女性の声が聞こえてきた。どうやら指揮官のようだ。
「３ｋｍくらいかな。相手はお互いにギリギリカバーしあえるかどうかくらい。位置は右がポイント２―３―５。」
「そこなら…。よし！まずは右側の敵に３０度右斜めから進撃して右側から撃破！その後左側も撃破するわよ！」
そして今度は突撃開始地点へと移動して護衛を引き連れた大型へと向かっていく。
「各員！パンツァーカイルを組め！突っ込むぞ！」
「了解！」
きれいに楔形陣形へと編隊していく。先頭は魔導甲冑、両翼に陸戦ストライカー。
そして後方は先ほどまでいた場所から来た歩兵たちが。しかし、歩兵たちの数は少ない。
我々もただ見ている場合ではない。
「そこの陸戦ウィッチの部隊！我々も一緒に突撃する！後方は任せろ！」
「了解した！」

そこからはすさまじかった。敵の砲撃をものともせずに進撃していく。横からくる敵に対しては陸戦ストライカーが寄せ付けなかった。

あっという間に大型に接敵すると、パンツァーカイルを崩して今度は魔導甲冑と陸戦ストライカーは横隊を組む。そして一斉に大型へと砲撃をくわえる。

ひとたまりもなくやられる大型。

続けてもう一体に対しても同様の突撃と砲撃をくわえる。しかし…。

「隊長さーん!こっちもう弾少ないねー!」

「こっちもだ!あと3発!」

「僕も!あと2発!」

連続した戦闘により砲弾が残り少なくなっていた。

「よし!じゃあいつものだ!支援頼む!」

そういうと光武改は大型ネウロイに向かって突撃を仕掛けた。

「了解!近づかせないよ!」

「はいはーい、邪魔しちゃダメデスよー?」

「やれやれ、たまにはそれもなく仕留めたいものですわ。」

「あはは…。それはそうなんだけど…ねっ!」

彼女たちの援護によって光武に対して護衛達は横から砲撃を光武にくわえることが

できない。
光武改が扶桑刀を抜きながら大型ネウロイの目の前へと進んでいく。
そして大型ネウロイのビームをシールドではじくと目の前で跳躍。何メートルも大きく跳んで４本ある足のうち２本を切り飛ばした。
とたんにバランスを崩して倒れこむネウロイ。
そして光武改は反転すると扶桑刀に魔法力を込め地面に倒れてきていた頭を切りつける！
扶桑刀はすさまじいまでの魔法力によって光り輝いている。それに切り付けられた大型ネウロイはバターのように切り裂かれ３枚におろされた後、消滅した。
戦いが終わると彼女たちは部隊へと近づいてきた。
「ありがとう、助かった。君たちは？見たところ装備がばらばらのようだが所属は一体？」
「私は扶桑陸軍欧州派遣団第１戦車中隊第１小隊の北郷一」「私はカールスラント第１装甲師団第５戦車大隊第一戦車中隊第４小隊のミカエラ「私はリベリオン陸軍欧州派遣団第２戦車中隊第２小隊のアリサ「私はブリタニア陸軍第２７装甲師団第２戦車中隊第１小隊のセシリア「私はガリア陸軍第４１戦車大隊第１中隊第２小隊のピエレット・アル…」

とたんにそれぞれが同時に所属を言い出した。
「待ちたまえ！　君たちは同じ隊ではないのかね⁉　先ほどは見事な連携をしていたようだが⁉　もっとこう、共通の隊名とかないのかね！」
「・・・・・・・・・・・・・」
とたんに沈黙が訪れた。
「そういわれましても…私たちは原隊とはぐれたいわゆる迷子たちの寄せ集めでして…。」
「すぐに味方と合流できると思って一時的に組んだだけで隊名とか考えずにそのままずるずると…。」
「撤退しても撤退しても一向に味方に会えず、合流しても小さい規模、たまに連隊規模の集合場所に行っても補給を受けた途端襲撃にあって殿を務めたらまたはぐれるの繰り返しねー。」
「無線を拾っていってみたら襲撃にあってて襲撃を撃退して生き残りとともにまた後退なんてこともあったね。」
「すべての魔導甲冑と陸戦ストライカー、航空ストライカーに精通している隊長がいなければ危ないところでしたわね。」
「南側からようやくベルリンまで来たと思ったら小ビフレスト作戦でみんな撤退を始め

てたし…。」

なんということだ。彼らはここまでずっと運悪く撤退を繰り返していたのだ。

この迷子大隊ともいうべき彼らはここまでずっと戦い抜いてきたのか。共通の隊名もなく。

このスオムス独立義勇軍のように国際色豊かな部隊は一体だれが指揮官をしているのだろうか。

「失礼します。私は扶桑陸軍欧州派遣団第1装甲師団第2連隊の横山一美少佐です。一応この部隊の指揮を執っております。」

ようやく指揮官が出てきた。どうやら後方で指揮を執っていたようだ。それで戦闘が終了したのでこちらに来たのだろう。

お互いに所属と階級と自己紹介をかわす。

「それで、あなたがこの部隊の指揮官ということだが…。一体あなた方を何と呼べばよろしいのだろうか。」

「えっ。…そうですね…。」

リベリオンの魔導甲冑のパイロットが横から入ってきた。

「あれでいいんじゃないですかー？ほら、隊長さんがよく歌ってる曲の…。」

「ああ、いいかもしれない！みんなあの曲歌ってるし。」

「半ば隊歌みたいになってますものねぇ…。」
「そうね、それじゃあそれでいきましょう。」
何やら目の前で隊名を決めている。そんなに適当でいいのだろうか。
「えー、ごほん。改めて紹介します。我々は統合戦闘戦車団」

「「「「「帝国華撃団です！」」」」」

ここまでに至るまでの話は、俺がカールスラントへと転属した時にまでさかのぼる…。

第十五話

まずはカールスラントへと転属されてからのことを手短に話そう。

スオムスを経由してベルリンでまずはミカエラ・ヴィットマン曹長と彼女の機体を降ろして、彼女をウィッチ病院へと運んだ後、今度はオストマルクの国境にある前線基地へと輸送機で向かう。

そこで扶桑から来た他の部隊と合流する。出迎えてくれたのは、扶桑海事変でも一緒に戦ったことのある人物だった。

「扶桑陸軍欧州派遣団第1戦車師団第2連隊第1大隊へようこそ、北郷一郎准尉。ここの指揮官を務める横山一美少佐です。久しぶりね。扶桑海事変以来かしら。」

なんと、そこにいたのは扶桑海事変の時に一緒に戦った横山大尉（当時）だった。あれから昇進したらしい。

少佐とは、これまた随分と出世したものだ。すごいなぁ。

素直に感心する他ない。

オストマルクとの国境は既に激戦区だ。既にここも激しい戦闘を繰り広げている。

地上でもネウロイの波が押し寄せてきていた。

おおよそ4ヶ月ほど戦っていただろうか。俺はその間精力的に戦って、精力的に働いて、それなりの頻度で空戦ウィッチたちの回収を行っていた。

しかし、状況は悪くなる一方だ。

まず数が多すぎて対処できない。そして、超大型による被害も多かった。（こっちはルーデル大佐とかいうすごい人が倒してくれたりもしたが。）その巨大砲で前線基地をやられたりして前線はどんどん後退している。

俺も中隊長として大型の対処を主にやっていたが、戦局を変えられるはずもない。部隊とともに後退を繰り返している。

ある時、超大型による襲撃で前線基地がやられた。超大型自体はシュトューカウィッチたちの活躍によって開いた敵の軍勢の穴から突撃して撃退できたのだが、このままでは補給もままならないので後退することになった。

前線基地にいた整備班などの生き残りと物資をトラックに積んで集合場所へと後退する。

ここから更に次の前線基地へと後退するはずだったのだが…。

「敵襲ーー！ネウロイです！」

ここで運悪くネウロイの襲撃にあった。

「なんだってこんな時に…！総員！戦闘配置！非戦闘員は中心へと退避せよ！」
そしてこれまた運の悪いことにこの時、ネウロイに囲まれていた。
「少佐！まずいです！ネウロイに囲まれています！」
「何ですって…！包囲の一番薄い場所を探して！そこから突破するわよ！」
包囲された場合まず抜け出すことを考えるのが先決だ。そうでなければ弱い側面や後方から攻められてしまう。
それ故に包囲の一番戦力の低いところに戦力を集中して突破して抜け出すことは何一つとして不自然なことではない。
「しかし、その方向は味方のいる場所とは別の方向です！」
「やむを得ないわ！まずはここを切り抜けることが先決よ！北郷准尉の小隊は退路を切り開いて！そこからは脱出を支援。殿を務めつつ撤退して。その他のウィッチは他の歩兵とともに戦線を維持しつつ後退！」
「了解。」
指示されたとおりにまずは敵の包囲の薄いところを突破して、その後、両横から穴を埋めようとするネウロイ達を牽制。退路を維持しつつ、非戦闘員を先頭に撤退してくる味方の援護に回る。
「こちらから脱出を！退路は維持します！」

「了解！」
撤退を支援していると、戦線を維持しつつ後退していた部隊が来た。
「あなたたちで最後ですか！」
「はい！」
「今から1分間の一斉放火で目の前の敵を撃破したら煙幕を張ります！それに合わせて全速で後退を！」
「了解！」
目の前の敵を一気に攻撃して撃破。見える範囲に敵がいないことを確認すると追撃が来ないうちに後退。
奴らが苦手とする森を通ってあらかじめ指示されたポイントへと急行する。
他の味方との合流はできないが自分の部隊とはちゃんと合流できた。すぐさま少佐への報告を終える。
「ご苦労様でした。十分な休息をとって頂戴。」
「はっ。」
横山少佐が通信兵に話しかける。先ほどは包囲を受けていたこともあり無線を飛ばす暇もなかったが、それが落ち着いた今部隊との連絡を図る。

「合流予定だった部隊との連絡はとれた？」
「はい。何とか無線が通じました。どうぞ。」
　そう言って受話器を渡す通信兵。
「こちら第一大隊の横山少佐。撤退途中にネウロイの襲撃と包囲を受けて進路を変更。合流は困難。どうぞ。」
「こちら第二大隊。了解した。予定時刻に我々は予定されていた前線基地へと後退する。そちらも可能ならば直接基地へと向かわれたし。どうぞ。」
「了解しました。通信終わり。」
　無線を切ると受話器を通信兵へと返す。
「可能ならば前線基地へ…か。しかし、まずいわね、今残っている物資じゃそう長くもたないわ。こうなったら扶桑ではない部隊と合流して物資を融通してもらうしか…。この近くだと…。通信兵！ここの部隊と連絡取れる？」
「やってみます。……」

　ネウロイの包囲を切り抜けた翌朝、少佐がみんなを集めて説明を行う。
「傾注！私たちはこれよりリベリオンの部隊のいる方向へと進路を取ります。リベリオンの部隊と合流してかれらから物資の融通を図り、その後、予定されていた前線基地へ

と後退。ここまでで何か質問は？……無いようですね、それでは解散！」

それからリベリオンの部隊のほうへと進軍を始める。幸い、道中はネウロイに襲われることはなかった。

しかし、接触しようとしていた部隊がいるはずの場所からおよそ２０ｋｍほどの地点に差し掛かった時、

唐突に戦闘音が聞こえてきた。散発的な大砲の音。これは…。

「横山少佐、とりあえず俺たちの小隊だけで様子を確かめてきます。」

「ええ、お願い。」

戦闘音のする方向に近づいていくと、にわかにビームの光なども見えた。周りが森で光量も低いからかそれなりに目立つ。

「ネウロイか！」

やはりネウロイがいるようだ。さらに近づいてみてみると、魔導甲冑…あれはリベリオンの最新型、スタアⅢか。スタアⅢと２人の陸戦ウィッチが地上型のネウロイと戦っている。

「ひーん！数が多すぎマース！」「もう弾もないわ！」「囲まれてるしもうだめだ～！わっ！右！シールド！」

ずいぶんと賑やかだがかなり戦況は悪そうだ。幸い、魔導甲冑の防御能力のおかげでまだ持ち堪えているが時間の問題だろう。数のごり押しで消耗させられている。いろいろ気になることはあるがとりあえず助けるのが先だな。

しかし、この数はいくら光武改と陸戦ストライカーでも分が悪い。横山少佐に無線を送る。

「こちら光武第一小隊。魔導甲冑の小隊の友軍が攻撃を受けています。このままではやられるのも時間の問題です。また、現状の戦力では敵の殲滅は困難。彼女たちを救出後にそちらに敵を誘導して合流して迎撃することを提案します。」

「こちら横山少佐。了解。直ちに救援してこちらへ。」

「了解。」

提案は通った。その直後、全域通信で横山少佐から付近の部隊への通達があった。あの小隊が無線を送っていないのは何か事情があったのだろうし、付近に敵がいることを知らせていないだろう。しかし他に襲撃を受けたという無線も入っていないので恐らくはこの近くに敵がいることを知らないはず。それでこの全域通信といったところか。それにしても彼女たちは無線に気が付いている様子がない。恐らく無線が壊れたか。

「よしっ！俺ともう一人で横合いからつつくからその隙にあの小隊に近づいて煙幕弾を

あの小隊近くに投げ込め。そしてあの小隊を連れて部隊の駐留場所へ。」

「了解。」

一緒に来ていた陸戦ウィッチに伝えて煙幕弾を渡して、できるだけあの小隊とは反対方向になる場所へと移動する。そして彼女が所定の位置に着いたことを確認するとボフォース４０ｍｍで攻撃を仕掛けていく。

こういう場面では連射力で制圧すべし。とはいえ弾がもったいないので、当てやすいできるだけ近距離の敵に狙うようにしているが。

敵の注意はこちらに向いた。ちらっと彼女たちの方向を見ると煙幕が張られているのが見えた。

ネウロイ達もそれに気が付いて追撃しようとする個体もいたがそれらを攻撃して注意をこちらに向けさせる。

煙幕が晴れるまで注意を引き付けていたが、姿は見えない。どうやら無事脱出してくれたようだ。

こちらも逃げる頃合いだろう。煙幕をばらまいてすたこらさっさと撤退する。敵の攻撃が後ろからきているが後ろから攻撃がくるとわかっていれば後ろにシールドを張ったまま逃げればいいだけだ。

全部はじいて全速で撤退する。味方の陣地が見えてきた。とっくに味方は戦闘態勢

を整えている。
　見るとリベリオンの小隊も無事にここについているようだ。こうなればこっちのものだ。
　俺たちの後をつけてきたネウロイ達を手厚い歓迎で出迎えた後、リベリオンの小隊と話をする。
「救援に感謝しまス。危ないところでしたー。ワタシはリベリオン陸軍第三機甲師団Ａ中隊所属の陸軍軍曹アリサ・グリーン・プールでーす。」
「同じくリベリオン陸軍軍曹のケイです。」「同じくリベリオン陸軍軍曹、ナオミです。」
　小隊の人たちが自己紹介した後、俺たちも自己紹介を返す。その後、事情を聴くと、
「無線が急に壊れて信号弾も打ち上げられずに救援を呼べなかったのでーす。本当に助かりましたー。」
　などと説明している。やはりか。
「扶桑陸軍第一師団第二連隊第一戦車大隊の横山少佐です。私たちは撤退途中にネウロイに襲われて他の部隊とはぐれ、別の合流地点へと向かう予定なのですが、そこまで行くための物資が足りず、リベリオン陸軍と連絡を取って物資の融通をしてもらうところだったのです。」
「オーウ、それは大変でしたね…。その部隊、ワタシたちの部隊です。だから私たちが先

導しまーす！ついてきてくださーい！」
　こちらの事情を聴いたアリサ軍曹は道案内をかってでてくれた。それについていく俺たち。
　しかし、駐留しているという場所に向かっているとき、
「緊急！こちらリベリオン第3機甲師団第一大隊！我々は攻撃を受けている！部隊壊滅の恐れあり！至急救援を頼む！」
　という全域通信が入った。
「聞いたわね！魔導甲冑は直ちに陸戦ウィッチを連れて急行！残った部隊も後に続いて救援するわよ！」
「了解！」「ワタシたちも向かいまーす！」
　アリサ軍曹たちとともに、直ちに俺たちは現場へと急行する。
　それまで向かっていたこともあってすぐさま現場に到着する。
「扶桑陸軍第一戦車師団第1中隊の北郷准尉他6名！戦闘に参加します！」
「同じく扶桑陸軍第一戦車師団第2中隊の橘曹長他6名、戦闘に参加します！」
「遅れて申し訳ありませーン！アリサ軍曹他2名、ただいま戻りましたー！」
「ウィッチだ！扶桑のウィッチたちが救援に来てくれたぞ！」

「アリサ軍曹たちも戻ってきたぞ！これで何とかなるかもしれない！」
「アリサ軍曹！ここは俺達が食い止めるので今のうちに弾薬と燃料だけでも補給を！」
「わかりましたー！ありがとうございまーす！」
扶桑海事変の戦訓で欧州の弾薬などとの合一化をしてはいたが、大砲の弾薬まで同じではなかったし、すぐに合流して補給を済ませるつもりだったから補給がまだ済んでおらず十分に能力を発揮できないアリサ軍曹の小隊を下がらせて代わりに前に出る。
ネウロイ達は大量にいた。とにかく近くの味方に寄せないようにする。
しかしとんでもなく数が多い。まるで津波のごとく押し寄せてくる。それに距離も近い。ここは機銃での対処のほうがいい。
しかし、２０ｍｍはウェポンラックの分を考えても弾数が少なく、すぐに弾が切れた。所詮はサブウェポン扱いだったし…。
「くそっ！すまないがエリコンｓｓの２０ｍｍの弾はないか！」
「すまないがいまこの場にはない！今取りに行かせるからその間代わりに５０キャリバーを持っていけ！」
「助かる！」
２０ｍｍ機関砲を置いて代わりにＭ２ブローニングを受け取る。
小型ネウロイならごく近距離に限るがこれでもある程度通用した。

中型になると流石に装甲も硬くて通用しないので素直に４０ｍｍを使ったが。
しばらく戦闘を続けているとアリサ軍曹達も補給を済ませてきたようだ。
「お待たせしましたー！」
と、言って戦闘に加わる。
「扶桑陸軍戦車師団第一大隊！ただいま到着いたしました！」
後からついてきていた扶桑陸軍の味方も到着したようだ。
そしてそれと同時に斜め上方向からビームが飛んできた。
かなりの威力だ。着弾とともに大爆発を起こした。味方も巻き込まれていた。
「大変だ！今の砲撃で中佐がやられた！」
どうやらリベリオンの部隊の指揮官がやられたらしい。一時的に指揮系統に混乱が生じ、リベリオンの部隊に混乱が広がる。
周囲を見渡すと、森の中から黒い身体に赤いパネルを貼り付けたシルエットが飛び出ていた。
「げぇーっ！まじかよあれ!?」
「ワーオ、おっきいねぇー…。」
恐らくあれがこいつらを連れてきた張本人だろう。アリサ軍曹達が追いかけられていたのはこいつらの斥候か別働隊だったのかもしれない。

時間単位で生産する数は少ないものの小型の陸戦ネウロイを生産しながら移動している。これがあれだけ数がいた原因か。

どちらにしろ、あんなのがきたら防御力のあるウィッチはともかく他の部隊はすり潰される。そうなれば終わりだ。

よく見ると航空ウィッチ達が巨大ネウロイに襲いかかっている。あれの被害は酷いものになるからだろう。

巨大ネウロイは攻撃を受けながらも森の中を進軍している。

しかし、攻撃しているウィッチ達の中に爆撃ウィッチ達はいなかった。恐らく、あの部隊は制空任務を受けた部隊なのだろう。

圧倒的に攻撃力が足りない。周りを飛びながらコアを探して破壊するにも装甲が厚く、また、先ほどの制空で弾を消費してしまったはずだ。

今、爆撃ウィッチに応援を要請しているところかもしれない。

しかし、あの進軍スピードでは爆撃ウィッチ達が空を飛んでくるとしても、ネウロイに絶賛襲われている今、後退の速度が遅いこちらは先に追いつかれるだろう。

それに、幸いあの高威力のビームは航空ウィッチ達へ向けられていてこちらには向いていない。

か、いつこちらに向けられるかわからない。もう一度こちらを狙われたらひとたまり

もない。できる限り早めに対処しなければならない。
しかし、襲われている今陸戦ウィッチが全員あいつの攻撃に回るわけにはいかない。
少人数しか無理だろう。俺は横山少佐に提案した。
「こちら北郷准尉！横山少佐、聞こえますか！」
「こちら横山少佐！どうした！」
「提案があります！俺だけを攻撃に回して巨大ネウロイを叩きましょう！このまま守っていてもやられます！早めにあいつを倒さないと！この森の中ならこの数でも陸戦ウィッチだけでしばらくは守れるでしょう！それに巨大ネウロイへの接近も平地に比べれば容易です。制空権もこっちにあるので空の妨害は心配いりません。光武改の攻撃力ならあいつの装甲も抜けます！」
「無茶よ！あの大きさではコアを見つけるのも一苦労よ！あなただけじゃ……！……それでもこのままじゃ全滅…か…。」
「なら私も行きます！行かせてください！一人なら無理でも二人ならあるいは！」
「橘曹長…。」
「じゃあワタシもいかせてくださーい！扶桑には三本の矢とかいうエピソードがあるってききまーす！三機ならきっと勝てまーす！」
アリサ軍曹ものってきた。

「コアならまだ断言はできませんがもしかしたらしらみつぶしに探すより早く発見できるかもしれない方法ならあります！こんな場面で試すのは不安ですが。」

横山少佐は少し考えた後、

「…わかったわ。リベリオンの部隊の方もよろしいでしょうか。」

「ええ。貴女達に託します。」

急遽代理の指揮官となった人物が返事をする。了承を得た俺たちはまずは集合してそれから3機同時に味方の戦線から離脱。そして巨大ネウロイの元へと急行する。

道中で散発的に襲ってくるネウロイを蹴散らしながらすぐそばまで迫っていた巨大ネウロイの元へとたどり着く。

8つの足で移動する巨大ネウロイ。その周りには大量の護衛がいた。この数を全部相手するわけにはいかない。

ここまでに来る敵に接触したせいであいつらもそろそろここに来ることを予期してるだろう。奇襲も短時間しか効果がないはずだ。短期決戦で決めるしかない。

俺たちは隠れて様子を見ながら話をする。

「聞いてくれ！まずは俺があの巨大ネウロイに接触する！それを後ろから援護！」

「ええっ!?」

「無茶に無茶を重ねるのはよくないでーす！スーアサイドでーす！第一接触してどうす

るんですかー！」
「接触すればコアがわかるかもしれない！俺の固有魔法は金属操作。それと金属部分の走査もできる！ネウロイは金属でできているからもしかしたらそれでコアを発見できるかもしれない。俺の光武改はフィッティングしてあるから光武改の上から固有魔法を発動できる。増幅された魔法力で無理やりあいつの体を調べる！」
「こんな時に何ですがなんだか響きがいやらしいです…。」
「じゃあ触診すると言おう！それで発見したら俺が射撃地点を伝えるからそこに集中砲火！わかったか？」
「了解しました。」
「ワタシも了解でーす。」
それでは作戦開始だ！位置を変更した後、まずは煙幕弾を投げ込んだ。それが合図でネウロイ達との交戦が始まる。
まっすぐ煙幕の中を突っ切る。これで少しでも距離を縮める。
ビームが撃たれた場合、煙幕は一時的に穴が開く。しかし、次々に吐き出す煙でまたすぐに隠れる。
やみくもに撃ってくるビームが飛び交う中をシールドを張りながら突っ切る。
煙幕を抜けた先には巨大ネウロイが待っていた。即座に反応したネウロイ達は俺に

狙いをつける。
目の前の進行するのに邪魔な奴だけボフォースで４連発して撃破してさらに距離を詰める。
しかし、それを阻もうと目の前にネウロイ達が移動しようとしている。
その時、そのネウロイ達めがけて榴弾が飛んできて足をやられたネウロイは動きを止める。
見るとアリサ軍曹たちのようだ。的確に邪魔な敵だけ攻撃してくれている。
「ナイス援護！」
思わずそう言った。
「距離３０ｍ…！」
そこで一気に踏み込んで思いっきり跳んだ。足の一本に魔法力で引っ付く。そこで小型のネウロイ達は一斉に俺のほうを向いた。しかし、俺が巨大ネウロイに引っ付いたことで俺を撃てば巨大ネウロイにあたる状況になった。
「うおっと!?」
しかし、当然引っ付かれた巨大ネウロイは俺を振り落とそうと足をふるっている。
小型ネウロイ達も巨大ネウロイにあたるのも構わず大量のビームを放ってくる。
ここでは調べづらい！俺は巨大ネウロイの足を走って登り、関節の部分あたりで胴体

のほうへとジャンプして、胴体の上に乗っかった。
さすがにここを撃つわけにもいかず、小型ネウロイ達も攻撃をやめた。
そして俺は巨大ネウロイの体に手を当てて身体を走査する。手を当てたところから広がっていくようにネウロイの体の内部がわかっていく。その中に一部、他とは少し違う反応がするとこらがあった。
「そこか！」
俺は頭のように見える部分に攻撃をする。ボフォースでまずは一発。そして通信を入れる。
「今撃った部分に攻撃を集中してくれ！」
「了解！」
全員で一斉に頭に攻撃を仕掛けると、大きな穴が開いた。そこから赤い物体が見える。
「コアだ！」
しかしその時、
「きゃぁっ！」
橘曹長の軽い悲鳴が通信の向こうから聞こえる。
「どうした!?」

「駄目です！敵の攻撃が激しくなって狙いが定まりません！」
「こっちもねーー！」
俺に砲撃ができないから狙いをあちらに変えたらしい。砲撃が二人に集中していた。
それならば俺が攻撃するしかない。が、ネウロイは体をめちゃくちゃに振り回してこっちもしがみつくのでやっとだ。その隙にコアの周辺を修復している。
が、その時、機関銃の連射音が聞こえたかと思うとコアが破壊された。
銃弾のとんできた方向を見ると先ほどから制空戦闘をしていた航空ウィッチだった。
「やった！」
コアが無くなると同時に糸が切れたように崩れ落ちる巨大ネウロイ。その上に乗っていた俺も浮遊感を感じる。
あっ、これやばいやつだ。早急に退避せねば。
「二人とも！シールドを全開！」
「了解！」
それだけ言うと急いで俺も逃げる。小型ネウロイ達は動きを止めている。
巨大ネウロイの体の上から思いっきりジャンプする。そして空中で巨大ネウロイの爆発をシールドで受け止めて吹き飛ばされる。
丁度初代プリキュアのＯＰの中盤あたりのキュアブラックのような感じで腕を回し

ながら空中を舞う俺。
その方向にはアリサ軍曹と橘曹長がいた。
二人の上を悠々と飛び越して森の上を飛んでいき、シールドを全開にしてなるべく5点着地の形になるようにして衝撃を逃がしつつ着地…する途中で木に激突した。まあ森だしね。
「だ、大丈夫ですかー？」
「無事ですかー？」
追いついた二人は俺を心配して声をかけてくれた。
「ああ、何とか。」
その時、通信が聞こえた。
「大丈夫ですかー！吹き飛ばされた魔導甲冑のパイロットさん！」
とどめを刺した航空ウィッチが通信を送ってきたようだ。
「大丈夫だ。救援、感謝する。」
そう言って航空ウィッチに手を振る。そして、敬礼して見送った。
その後、無線で巨大ネウロイを倒したことを報告する。
「こちらでも確認しました。よくやったわ。帰投してください。」
通信が終わると3人で味方の陣地へと戻る。

陣地に戻ると兵士たちによる歓声をもって出迎えられた。
「急に波が引くようにネウロイ達が撤退していったんだ！」
「やってくれましたね！」
光武改を置いて戦闘の経過を報告し終えると、橘曹長とアリサ軍曹が話しかけてきた。
「私たちが…倒したんですよね。あんなおっきいの。」
「そうだよ！ワタシたちが倒したんだよ！」
二人とも感動しているようだった。
「ああ、そうだな。ま、とどめは譲ってしまったけどな。」
それにあれは制空権の確保と地形など、様々な要因があっての奇襲だが、まあもう過ぎたことは言うまい。いまは
この勝利を喜ぼう。この勝利は、決して少なくない犠牲を払ったのだから。
この戦闘でこのリベリオン陸軍の第一大隊は指揮官を失い、更に3分の2ほどに人数を減らしていた。
部隊の再編のため、連隊の基地のある場所まで後退することになる。
相変わらず物資の少ない俺たちは、この後退についていき、部隊と共闘してリベリオ

ンの基地を目指し、そこで最低限の物資の融通をしてもらって自分たちの基地を目指すということになったのだった…。